[著]虚淵玄
(ニトロプラス)
[イラスト]中央東口
Eisen Flügel II
アイゼンフリューゲル
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

アイゼンフリューゲル２

虚淵玄（ニトロプラス）
イラスト　中央東口

Eisen Flügel II
アイゼンフリューゲル
[著]虚淵玄(ニトロプラス)
[イラスト]中央東口

Contents

［第四章］超音の翼……………013

［第五章］戦乱の翼……………083

［エピローグ］悠久の翼…………199

デザイン／小林美穂代＋ベイブリッジ・スタジオ

目次

[第四章] 超音の翼
[第五章] 戦乱の翼
[エピローグ] 悠久の翼

我が友、Ｔ□Ｉに本書を捧げる。

燃え尽きてなお、目に焼きついた輝きは心の中で永遠だ。

Eisen Flügel II

主要登場人物紹介

カール・シュニッツ
主人公。「プロジェクト・ブリッツフォーゲル」専属テストパイロット。

ヘレン・ヴァイニンガー
ヴァイニンガー博士の孫娘。カールの恋人。

グスタフ・ヴァイニンガー博士
「プロジェクト・ブリッツフォーゲル」研究主任。無頼の老技術者。

オットー＆アルベルト
「プロジェクト・ブリッツフォーゲル」開発チームスタッフ。ヴァイニンガー博士の直弟子。

クルツ
ヴァイニンガー飛行場専任通信士。

エリック
ヘレンの弟。幼生龍のジークフリードを飼っている少年。

ゲプハルト・ミュラー
シルヴァーナ国空軍中佐。

［第四章］

超音の翼

[第四章] 超音の翼

1

　木箱の中から運び出された鉄塊を一目見ただけで、ヘレンは身震いを感じた。
　今日までここヴァイニンガー飛行場において様々な機械類を目にしてきた彼女だが、同じ鉄とオイルの構造物でありながら、いま目の前で格納庫の床に横たえられているモノには、明らかに他ほかと異なる剣けん呑のんな雰囲気がある。
　人を殺すために設計されたマシンというのは、素しろ人うと目めにもそれと解わかるほどに、存在感からして異質なものだ。
　ルドルファ20㎜口径機関砲――車載機銃、あるいは分隊支援火器としてシルヴァーナ軍に広く普及する汎はん用よう機関砲である。この程度の銃ですら搭載できないようなら戦闘機として問題外、という試金石の役割には相応ふさわしい。その挙動や特性が知り尽くされている定番武装であることも、空軍が試験項目として指定してきた理由なのだろう。
　機首にただ一門のみ20㎜砲を搭載するというのは戦闘機の武装としては異例のものだが、あくまでテスト用プラットフォームとして機銃を積み込むブリッツフォーゲルには実戦性能など要求されていない。
　可動部の動作を確認するオットーと、弾帯の状態をチェックしているアルベルトの手つきが、なぜか明らかに勝手知ったる熟練ぶりなのを見て、ヘレンは怪け訝げんに思う。
「……ずいぶんと扱い慣れてるのね」
「当たり前だ。俺おれやオットーだけじゃない。ここにいる人間は大方が、軍の整備隊にいたからな」
　ヘレンは初耳だった。ヴァルハラ戦役の影を記憶に背負っているのは、カールだけではなかったのだ。
「戦争の真っ最中に、手に職つけちまうってのはな、大方そういう成

り行きさ」
「そう……」
　いざ真実を知ってしまうと、ヘレンはえもいわれぬ疎外感に苛さいなまれた。戦時中といえばまだ学生だった彼女は、祖父の先見でいち早く疎開できたこともあり、当時については銃後の暮らしの不自由を憶おぼえているくらいなもので、さほど凄せい惨さんな経験をしたわけでもない。
　今まで日々の生活を共にしていた仲間たちが、彼女とは掛け離れた過去を共有していたというのは、このヴァイニンガー飛行場で安穏と送ってきた長閑のどかな暮らしが、まるで絵空事であったと否定されるかのようで、ヘレンには厭いやだった。
「それにしても、いったいどういう心境の変化だ？」
　機銃の点検を済ませたオットーは、格納庫の奥に駐機されているブリッツフォーゲルを見み遣やり、独りごちるように呟つぶやく。
　実験機のコックピットでも、カールが独り黙々と作業を続けている。機銃の搭載に伴い必要になる操作系の再調整——その総仕上げともいうべき射爆照準器の設置は、カール自らが行っていた。
「例のアフターバーナーが出来上がるまで、まだ時間がかかるだろ。その間、帝凰龍カイザードラッヘに喧けん嘩かを売るのは見送るんだとさ。だから嫌な仕事の方をさっさと先に片づけちまおうと……まぁ、本人の談だがな」
　数珠じゅず繋つなぎの弾帯を延々と手の中で繰りながら、アルベルトがカールからの伝聞を語る。
　現在、格納庫裏の工房では、初代ジェットエンジンで蓄積されたノウハウを元に、予備部品を使った試作二号型のジェットエンジンの組み立て準備が進んでいる。そこにはカールの発案による加速増幅システム『アフターバーナー』も実装される予定なのだが、なにぶん発想そのものが危険きわまりない装置だけに、ヴァイニンガー博士は慎重に慎重を重ねたテストスケジュールを組んでいた。
　ブリッツフォーゲルに課された諸実験は、引き続き一号エンジンを

搭載した状態で継続されるが、それでも音速突破の決め手に欠ける状態では、プロジェクトの最終目標である帝凰龍カイザードラッヘの打倒は望むべくもない。

「ふぅん……意外だな。もっとゴネるかと思ってたが」

「あいつだって大人だよ。ああ見えてもな」

　アルベルトの口調は淡泊ながらも、以前の食堂での口論が遺恨とならなかったことに対する安あん堵どがありありと覗うかがえた。

　むしろ名状しがたい胸騒ぎを懐いだきつつあったのは、傍かたわらで見守るヘレンの方だった。

　ブリッツフォーゲルのために用意された最新型の照準器は、カールが知っている三年前のものより格段に進歩していた。ガラスの透明度も狙点レティクルの輝度も大幅に改善され、視認性は戦中より遙はるかに向上している。

　ジェット推進の機体がアドバンテージを活いかせるほどの高速飛行中に、肉眼による照準がはたして意味を為なすのか半信半疑であったカールだが、現行の照準器がここまで進歩しているなら話は別だ。つくづく、兵器のテクノロジーにおける時間の進み方は速いのだなと、カールは内心で乾いた吐息をつく。

　既すでに操そう縦じゅう桿かんはトリガーの追加された新しいものに交換され、コンソールの空いていた一画にも簡易ながら火器管制システムが付け足されている。ただ照準器の設置だけは、カール自身が扱いやすさを考慮して位置決めを行いたかったため、電気系統の配線が終わった時点でアルベルトに代わってもらった。

　ここぞ、と思った場所に据えた照準器を粘着テープで一いっ旦たん仮止めし、シートに腰掛けて再度位置を確認してから、ネジ止め用の穴の位置にマーカーペンで印をつける。後の仕上げは専門家に任せるべきだろう。迂う闊かつに細工をして配線に傷でもつけたら、笑い事では済まされない。

　アルベルトを呼ぼうとコックピットから身を乗り出したところで、

カールは機首の脇わきに立って見上げてくるエリックと目が合った。どうやらカールの手が空ぁくのを待っていたらしい。そういえばエリックとは、ジークフリートの小屋での気まずい一件以来、まだきちんと話をしていなかった。

「なぁ、カール……このあいだは、ごめん。あのあと姉さんにも叱しかられた」

「ああ、うん」

　先にエリックから切り出されて、カールはやや視線を泳がせつつも頷うなずいた。むしろ自分の方に引け目を感じていたぶん、立つ瀬がない。

「格好悪いとこ見せちまったな。あのときは」

「そんなこと……」

「いや、いいんだ」

　格好悪い――何となく自ら口にしたその言葉が妙にしっくりきて、カールは諸もろ々もろの蟠わだかまりがすとんと胸に落ち着いた。要するに自分は、この少年の前で無理に背伸びをしすぎていたのだ。

「いいのさ。少し格好悪いぐらいで丁ちょう度どいい。とくに友達の前ではな」

「カール……」

　タラップを伝ってコックピットから降りると、カールはエリックの頭に手を乗せ、くしゃくしゃと髪を掻かき回した。

「お前は俺ぉれの友達、だろ？　エリック」

「……うん！」

　カールの側にもう何の拘こだわりもないと理解できて、エリックもようやく笑顔を取り戻す。

　今ならば二人とも、一番素直な言葉を伝えられると感じて、カールは我われながら柄にもないと思いつつ、己ぉのれの内側について語ることにした。

「なぁエリック、英雄ってのには二通りあってな。強い人間が意志の力で、成ろうと思って成る英雄と、弱い人間が成り行きで祭り上げら

れちまう英雄とがいるんだ。……どっちが本物かは、解わかるよな？」
「……うん」
「俺は臆おく病びょうな人間だ。ずいぶん大勢の連中に勘違いされてるみたいだが、せめて身近な友達にだけは、本当の俺がどういう奴やつなのか、ちゃんと解っておいてほしい。……そういうことなんだ」
「でも……それでも僕、カールのことは凄すごい奴だと思ってるよ」
　カールの言葉を受け止めたエリックの表情には、だが幻滅や諦あきらめの色など微み塵じんもなく、以前と変わらぬ崇敬の念ばかりがあった。
「飛行機で帝凰龍カイザードラッヘを追い抜こうなんて、誰だれも出来ると思わなかったこと、やり遂げようとしてるんだもん。やっぱり凄いことだと思う。カールも爺じいちゃんも、ここにいる人たちみんなも」
「どいつもこいつも、物好きなだけさ」
　ヘレンやゲプハルトからは常々、酔狂と呆あきれられている挑戦だが、せめて年とし端はもいかぬ少年の目を通して見たときぐらい、それが掛け値無しの偉業として映ってもいいのかもしれない。エリックが世評や大人たちの価値観でなく、彼自身のみの基準に照らしてカールを評価するのなら、そのときはカールとて、徒いたずらに自分を卑下する必要はないのだ。
「なぁカール……もしもカールが帝凰龍カイザードラッヘに勝ったら、そのときこそあんたは本物の英雄だよな？　今度こそあんたは、勝ちたくて、勝とうと思って勝つんだもんな」
「まぁ、そういうことに、なるのかな……まだ先の話になりそうだが」
　カールは苦笑いしながら鼻の頭をかき、格納庫の入り口から望む空の彼方かなたへと目を遣やった。今ようやく彼はエリックの前で、素直な気持ちで〝照れる〟ことができた。

アルベルトたちが機銃の搭載作業に取り組む間、カールは試射の標的にする『吹き流し』の準備を進めることにした。
構造は実に簡易で、蛍光塗料で着色した筒つつ凧だこを、六つほど間を開けて連結したものだ。これを曲芸飛行の横断幕よろしく、予備のレシプロ実験機エトピリカで牽けん引いんしながら飛行する。さらにそれをカールの駆るブリッツフォーゲルが、エトピリカに流れ弾が当たらないよう進路を交差させて、横合いから狙ねらい撃っていく、というわけだ。
引き綱の絡まりがないか、筒凧がきちんと展開するか、一つずつ入念に点検していくカールの隣に、そっとヘレンが並ぶ。彼女の表情にはなぜか思い詰めたような硬さがあるものの、作業に没頭するカールはそれに気付かない。
「……ずいぶんと熱心なのね」
「仕事だからな」
顔も上げずに手を動かすカールの背中を見つめながら、ヘレンは次にかけるべき言葉を考えあぐねて唇くちびるを噛かむ。
そのとき、格納庫の外から雷鳴のような轟ごう音おんが轟とどろき、ヘレンの身を竦すくませた。
アルベルトたちが機銃の装着を終えたブリッツフォーゲルを滑走路へと引っ張り出し、積み上げた土ど嚢のうの山に向けて20㎜砲の単射を撃ち込みながら、照準器との同期を確認しているのだ。機銃の発砲音を聞き慣れないヘレンには、その轟きに心底脅かされる畏い怖ふを感じてしまう。
「……ああやって、地上で撃つだけじゃいけないの？」
「機関砲ってのは、ああ見えても精密機械でな。ちょっとした不具合ですぐに機嫌を損ねちまう。そいつを飛行機に積み込むとなれば、気圧やらＧやらに振り回されて、ますます気難しい機械になっちまうのさ」
淡々と説明するカールの語調は、まるで用意された草稿を読み上げているかのようだった。

「積み込んだ機銃がいきなり予定通りに動いてくれる可能性は、ほぼゼロだ。こればっかりは、じかにデータを取って、トライアンドエラーで問題を解消していくしかない」
「……」
　食堂でのアルベルトとの口論の後、ヴァイニンガー飛行場を飛び出していったカールが一体どこへ行っていたのか、ヘレンはまだ聞かされていない。なんとなくそれを問うのは気が退ひけた。常つね日ひ頃ごろからカールが踏み込まれることを忌き避ひしている〝過去〟に関かかわりのある事柄なのだろうと、彼女なりに察しがついたからだ。
　だが翌朝の未明に戻ってきて以来、カールの態度には微妙ながらもはっきりとした変化があった。よく言えば落ち着いた達観、悪く言えば冷淡な拒絶にも似た無感動な雰囲気を漂わせるようになったのだ。
　何がどう、というわけでもないが、そこにはヘレンを無性に不安にさせる奇妙な違和感が伴った。
「……こんなこと、最後まで厭いやがると思ってた」
「アルベルトの説教が効いたのさ」
　依然、機械的に手を動かしながら、カールは気のない声だけで返答をよこす。
「あいつの言う通りだ。これからもブリッツに乗り続けていたいと思うなら、つまらん意地を張っていても仕方ない」
「つまらない、意地？」
　思わず問い返すヘレンの声に、我われ知らず険が交じる。
　そこでようやく、ただの雑談では収まりそうにないヘレンの気配を察してか、カールは手を止めて振り向いた。
　ヘレンの硬い眼まな差ざしは、格納庫の外で午前の陽ひ射ざしを浴びているブリッツフォーゲルへと向けられている。
「ずっとあれに乗り続けていたいって言ってたわよね」
「……ああ」
「じゃあブリッツフォーゲルが戦場に行ったらどうするの？　君もまた戦争に行くの？」

　ヘレンの問いに、カールは浅く笑ってかぶりを振る。
「そんなことは有り得ないさ」
　軽くいなすかのようなその応答は、かつて彼自身が激しく拒絶したはずの詭き弁べんに似すぎていて、ますますヘレンを不快にさせた。
「本当に、そう言い切れる？　君はそう信じてる？」
「……」
「いろんな人が、いろんなブリッツの行く末を思い描いてる。あの飛行機が最後にどういうことになるのか、もう誰だれにも解わからないんじゃないの？」
　カールは視線を泳がせたまま沈黙する。もはや歴然だった。彼は状況に納得したわけではなく、ただ思考停止して流れに身を委ゆだねているだけなのだ。あの無邪気だったカールが、そういう小こ狡ずるい逃避をしていることが、ヘレンにはたまらなく厭だった。
「……それでも君は、ブリッツについていくの？　どこに連れて行かれるかも解らないのに」
「俺おれはブリッツを降りないよ」
　カールは語気を荒らげることもなく、それでも断固としてそう言い切った。
「あいつで帝凰龍カイザードラッヘに勝つまでは……俺は誰にもあいつを渡さない」
　頑かたくなまでに直ひた向むきなその言葉は、ヘレンが知る通りの、偽いつわらざるカールのものだった。だがそのことは決してヘレンを安あん堵どさせず、むしろ別の感慨をもたらす呼び水になった。
「君、ブリッツには逆らえないのね」
「……なに？」
　微妙に矛ほこ先さきを変えた上でのヘレンの語気の鋭さに、カールは戸惑う。
「軍の片棒を担ぐこと、君はあんなに厭いやがってたのに、ブリッツのためなら納得するなんて……正直ね、私、あの飛行機のことが怖くなってきた」

「おいおい、何言い出すんだよ、いきなり」
　まるで恋人の不実を咎とがめるかのようなヘレンの口調に、思わずカールは苦笑する。
「君は生きるために飛ばなきゃいけないのよ。飛ぶために生きてるんじゃなくて……この違い、解わかるよね？」
「……ああ」
　言葉として、理屈の上では何ら不可解な忠言ではない。だがそれをなぜ今ヘレンが険しい声で、いつになく真顔で彼に言い含めるのか、その意図まではカールにも計りきれなかった。
　ヘレンとしては、さらに踏み込んでカールを問い質ただしたいところだったのだろうが、そこに闖ちん入にゅう者が現れた。エリックの案内で格納庫内へと通されたゲプハルト中佐である。
「カール、中佐が来たよ」
「よう、主しゅ賓ひんのお出ましか」
「精が出てるようだな……午後から開始と聞いたんだが」
　ようやく開発サイドが譲歩を示した機銃試射の初日とあって、立ち会いに訪れたゲプハルトは普段より心なしか上機嫌に見えた。
「大方の準備は整ってるが、予定より一時間押しってところか……まぁ間違いなく陽ひがあるうちにスケジュールは消化できる」
　これまでとは眼目の違う試験飛行を控えて、少なからず場の空気は張り詰めているものの、それを察する如才なさをまだ身につけていないエリックは、普段と変わらぬ好奇心で、しげしげと吹き流しの筒っっ凧だこを眺めている。
「これが標的？」
「そう。こいつをエトピリカで引っ張って飛ばしながら、横合いからブリッツの機銃で狙ねらい撃ちにするわけだ」
「こんなに大きな的だったら、簡単に当たっちゃうんじゃないの？」
「一〇〇〇フィート離れて狙ったら、米粒ほどの大きさもないさ」
「ふぅん……」
　一方でゲプハルトは、牽けん引いん索さくを繋つながれたエトピリカの

側そばへと歩み寄り、何やら仔し細さいに見入っている。
「こいつの操そう縦じゅうは、誰だれが？」
「たぶん飛ばせる奴やつらが籤くじ引びきで決めるはずだ。ひょっとすると博士かもしれん」
　ヴァイニンガー飛行場にいるスタッフの中には、航空ライセンスを持つ者も少なくない。戦闘機乗りとして実戦経験を持つ者さえいる。
「……特定の要員がいないなら、俺おれが立候補してもいいかな？」
　意外すぎるゲプハルトの申し出に、カールのみならず全員が目を丸くした。
「ほォ……どういう風の吹き回しだ？」
「勘を鈍らせないように、折を見て操そう縦じゅう桿かんを握るようにしているんだが、ここしばらくそういう機会がなくてな。……飛行服を借りられるか？」
「備品のことはクルツに聞けばいい。しかし、本当にやる気か？」
「ああ。心配するな。しくじりやせんさ」
　いざゲプハルトの本気を確認してみると、カールとしては是非にも減らず口を突っ込まずにはいられない。
「間違えてお前に当てちまっても恨むなよな」
「危ないな。保険のためにエリック君も一緒に乗せて行こうか」
　ゲプハルトもまた怯ひるむことなく平然と返し、そんな二人のユーモアに、端はたで聞いていたヘレンが呆あきれ返る。
「……君たちの冗談って最低ね」

2

　エトピリカよりも遙はるかに手間のかかる離陸行程を終えて、カールのブリッツフォーゲルは空軍に指定された試射飛行空域に到着した。上空には先行してブリッツを待っていたエトピリカが、吹き流しの曳えい的てきを悠々と靡なびかせながら旋回している。
「ブリッツフォーゲルよりエトピリカ。遅れてすまん。そちらの準備

は？」
『こちらエリック。いつでも始めていいよ、カール』
　当然、ゲプハルトの声が無線機に応じるものとばかり思っていたカールは、興奮に上うわ擦ずった少年の声が応答してきたのを聞いて唖ぁ然ぜんとなった。
「おいゲプハルト……本当にエリックを乗せてくるってのはどういう了見だ？」
『僕が頼み込んだんだよ。ブリッツが飛ぶとこ、空からも見てみたいもん』
「今回ばかりは遊びじゃないんだ。普段よりも危険なテストなんだぞ」
　どうやらカールの保護者面づらがよほど可ぉ笑かしかったのか、それまで黙っていたゲプハルトが笑いまじりに通信に割り込んでくる。
『それだけ皆がお前の腕前を信じてるってことだ。くれぐれも誤射なんてやらかすな』
「……お前一人だったら、やっぱりわざと当ててたよ。俺は」
　自分以外がことごとく遊覧気分でリラックスしているというのは、カールにとっても癪しゃくだった。どうせエリックを冒険に巻き込んだ咎とがでヘレンから叱しっ責せきされるのはカールのほうなのだ。それでなくても今日の彼女は機嫌が悪いというのに。まったく勘弁してほしい。
『漫談はこのぐらいにして、そろそろ始めよう。位置に着け』
「了解。さっさと済まそうか」
　ゲプハルトの催さい促そくに応じて、カールはブリッツフォーゲルの機首を翻ひるがえし、エトピリカの飛行進路に対応した射撃位置を目指して調整に入る。
　その鮮やかな機動を、エトピリカの後席から見守っていたエリックは、憧しょう憬けいに陶然となりながら歎たん息そくした。地上で見るブリッツフォーゲルも確かに素晴らしい飛行機ではあるが、カールを乗せて空を飛ぶときの姿は、さらに段違いに美しい。その活ぃき活きと

した挙動はまるで生物のようだ。力強く孤高な飛ひ翔しょう——そう、まさに天を征ゆく龍りゅうの姿のそれである。
「……ねぇ中佐」
「ん？」
　前席で操そう縦じゅう桿かんを握るゲプハルトへと呼びかける声は、ごく親しげである。カールの窺うかがい知らぬことではあったが、エリックはこの空軍将校がヴァイニンガー飛行場を訪れる度にしばしば会話を重ね、いつしか気兼ねなく言葉を交わせるようになるまでに打ち解けていた。たとえば今回のように、ゲプハルトの飛行に同行させてほしいなどと思い切った依頼が出来る程度に。
「中佐はカールのこと、英雄だと思ってますか？」
「いいや。断じて違うな」
　ゲプハルトも、エリックがカールに対して懐いだく感情については充分承知していたが、それでも敢あえて素っ気なく即答した。
「英雄は人々に尽くす義務がある。自分勝手な奴やっには務まらん。その点、あいつは失格だ。自分のことしか考えてない」
　それは少年を少なからず落胆させる回答だろうと思っていたゲプハルトだったが、意外にもエリックは、妙に嬉うれしげにくすりと笑って応じる。
「なんだ、それじゃ中佐もカールの友達なんですね」
「……何だって？」
「いえ、こっちの話です」
　何のことやらゲプハルトには話が見えず、いささか後ろ髪を引かれる心地だったが、問い質ただそうとするより先にカールからの通信が届く。
『ブリッツフォーゲル、第一射、用意』
「……了解、エトピリカよりブリッツ、発砲を許可」
　ゲプハルトは三時方向に視線を転じ、陽光をきらめかせながら迫る銀色の機影を視認する。ほどなく曳えい光こう弾だんの火線が、エトピリカの背後に続く最後尾の筒っつ凧だこを貫つらぬくはずだ。

カールは真新しい照準器の狙点レティクルに標的の第一スリーブが乗るよう、慎重に操そう縦じゅう桿かんを微調整しながら、指示された規定速度にスロットルを絞り込む。

まずは水平飛行、三〇〇ノット、距離一〇〇〇ヤードから連射一秒。

ふと、思わず笑ってしまうほどに滑こっ稽けいな事実に思い至る。

――こんな風に空で曳えい的てきを撃った経験は、過去たった七回しかない。憶おぼえている。まだ右も左も分からない伍ご長ちょうの頃ころに、おざなりにこなした実弾演習の回数がそれだ。両手の指で数えて足りる。その後で、敵兵に当てた弾の数は記録を引いて確かめなければならない程だというのに。

狙点レティクルの鈍い輝きが映り込む照準器のガラス板を通して、覗のぞき込む小さな青空。そこはカールの殺意によって囲い込まれた死の空間。あらゆる自由と祝福から見放され、ただ弾丸雨による串くし刺ざし刑を待つばかりの煉れん獄ごくだ。憧あこがれた空を、憩いこいの空を、外ほかならぬ自分自身がそんな風に切り分ける。カールが銃を抱えて飛ぶというのは、そういうことなのだ。

「……ッ」

小さくかぶりを振って、雑念を追い払う。やると決めたからにはやり遂げるしかない。

今日撃つ弾は誰だれを殺すわけでもない。むしろいい加減な気持ちで臨めば流れ弾がエトピリカに当たる。

いま問われるべきは、意図ではなく、技術。そう心を殺して、カールは照準器の奥を見据える。既すでに標的を曳えい航こうするエトピリカの機影は照準器の視野にありながら、距離は目測でも一五〇〇ヤード強。これでは必中のタイミングを逃す。

加速して距離を詰めつつ、軽いヨーイングで射線を修正。規定距離に達する寸前に減速して速度を三〇〇ノットまで押さえ込む。相手が回避行動を取るわけではないので駆け引きは一切ない。

当たる――そう直感したときにはもう、指先が無造作にトリガーを引いていた。

発射の反動は記憶にあるそれよりも鈍くて軽い。戦時中に駆っていた機体のどれよりも、ブリッツフォーゲルの機体重量は二倍以上重いのだから当然だ。機首直下にある銃口は風防キャノピーから死角になるため発射炎が見えず、硝煙も猛烈な機体速度のせいで瞬時に吹き散らされ視界に残らない。ただ、狙ねらった最後尾の曳的が、綿毛が散るようにふわりと四散する様子を見届け――それが射撃の手て応ごたえの全すべてだった。撃つ前の無用な逡しゅん巡じゅんに比べれば、至極あっさりしたものだった。

『命中確認……大した奴やっだ。まったく腕は衰えてない』

言葉とは裏腹に、さもありなん、と言わんばかりの素っ気なさで、通信機からゲプハルトの報告が届く。その背景には何やら興奮して騒ぎ立てるエリックの声も聞こえるが、こちらは実弾演習に立ち会うのなど初体験なのだろうから仕方ない。

「……次、行くぞ」

カールはエトピリカと進路を交差させた後、緩やかな旋回上昇で螺ら旋せんを描いて高度を取る。今度は標的の直ちょく上じょうから急降下射撃のテストだ。機関砲にはより苛か烈れつな加速度が課せられることになる。

一射目は動作確認も兼ねた事実上の試し撃ちだったが、次はより攻撃的な機動を伴う射撃だ。往年の戦場を思い起こさせずにはおかない。――が、もうカールは拘こう泥でいしなかった。するまでもなかった。

機首を翻ひるがえし、刃やいばの切っ先を振り下ろすかのように大地へと向けながら、推力と重力加速の相乗がもたらすＧを全身で受け止める。幾度となく空戦で味わったその感覚を、カールはまるで他ひ人と事ごとのように、無関心に意識する。

標的めがけて機体を制御し、照準を合わせ、射撃する――その一連の動作は腕に染みつくあまり、完全に自動化されていた。意志の力に

拠ょるまでもなく、その全すべてを滞とどこおりなく執り行える。
　今にしてなお、そうなのだ。無感動の殻からの中に封じ込められた思考の中で、カールは干ひ涸からびた諦てい観かんと自じ嘲ちょうを噛かみ締める。ああ、こんなにも簡単だ。操そう縦じゅう桿かんに追加されたトリガーの弾力は、なんと指先に馴な染じむことか……
　さらに加速を加えつつ、距離一〇〇〇ヤードの手前から発砲開始。さながら必然のように曳えい的てきへと吸い込まれていく火線が、なぜかふいに途絶える。
　再度トリガーを引いても反応無し。おそらくは給弾不良だろう。あっけない幕切れに歎たん息そくする間もなく眼下のエトピリカが肉薄し、カールの頭の上を一瞬で通過する。二つめの曳的は引き裂かれたものの千切れることなく、中途半端に牽けん引いん索さくに繋つながったままだ。
『どうした、故障か？』
「ああ。七発目で回転が止まった。速度は三七〇ノット辺りだったな」
『了解した。記録する』
「……ルドルファって、こんなにヤワな銃だったか？」
『それだけブリッツフォーゲルの加速が強烈すぎるんだ。フム……やはり既存の火器をただ転用しようというのは虫が良すぎたか』
　カールはスロットルを緩めつつ機首を引き起こすものの、雲海の手前では間に合わず、ブリッツフォーゲルは高層雲の底を突き抜けて雨雲の下にまで降下した。高度計の表示は一九〇〇ヤード弱。眼下には陰気なほどに灰色の海が広がっている。
　もちろん実弾演習を行うに当たって、空軍はあらかじめ近隣を危険区域として告知しているため、見渡す海には公民問わず船舶の姿は皆無である。唯一の景観の変化といえば、やや大きめの岩がん礁しょう島があるだけだ。
　草木の一本もない無人島で、呼称も海図の記載でしか知られていないような孤島だが、面積の割りには高さがあるせいで、この辺りでは

割合に目立つ目印になり、パイロットや船乗りにとっては重ちょう宝ほうがられている。牙が峰ほうの頂いただきだけがひょっこりと海上に顔を出しているかのような景観は、波の浸食によって周囲が絶壁化しているせいもあり、まるで波なみ間まに直立した衝つい立たてのようだ。

　再び高度を取り、雲の上のエトピリカと合流しようとしたところで、カールはふと目を向けたその島影に、妙な違和感を覚えた。

「……？」

　機体を傾けて視界を確保し、あらためて目を凝らす。

　島の断だん崖がい絶壁は一〇〇ヤードに迫ろうかという高さがある。その麓ふもとに、明らかに自然物ではない整った輪郭の影がある。船、ではない。どう見ても崖がけの中腹辺りに浮遊している。

「……ゲプハルト、この辺りを就航中の飛行船があるって聞いてるか？」

『ん？　まさか。この空域は正午からずっと封鎖されてる。そもそも民間機の航路ですらない』

「どうにも、一隻紛れ込んでるらしいんだが……」

『馬ば鹿かな。ちゃんとレーダーが監視してるんだ。有り得ん』

　今日のブリッツフォーゲルの射撃テストは歴れっきとした空軍のミッションである。何かのミスで別の航空機が危険空域に侵入してきたなら、即座に無線で中断が伝えられたはずだ。

『哨しょう戒かい機きを呼んでおくか？』

「……いや、見間違いだったら赤っ恥だしなぁ」

　カールは機体を緩やかに減速させながら高度を下げ、より近くから無人島の断崖を観察した。

　――やはり錯覚ではなく、飛行船である。悪天候のせいで細部まで確認はできないが、見たこともない型式だ。あまりにも岸壁に接近しすぎていて、突風の煽あおりをくらえば岩肌に激突しかねない。操そう舵だ手しゅの腕前は大したものだと認めるにしても、何を思ってあんな危険な位置に滞空しているのかは依然として謎なぞである。

　確かに、今この時点でレーダーがあの機影を捕ほ捉そくできないのは

道理だ。崖下にいる飛行船には、島影が遮しゃ蔽へい物ぶつになってレーダー波が届かない。
　だがそれならそれで怪異の度合いはますます高まる。そもそも一体どうやって、飛行船は島まで到達したのか？　最寄りの陸地ですらここから四〇マイルは離れている。只ただの一度もレーダーに捕捉されないまま飛んでくることなど絶対に不可能だ。
　レーダー観測員が昼からずっと居眠りしていたのでもない限り、あんな所に飛行船がいていい訳がない。さもなくばあの飛行船は、何の前触れもなく忽然と崖の下に姿を現したことになる。
「……」
　有り得ない怪事を前にして、不吉な予感がカールの背筋を強こわ張ばらせる。むしろそれが幸いした。緊張感に神経を研ぎ澄ませていたからこそ、カールは直後に訪れた危機に即応することができた。
　おそらく彼ひ我がの距離は八〇〇ヤードを切っていただろう。飛行船の船体でチカチカと瞬またたく閃せん光こうを目にしても、凡ぼん庸ような者ならそれが何を意味するか理解できなかったに違いない。数多あまたの死線を潜くぐり抜けてきたエースパイロットの視力だけが、それを対空砲火の銃口炎と見み咎とがめることができた。わずか一秒を待たずに飛来した銃弾の雨を辛うじて回避できたのは、カールの反射神経と、そしてブリッツフォーゲルの並外れた加速性が並び揃そろっていればこその僥ぎょう倖こうだった。
「撃たれたッ！　あいつ……武装してるぞ！」
『何だと!?』
　無線機越しの声だけでも、ゲプハルトの驚嘆の程は充分に覗うかがえる。もちろん銃撃されたカール自身とて信じられる話ではなかった。
　あのヘリウム気き嚢のうに膨ふくれ上がった代物が火砲を積んでいる以上、それは飛行船ではなく飛空艦と呼ばれるべき代物だ。そして諸国に先駆けて飛行船の軍事利用に乗り出し、前線での使用に耐えるレベルでそれを実現させている軍隊は唯一無二――ヴィルドバッハ公国空軍をおいて外ほかにない。

「馬ば鹿かな……奴ゃっら、どうやって⁉」
　最大加速の甲か斐いあって、ブリッツフォーゲルは瞬時に敵艦の射程を脱し、安全圏にまで退避できた。だがカールは今自分が目まの当たりにしたものが信じられない。
　威い嚇かく射撃では、ない。むしろ射手は確実に撃墜できると見込んだ距離にこちらが接近するのをギリギリまで待ち構えてから、撃ってきた。必殺必中を期していたのだ。ブリッツフォーゲルが至近弾一つ浴びずに済んだのは、相手がジェットエンジンの加速性を見誤っていたのが一つ——もう一つは、純然たる僥倖だ。
『何が起きてる？　おい、カール⁉』
「解わからん。ワケが解らんがともかく……ヴィルドバッハの飛空艦ふねがここにいるんだよ！」
　背後の飛空艦は動かない。やはり断だん崖がいを盾たてにしてレーダーに捕ほ捉そくされるのを避けているのだ。カールは機体の速度を維持したまま大きく旋回し、無人島の反対側へと迂う回かいするルートを取った。そのまま島の反対側から、再度接近を試みる。
　一方で雲上のエトピリカでは、一向に戻る気配のないカールに業を煮やしたらしく、無線機からゲプハルトの怒鳴り声が届く。
『カール、今はともかく、逃げろ！　馬鹿はよせ！』
「放っておけるかよ……」
　いかに海上の無人島とはいえ、ここは歴れっきとしたシルヴァーナの領空である。その直ただ中なかに、どのような手段にせよレーダー網をかいくぐって侵入しうる飛空艦が存在するならば、それは全ての沿岸都市が等しく爆撃の脅威に曝さらされていることを意味する。看過できるはずもない。
　たしかに内陸の山岳地帯なら、複雑な地形を利用してレーダー波を躱かわしつつ国境線を越える手段もあるかもしれない。だが遮る物など皆無の洋上で、しかも飛空艦ほどの鈍重で大きな標的が、レーダーの目を逃れることなど絶対に不可能だ。必ず何かカラクリがある。
　手品の種は、あるいは目で見て看破できるものかもしれない。だと

すればもう一度、より至近距離から確実に、あの艦影を捉とらえる必要がある。カールは今、二度と有り得ないほど貴重なチャンスを偶然手にしているのかもしれないのだ。次に誰だれかがあれを目撃する機会が、何ど処こかの無防備な都市上空に出現したときになるとしたら、万事休すだ。ここで後悔の元を残しておくわけにはいかない。

聳そびえ立つ島影が眼前に来たところで、ブリッツの速度を失速直前の一六〇ノットにまで絞り、ぐるりと岸壁を回り込む。これで今度はさっきと反対方向から飛空艦と対面することになる筈はずだが、それで相手の不意を突けるとは期待しない方がいい。姿こそ隠しているが、ブリッツの囂ごう々ごうたるエンジン音は周囲一帯に轟とどろき渡っているはずだ。再接近の意図は歴然だろう。

ついに切り立った崖がけの向こう側に、鯨のように巨大な飛空艦の船影が現れる。距離は一〇〇ヤードと離れていない。今度こそどんなに些さ細さいな要素でも見過ごすまいと目を凝らしていたカールだが、すかさず銃撃を見舞われ、またしても急加速で離脱を余儀なくされる。

やはり、秘密を見破る決定打となるような観察は得られない。大きさはヴィルドバッハの定番爆撃艦であるゼッペロン級と同等だが、見たこともない型式の新造艦である。とはいえ、あれが一体どうしてレーダーに反応しないのか、その手がかりは掴つかめない。

「くっ……」

今の自分の行為が無謀の極みであることは、カールとて重々承知していた。敵弾が当たらないのは、単に銃座の射手がブリッツの速度を見計りかねているだけのことだ。一度ならず二度までもこちらの加速性能を披ひ瀝れきしてしまった以上、次こそは命中弾を食らう危険性がある。

もちろん反撃は不可能だ。ブリッツフォーゲルには武装がない。——否、今はたまたま使えない。奇くしくもつい数分前に故障したばかりの20㎜機関砲が機体に備わっているという運命の悪いた戯ずらに、カールは言いしれぬ戦せん慄りつを覚えた。

もし仮に機銃が無事に稼働するならば、自分はあの飛空艦を撃っていたのだろうか？
刹せつ那なとはいえ『反撃』という可能性が脳裏を掠かすめたことで、今ようやくカールは事態の重大さを正しく認識できた。これは戦闘なのだ。殺意を込めた敵弾に抗するならば、カールもまた剥むき出しの殺意をもって応じるしか外ほかにない……そういう場所にいま彼はいるのだ。
『カール！　最寄りの哨しょう戒かい機きがこちらに向かってる。離脱しろ！　今すぐに！』
無線機から届くゲプハルトの怒声は、スピーカーを割らんばかりの勢いだった。
「……了解」
擦かすれた声で応答し、カールは機首を直立させて急上昇で雲上へ退避しにかかる。操そう縦じゅう桿かんを握るには必要以上の握力を要した。そうしなければ手の震えを抑えきれなかった。
最後に後方確認鏡で眼下の無人島を一いち瞥べつする。謎なぞの飛空艦はやはり位置を変えず、貼はり付いたように断だん崖がいの際に寄り添ったままだった。その意図も、状況の不可解さも、最後まで謎に包まれたままだった。

カールとゲプハルトの間に交わされた無線通信は、すべて余さずヴァイニンガー飛行場の通信室にも中継されていたため、西の空から帰還したブリッツフォーゲルが、いつもと変わらぬ健在ぶりで滑走路への着地を決めたときには、ヴァイニンガー博士をはじめスタッフの総員が安あん堵どの吐息をついた。
もはや本来のテストの眼目すら忘れ、アルベルトたちは故障した機銃のチェックも差し置いて機体の被害状況を確認しにかかったが、白銀の機体には掠かすり傷ひとつ見当たらない。二度に渡り浴びせられた銃撃は、ただの一発たりとも届かずに済んだ様子だった。
もっとも、従来の戦闘機とは比較にならないほどの空気抵抗と摩擦

熱に対抗しうるべく設計されたブリッツフォーゲルは、当初から極めて頑強な機体構造を備えている。燃料を納めた主翼やエンジン、コックピットや方ほう向こう舵だといった致命的なポイントさえ被害を免まぬがれたなら、一発や二発の被弾であれば憂慮するほどのこともない。

　そして、完全に無傷であったことが必ずしも幸いであったかどうか——帰還後ただちに通信室にこもって本部と喧けん々けん囂ごう々ごうの遣ゃり取りを交わしていたゲプハルトが、なんとも煮え切らない顔で格納庫に戻ってくると、今日のカールの強運がもたらした不幸な結果が報告された。

「現場を捜索した哨しょう戒かい機きからの報告だが……飛空艦など影も形も見当たらないそうだ。たとえ最大船速で飛ばしたとしても、捜索範囲から逃げられたはずはない。そうなると……カール、あとはお前の報告の信しん憑ぴょう性が問われることになる」

「……」

　心外なことこの上ない話ではあったが、カールの胸中は驚きとも怒りとも無縁だった。こうなる予感は当初からあったのだ。そもそも出現の経緯そのものが不可解だった艦である。退散するときもまた同様に不可解な形で消え失せたとしても、何の不思議もありはしない。

　問題の飛空艦の存在を証明するものは、唯一、銃火の閃ひらめきを間近に見せつけられたカール自身の記憶があるのみだった。

「……俺おれがブリッツを操そう縦じゅうしながら、白昼夢でも見たって言いたいのか？」

　感情を抑えた声でそう問うてくるカールを、ゲプハルトは暫しばし注視した後、視線をそらして呟つぶやく。

「それ以外、理に適かなった説明ができない以上は、そういう結論を落とし処どころにするしかない」

　だがその声音は、ゲプハルト自身が己の言葉に納得していないことを如実に物語っていた。「飛空艦がいたというお前の報告は、たしかに鵜う呑のみにできんとしても——あの無人島で、お前が何者かによって攻撃を受けたというのは、事実だろう」

「……なぜそう思う？」
「お前が昨日までと同じ、気の抜けきった飛行機馬ば鹿かの面つら構えで戻ってきたならば、俺だって一切合切を妄もう言げんと思って聞き流したさ」
　肩を竦すくめてそう応じてから、ゲプハルトは一いっ旦たん言葉を切り、それから言いにくそうに先を続けた。
「——だが今のお前は、昔の目つきに戻ってる。戦場にいた頃ころのお前に、な」
「……」
　言い様のない嫌悪を込めて歯は噛がみするカールには、だがしかし、何ひとつ返す言葉もなかった。

3

　ヴァイニンガー飛行場の宿舎は、手狭な間取りを有効活用するためにも二人一組の相部屋が原則とされていたが、紅一点であるヘレン・ヴァイニンガーには当然の配慮として、彼女だけの個室が割り当てられていた。
　男連中の大方が、寝泊まりのためだけの場所としてろくに手入れも施ほどこさず杜ず撰さんに扱っている一方で、ヘレンの部屋だけは、限られた空間における居心地を可能な限り向上させようという涙ぐましいまでの努力が払われている。ベッドカバーの柄をカーテンと揃そろえたり、サイドテーブルの上は実用に使わず、近隣の野山で摘っんだ花を活いける花瓶を置いてみたりと、男たちの目から見れば奇妙な呪まじないの風習としか思えない手て間ま暇ひまを、ヘレンはつとめて怠おこたらなかった。機械油と燃料の臭気にも、ランプにたかる羽虫の群れにも、まるきり頓とん着ちゃくしなくなって久しい彼女ではあったが、それでも女性として譲れない一線は確固としてあるのだ。
　その日も夕食の後片付けを終え、食堂の掃そう除じを済ませて一日の務めを終えたヘレンは、唯一安らげる場所である自室に戻って寝間着

に着替え、夜の深々たる静寂の中で疲労を癒いやしていた。

　習慣だった日記も最近ではついつい怠りがちになっている。そもそも書くべき内容が乏しすぎる。つまるところ、この山中でヘレンがやっている事柄といえば、大所帯を預かるハウスキーパー役である。仮にも大学にまで進学した身で随分な話だとも思うが、それもこれも彼女自身が選んだ道なのだから仕方ない。

　技術者として成功を収めた祖父のおかげで、ヘレンの幼少期の生活は充分すぎるほどに裕福だったし、教育についてもひときわ高度な環境に恵まれた。先の大戦で大学の校舎が焼け落ち、休校を余儀なくされるアクシデントさえなければ、既すでに動物学の修士号も手に入っていただろう。

　だが戦後、再建された大学にすぐさま復学しなかったのは、この動乱の時代に生きる身でありながら、呑のん気きに珍種のトカゲの飼育観察など繰り返している自分の将来に疑問を抱いてしまったせいだった。よりはっきりと目に見える形で、人々の暮らしに貢献できる人生を選ぶべきではないのかと、柄にもない焦あせりに囚とらわれたのだ。

　結局のところ、世に持て囃はやされる祖父の名声も影響として大きかったのだろう。まるきり専門外である機械工学の現場において、ヘレンに出来ることといえば家事代行が関の山だったが、それでも名だたる祖父の仕事の現場を間近に見てみたいという願望は、将来を保証された進路の安心感よりも勝った。結果、色々と幻想を打ち砕かれた部分も少なからずある。祖父の正体は、世のため人のための献身など二の次でしかない只ただの夢追い人でしかなかったし、社会に参加したくて学業を中断したはずだったのに、気がつけばキャンパスにいた頃ころより輪をかけて世間と隔絶した暮らしに巻き込まれている。

　だがそれでも、楽しくはあった。一つの目的に向かって突き進む人々と寝食を共にし、その毎日を見届けるというのは、これまで味わうことのなかった刺激と充実感があった。思えばヘレンは、ヴァイニンガー博士とその弟子たちが共有しているような、強固で揺るぎない目的意識というものを持ったことがない。ただ小動物が好きだという

だけの興味本位から始まった学業にも、そこまでの情熱を見み出いだせてはいなかった。

　それに、カールの存在もある。彼と巡り合う契機を得られたというだけでも、この飛行場に来た意義は充分にあった。たしかに相手は恋愛など二の次としか思っていない、粗そ忽こっで子供じみた唐変木ではあるが……それでも、愛いとおしいと思う。もっと彼の笑顔を見たいし、彼に災いが降りかかるなら身を挺ていしてでも守ってやりたいと切に思う。この想おもいもまた、ある意味では充分に強固な〝目的意識〟として自慢できるのではないだろうか。

床に入る前の習慣として、ヘレンは手を合わせ、天にまします神に祈りを捧げる。彼女の大切な人たちが、どうか明日もまた息災でありますように。禍わざわいと嘆きから守られますように。とりわけ向こう見ずで危なっかしい一人については念入りにお願いする。

そんな彼女の祈りに対し、まるで皮肉極まりないタイミングで呼応したかのように地響きと爆音が轟とどろいたせいで、ヘレンは文字通り飛び上がって仰天した。

すぐさま窓の外を窺うかがうと、目の前の格納庫の戸口が紅ぐ蓮れんの炎で照らし出されている。爆発の現場がどこなのかは探すまでもなく明らかだった。

ヘレンは思い出さずにはいられなかった。――夕食の最中、後で格納庫から何やら引っ張り出してテストをしようと相談していた二人組のことを。

ヴァイニンガー博士とカールである。

宿舎と遊ゆう戯ぎ室にいた全員が度肝を抜かれるほどの轟ごう音おんだったにも拘かかわらず、爆発の損害は意外にも軽微だった。

原因はアフターバーナーを実装中だった第二エンジンの点火実験。当事者はカールとヴァイニンガー博士。彼らの談に拠よれば、何でも夕食の途中で作業をより簡潔に仕上げるアイディアを閃ひらめいたカールがヴァイニンガー博士に提案し、さっそく二人で験ためそうとしたのだという。計画責任者と専任テストパイロットの共謀が招いた事故、とあっては、一体誰だれがその二人を叱しっ責せきしたものやら権威の在処ありかが難しく、結局のところ、ここ数日の作業を台無しにされたオットーが感情の赴おもむくままに罵ば詈り雑言を浴びせかけることで、譴けん責せきの代わりとなった。

二人が軽微な火傷やけどを負った程度で大事なく済んだのは不幸中の幸いだったが、第二エンジンの損壊は回復不能な有様だった。念のための配慮として格納庫の外までエンジンを引っ張り出した上で作業を行っていたため、周囲への被害も軽微で、後片付けも夜半より早くに

完了した。

　はたしてヘレンの祈りは痛烈に裏切られたのか、それとも爆発したエンジンの間近にいた祖父と恋人が、どちらも揃そろって絆ばん創そう膏こう一〇枚程度の怪け我がで済んだという点で覿てき面めんに御ご利り益やくがあったのか、解釈は悩ましいところであった。ともかく気苦労と安あん堵ど、そして後片付けを手伝った労力も相まって、彼女は怒る元気もない程に疲ひ弊へいしていた。自室に戻ろうとした背中をカールに呼び止められたときも、愚ぐ痴ちの一つも溢こぼすことなく、ただ仏ぶっ頂ちょう面づらで振り向くのみに留とどまった。

「なぁ、ヘレン……あの、だな。明日なんだが……何か予定ってあるか？」

「別に？　何もないけど」

　カールは鼻び梁りょうに貼はり付けられた真新しい絆創膏をぽりぽりと掻かきながら、木ぼく訥とつに先を続けた。

「いや、俺おれの方は……さっきのアレで、フライトプラン全部白紙になっちまって、やること何もないんでな。……良かったら山歩きにでも行かないか？　まぁ急な話だが……」

「ふぅん。君からのお誘いなんて、珍しいこともあったもんね」

「……嫌か？」

「まぁいいけど。昼食の仕込みが済んだら私も手が空ぁくし。じゃあ一〇時頃ごろに食堂で待ち合わせましょ。いい？」

「ああ。それじゃ、おやすみ」

　素っ気ない応答で打ち合わせが済むと、ヘレンは今夜の疲労など全て忘れ、スキップせんばかりに軽い足取りで寝室へと引き返した。

　今夜は即刻熟睡し、明朝はいつもより早めに起きなくてはならない。朝食の支度だけでなく、二人ぶんの弁当にも腕を振るわなければならなくなったのだ。

　ヴァイニンガー飛行場の裏手にある尾根を反対側に回り込んだ断だん崖がいに、崖がけの途中から湧わき出た泉が小さな滝になっている場

所がある。四方を背の高い針葉樹林で囲まれているため、陸路からでは見づらいが、カールは何度も飛行機で離着陸を繰り返すうちに、上空からその滝を見つけていた。

　標高はヤーデ高原とほぼ差がなく、やや大回りにはなるが概おおむね等高線に沿って歩くだけで辿たどり着くことができる。道のない経路を踏み分けて歩くことを差し引いても、飛行場からの散策ルートとしては中々に悪くない条件だった。

　午前中に飛行場を出発し、のんびり森の中を進むこと三時間。ついに目の前に現れた崖と滝は、ヘレンが思わず息を呑のむ程に景勝な眺めだった。カールもまた、上空から見下ろして予想していたものより数段迫力のある景観に、思わず唸うなる。

　渓流の源泉になっている小さな滝たき壺つぼのほとりで、二人はヘレンが焼いて持参してきた豚肉のパイを頬ほお張ばりつつ、水辺の爽そう気きを満喫した。降って湧いたアクシデントによる余よ暇かとはいえ、ヘレンにとっては申し分ない逢あい引きの時間であった。市街を巡るデートと違って、カールも心底リラックスしているのが、また良い。

「軍を辞めてからお爺じいちゃんと会うまでの間は、山奥で樵夫きこりをやってたって、本当？」

「んん、まぁ……似たようなもんだったかな」

　その時期の回想について、カールはあまり話したがらない。ヘレンとしてはもちろん興味が尽きなかったが、無理に聞き出すようなことでもないとは思う。あのカールが翼と無縁のまま過ごした時期というのが、あまり幸福なものだったとも考えがたい。

「こんな風にのんびりできる時間が、もう少しあるといいんだけどね……」

「まぁ、当面はブリッツも飛ばせないからな。あと数日は暇ひまを持て余すことになりそうだ」

　さらりと語られたカールの言葉に、ヘレンは驚いた。

「飛ばせないって……どこか問題でもあったの？　ゆうべの爆発だって、格納庫の中は無傷だったんじゃ……」

「工作中だった二号エンジンをお釈しゃ迦かにしちまったからな。いまブリッツに積んでる一号エンジンを一いっ旦たん降ろして、そいつにアフターバーナーを実装しなくちゃならん。ちょっとした大仕事さ。いや、申し訳ない話なんだがな……」

　カールの苦笑いは、昨夜ヴァイニンガー博士と共にやらかした失態を受けてのものなのだろう。が、ヘレンが呆あっ気けに取られた理由はまったく別の所にあった。

　アフターバーナー……概要を聞いただけでも充分に剣けん呑のんすぎるその装置については、昨日の事故で実現が断念されたものとばかり思っていた。確かにそれはヘレンの思い込みに過ぎない。そういう方針が明言された場に居合わせたわけではない。だが普通に考えれば当然ではないのか。一歩間違えばエンジンを爆発させかねないような危険な改造だと、昨夜の一件で誰だれの目にも明らかになったのだ。

「結局……まだ諦あきらめてないの？　みんな……」

「ん？　そりゃそうさ。昨日は確かにミスったが、それで構造の問題点はほぼ全部目め処どがついたからな。実物は壊れちまったが、おかげで設計図面の方は完かん璧ぺきなものが仕上がるってさ」

　ヘレンの胸の内にある驚きと危き惧ぐが、カールにはまるで伝わっていないのか、その表情はどこまでも和なごやかで楽観的だった。

「今まで試行錯誤だった部分は全部クリアになったから、工程は多分、早ければ四日。テストに一日かかるとして、最短でも五日間は何もすることがない。せいぜい練習がてらエトピリカで飛ぶぐらいが関の山だなぁ」

「ちょっと……そんな簡単な話なの？　事故の原因とか、ちゃんと解わかってるわけ？」

「いやだから、あれは俺おれの不注意で……」

「ねぇカール、ふざけないで。君にとっては命がけの話でしょ」

　ここにきてようやくカールも、ヘレンの深刻な面おも持もちに気がついた。

「……なぁ、どうしたんだよ？　急に」

「君……自分の命を何だと思ってるの？」
「俺はテストパイロットなんだ。危険と付き合うのが仕事だよ」
「危険を見極めるのが、でしょう？　好きこのんで死にたがるわけじゃないって、そう言ってたのは君自身じゃない」
　やや鬱うっ陶とうしそうに視線を泳がせるカールの様子は、まるで口うるさい母親に詰なじられる悪童のようだった。
「だから、大丈夫だって言ってるんだよ。たしかにアフターバーナーは危険な装置だが、御しきれないほど危険ってわけじゃない。慎重に扱うにはどうすればいいのか、俺はもうそれを知ってる。ゆうべの件でよぉ～く解った」
「……」
　まるで話が通じていないと、そう理解した時点でヘレンは黙り込み、視線を落とす。こうなると理屈でどう問い詰めようとも無駄だ。こと仕事の危険性についての論議では、どこまで行っても平行線を辿たどるばかりである。それはこれまでの彼との付き合いでさんざん思い知らされてきた。
「博士たちだって、ちゃんと勝算があるからやってるんだ。壊れると解わかってる飛行機を造る馬ば鹿かはいないよ。みんなを信じろ」
「……」
「なぁ、仕事の話はやめようぜ。せっかく気分転換に来たんだからさ、な？」
「……うん」
　そう頷うなずいたヘレンだったが、食べかけのポークパイの味は、もう美う味まいのか不ま味ずいのか、まともに判別できなくなっていた。

　続く数日間、ヘレンは手が空あくごとに足繁く工作室に通い、戸口からエンジン改修の様子を遠目に見守るようになった。博士もオットーも、そんな彼女を怪け訝げんには思った様子だったが、べつだん邪魔になるわけでもないのなら構う理由もなく、アフターバーナーの実装作業は、ヘレンの眼前で着々と進められていった。

専門的な知識を持ち合わせていないヘレンには、その工程や進しん捗ちょく具合について見極めることは適かなわなかったが、バラバラの機械が刻一刻と結合し、着実に完成へと迫っていく様は、雰囲気だけでそれと察しがついた。オットーをはじめとする優秀な技師たちの手は些いささかの遅滞もなく動き、ついにはカールの目算通り、四日目の夜には、彼らの面おも持もちから無言のままに滲にじみ出る満足感と達成感から、ヘレンはアフターバーナー搭載型エンジンの完成を窺うかがい知った。

ヴァイニンガー博士とオットーの、祝杯でも上げようとしているかのような雰囲気を察した上で、ヘレンはついに、工作室の中へと踏み入った。

「お爺じいちゃん、ちょっといい？」

「ん？　どうしたね？　こんな時間に」

ヘレンは工作台の上に据え付けられた巨大なエンジンの構造をまじまじと眺めた。敬愛する祖父の独創に基づく全まったく新たな推進装置——かつてそういう触れ込みのもとで眺めたジェットエンジンの容姿には、どこか神聖なまでの厳おごそかさと、誇りを感じたのを覚えている。だが今、ヘレンが受ける印象は、その頃ころとはまるで異なっていた。むしろブリッツに積み込む機関砲を初めて間近に見たときの、曰いわく言い難い不吉さに近いものを感じる。

或あるいはこれは、兵器と同じ、人を殺すことにしかならない機械なのではないか……と。

「このエンジンがどれだけ安全なのか、本当のところを教えて欲しいの」

ずばり核心に斬きり込んだ孫娘の言葉に、さしものヴァイニンガー博士も返答に詰まった。

「……試作機っちゅうもんは、総じて危険な代しろ物ものじゃよ」

「はぐらかさないで。教えて。これを積んだ飛行機にカールを乗せて大丈夫なの？」

「儂わしらはそのために手を尽くしとるんじゃ。解わからんのか？」

「手を尽くして、上ぅ手まくいったの？　二度と事故が起こらないような仕組みにできたの？　どうなのよ！」
「ヘレン、あのな……」
　苦りきる博士を前にして、見かねたオットーが諭さとす口調で割り込んだ。
「博士、お孫さんの気持ちは知ってるだろう？　彼女には知っておく権利がある」
「むぅ……」
　黙り込む博士に代わり、ヘレンの厳しい眼まな差ざしを、今度はオットーが正面から受け止めた。
「ヘレン、専門的な話だからかいつまんで説明する。それでもいいか？」
「お願い」
　オットーは素人にも通じやすい言葉を探してか、しばし腕を組んで黙考し、それからおもむろに語り始めた。
「……以前のブリッツでは、機体の高熱部分と燃料系統の配置とは充分に離してあった。万に一つも燃料が引火する心配はなかった。だがアフターバーナーを積んだことで、今は燃料パイプがエンジンのすぐ隣を走ってる。俺おれに言わせりゃ、今度のブリッツは空飛ぶ焼しょう夷い弾だんも同然のシロモノだ。もちろん可能な限りの配慮はしてあるが、以前と同じレベルまで安全性を保っているかといえば……答えは〝否いな〟だ」
「……」
　感情を一切面おもてに出す事なく、解説に耳を傾けるヘレン。オットーもまた努めて平静に、その先を続ける。
「それ以外に、機体そのものの剛性についても楽観はできなくなった。音の壁を破った向こう側の空気抵抗は計測さえできてないし、アフターバーナーの最終出力も、現状では概算で当たりをつけるしかない。最終的にどれほどの無理が機体にかかるか、誰だれにも予想がつかないんだ。パイロットには、危険を感じたら即座に装置を切るだけ

の判断力がいる」
「……それが、カールにできると思う？」
　低い声で問うヘレンに、オットーはきっぱりと頷うなずいた。
「カールにしかできん。世界中どこを探しても、こんなものを乗りこなせる男はカールしか……」
「もういい」
　聞くべき事は全て聞いた。そう無言の結論を背中で語りつつ、ヘレンは踵きびすを返した。
「……もういいわ」
　そのまま足早に工作室を後にする彼女を、博士とオットーは沈ちん鬱うつな面おも持もちで見送った。
　彼らとて、どう言い繕つくろおうとも正味の所では認めざるを得ない。
　次の飛行試験に臨むとき、おそらくカールはかつてない程の危険な挑戦を余儀なくされることだろう、と。

　やることもなく漫然と過ごす夜は、滑走路に出て星を眺めるのがカールの習ならいだった。
　冬の寒い時期だろうともさして頓とん着ちゃくはしない。気が向けばコンクリートの舗ほ装そうの上に仰あお向むけに寝転んでみたりもする。街の灯ひから遠く離れて、高原の澄んだ夜気の底から見上げる空には、晴れていれば満点の星の彩りがある。ただ見上げているだけで夜空を飛んでいるかのような、そんな錯覚に陥おちいることもある。
　今夜にはエンジンの改修にも目め処どがつくだろうと、博士からは報しらされている。明日は丸一日、朝一番から入念なテストの繰り返しに終始するだろうが、それでも明後日には再び空を飛べるだろう。新たな力を得たブリッツフォーゲルと共に。
　アフターバーナーに託す期待は限りなく大きい。現状のプランの中で、唯一、帝凰龍カイザードラッヘの音速飛行に対抗しうる切り札だ。消費燃料の増大については、アルベルトの着想で特殊な増ぞう槽そうタン

クを設計し、既(すで)に解決済みである。離陸から龍(りゅう)との遭遇、そしてレース開始に至るまでの通常飛行はすべて増槽の燃料で賄(まかな)い、いざ勝負が始まればデッドウェイト解消のために即座に切り離して投棄できる構造になっている。こちらの動作テストは既にエンジンの改修中に済んでおり、万全だ。

　機銃試射のノルマもあと数回を残しているが、期限まではまだ大分ある。最低でもあと一か月は、ヴァイニンガー飛行場の開発チームがテスト飛行の主導権を握っていられる筈(はず)だ。

　いよいよ正念場が迫っている——その思いが、熱く静かに血を滾(たぎ)らせる。

　目に焼き付いた帝凰龍(カイザードラッヘ)の雄姿は、思い出すたびにカールの胸を言い知れぬ昂(こう)揚(よう)へと誘った。あの存在と巡り合い、挑みかかるためだけに、自分はこの世界に生を受けたのではないかと、そんな運命的なものさえ信じてしまいそうになる。天空の主と次にまた再び相(あい)見(まみ)えるのはいつなのか。もし最短であるならば、それは明後日の空なのかもしれない……

　ふと、近づいてくる人の気配を察して、カールは寝転がっていた滑走路から身を起こした。

　ヘレンだ。月の光は地面に影を落とすほどの明るさがあったが、それでも他人の表情をつぶさに読み取るには充分ではない。彼女がどこか思い詰めたような面持ちをしている風にも見えるのは、はたして気のせいだろうか。

「……どうした？」

「カール、もうブリッツフォーゲルに乗るのはやめて。帝凰龍(カイザードラッヘ)は諦(あきら)めて」

　藪(やぶ)から棒に切り出された硬い声音に、カールは我が耳を疑った。

「おい……」

「今度あれに乗ったら、君は死ぬわ」

　また、それか……カールは思わず辟(へき)易(えき)した溜(た)め息(いき)を漏ら

す。ここ最近のヘレンの心配性は、以前に輪をかけて過敏なものになっていた。もちろん原因に心当たりはある。カールとヴァイニンガー博士の不注意が招いたエンジンテストでの事故だろう。
「あのな、ヘレン……俺おれたちのやっていることに１００％の安全なんてないんだ。いつだって最悪の事態は覚悟してる」
「自分から最悪な方に進んでいってどうするのよ！　そんなの覚悟でも何でもない！　ただの自殺よ！」
　今夜のヘレンの剣幕は、いつにも増して刺とげ々とげしかった。もう最初から喧けん嘩か腰だ。さしものカールも苛いら立だちに声を荒らげてしまう。
「アフターバーナーは頼みの綱なんだ。こいつがなけりゃ帝凰龍カイザードラッヘには勝てっこない！」
「命がけで勝たなきゃならない勝負なの⁉　そんなの殺し合いと同じじゃない！　戦時中の君とどう違うのよ⁉」

「……ッ」
　果たして意図してのものだったのか、ヘレンの言葉は決定的に深々と、カールの胸の内にある急所を抉ぇぐっていた。
　そう――今ではカールもまた認めざるを得ない。ブリッツフォーゲルは決して平和のための翼などではない。既すでにカールは一度、空戦と呼んで差し支つかえないだけの体験を潜くぐり抜けているのだ。だがそれでも、カールにはまだ反はん駁ばくの余地があった。二年前の自分とは明らかに一線を画する、決定的な差が。
「今の俺おれは！……誰だれも殺したりしない」
「殺すわよ！　君の夢が、君自身を！」
「……」
　それは、ヘレンの観点からすれば、殺人と同等に罪深く呪のろわしいことなのだろう。理屈としては、解わからなくもない。大戦中、空戦に臨んだカール・シュニッツの生還率を客観的に計算してみれば――おそらく、その値はブリッツフォーゲルの事故確率をずっと下回るに違いない。
　ただ確率論だけを問うならば、おそらくカールは、かつてないほど死神の間近に立っているのだ。
「……ねぇ、あたし何か間違ったこと言ってる？　君に死んで欲しくないって……そう思うあたしはおかしいの？」
「……」
　返す言葉はなかった。どう言い繕つくろったところでそれは詭き弁べんにしかならない。彼を案じる女の心をただ慰い撫ぶするためだけの詐術。だがヘレンは決して誤魔化されないだろう。彼女はそこまで愚かではない。
「俺は……一度は死んだも同然だった。そんな俺が、この夢で、もう一度生きる意味を得た」
　もはやカールは観念して、思うところをそのまま口にするしかなかった。
「だから今生きてる俺は、きっとこの夢に殺される。意外なことじゃ

ないさ」
「……ッ」
　静かに語るカールの声、それを裏打ちする決意の固さは、ヘレンの耳にも明らかだったのだろう。彼女はそれ以上言い返すこともなく、ただ涙を落とすしかなかった。
「……ついていけないわ。あたし」
「無理もないと思う。すまない」
　カールは駆け去っていくヘレンの背中を、ただ言葉もなく見送るしかなかった。思い返せば、こうまできっぱりと彼女を拒絶したことは、これが初めてのことだ。いつだって彼はヘレンの優しさに甘え、気遣いに身を委ゆだねて、ただ流されるがままの安あん寧ねいを甘受してきた。
　胸元に提げた龍りゅうの牙きばをまさぐりながら、その硬く鋭い感触に問いかける。――自分は間違っているのだろうか、と。
　多分、正しいのはヘレンの方だ。人として幸福に生きる道を探るなら、カールは彼女をこそ指標として仰ぎ見ながら進むべきなのだ。だとすれば、きっと彼の決断は、どうしようもなく人の道を踏み外したものなのだろう。
　むべなるかな、とも思う。人は空を飛ばない。両足を支える大地を、その揺るがぬ重力を頼もしく思いこそすれ、煩わずらわしいと厭いとうなど有り得ない。
　いつだったか、エリックに言われたことがある。――いっそ龍りゅうに生まれていれば良かったのではないか、と。そんな過日の少年の言葉が、いま限りなく胸に重い。
　そう、その通りなのだ。
　どうして自分は、人間として大地に生まれ落ちてしまったのだろうか。

北海の凍えた空を、白銀の翼で切り裂きながら、ブリッツフォーゲルは六日ぶりに取り戻したエンジンの咆ほう哮こうを高らかに轟とどろかせている。

アフターバーナーの搭載による外見上の変化は殆ほとんどないが、それに伴う消費燃料の増加に対処するための増ぞう槽そうタンクの追加は、機体のシルエットの印象を大きく変えていた。

従来の航空機では、増槽は爆弾と同様に、機体底部か翼のパイロンに吊っり下げられるのが通例だった。が、ただでさえ翼面荷重の値が大きすぎるブリッツフォーゲルは、さらに余計な積載物を追加すればまともな揚力を得られなくなる。そこでアルベルトは一計を案じ、平たく潰つぶした形状の増槽タンクを翼の両端に配して、それ自体が揚力を発生させる主翼の延長部分として機能するように計らった。結果、翼面積の増加によって軽減された翼面荷重は、増槽による重量の増加分を補うのみならず、低速時の安定性までも向上させ、若干ながらも操そう縦じゅう性の改善に繋つながった。

もちろん、揚力の向上と同義である空気抵抗の増大は、機体の最高速度に大幅な制約を課すことになるが、翼端増槽は操縦席からの操作で瞬時に切り離すことが可能で、いざ投棄してしまえばブリッツはもとの高速飛行に特化した形態を取り戻す。つまりは機体本体に積載された燃料を龍との対決まで温存しておくことが、増槽タンクの役目であった。

そして、装いも新たなブリッツフォーゲルが極点を目指して飛ひ翔しょうするのは、ひとえに帝凰龍カイザードラッヘとの遭遇を求めてのことだ。これまで報告されてきた帝凰龍カイザードラッヘの観測事例は、かなりの確率で、北方へと飛び去るその姿を見届けた所で終わっている。

現在、北極点とその近辺を監視範囲に捉とらえうるレーダー基地は、周辺諸国のいずれも建設するには至っていない。それ故ゆえ、かねてから帝凰龍カイザードラッヘの生息拠点は北極にあるものとする仮説が定番となっている。

極寒の気温と異常気象、そして数々の怪現象が報告されている北極

圏は、今なお人類の手が及ばない数少ない秘境のひとつである。白く凍(い)てついた死の世界を征(ゆ)くのは、トロポポーズ高度のマイナス90度にも達する極低温にも耐えうるよう設計されたブリッツフォーゲルであればこその蛮勇だ。
『……本当にいると思うか？　そこに』
　ノイズ混じりに無線から届くクルツの声は、あからさまに訝(いぶか)しげである。だが一方で、カールの胸中は懐疑に曇ることなく、秘めた期待に高鳴っている。
「いないと思えば、いやしないんだろうな」
『何だよそれ。お前、いつから哲学者になったんだ？　カール』
　からかうようなクルツの声にも、カールは乾いた苦笑を返すしかなかった。
　帝凰龍(カイザードラッヘ)について何事かを思索し、それを言葉にしようと思うなら、誰(だれ)しも哲学の領域に片足を突っ込まざるを得ない。あそこまで理屈を超えた超常の存在と向き合うには、もはや観念によって認識を突き詰めていくしかない。
　帝凰龍(カイザードラッヘ)はいる。――根拠など何もない只(ただ)の直観のみによって、カールはそう確信していた。否(いな)、むしろ探すまでもなく、向こうから赴(おもむ)いてくる筈(はず)だ、と。
　あの龍(りゅう)は、現れるべき場所には必ず姿を現すのだ。誰かの運命の節目に、その邂(かい)逅(こう)が間違いなく何らかの意味を持つことをまるで予期しているかのように。
　それをどのように察知し、どういう基準で取捨選択して行動に及んでいるのか、それは理解しようもない。或(あ)るいは本当に全知全能なのだとしても、さほど驚くには値しない。その飛行プロセスさえも全く未知である超生物に対して、今さらどんな限界を推察しろというのか。
　ともあれ、今このブリッツフォーゲルが音速に挑む覚悟を決め、その手段を整えていることは、あの天空の覇者にもきっと伝わっているに違いない。ならば、来る。その到来を待ち受けるカールの心境は、

さながら啓示を受けるべく身構える預言者のそれにも似ていた。
　そして――彼の信念が天に通じたか、或いは奇跡にも似た偶然なのか、霜に霞かすむ風防キャノピーの彼方かなたに、黄たそ昏がれの一番星の如ごとき輝きが出現する。
「見つけたぜ……十一時の方角、間違いない！」
『な……本当に……ッ!?』
　カールは狙ねらい定めた輝点めがけて、スロットルを全開にまで叩たたき込む。まだ増ぞう槽そうに残っている燃料はここで使い切って構わない。出し惜しみは一切無用だ。
　シルヴァーナ空軍のレーダーによる支援を受けられる空域にいないため、まだ彼ひ我がの距離までは解わからない。だが相手がこれまで通りにトロポポーズ高度の近辺を遊ゆう弋よくしていると仮定するならば、水平線との視差から推算して、おそらく距離は二〇マイルといったところか。今のブリッツの最大加速なら一〇〇秒とかからない。
――勿もち論ろん、それは相手がその場に静止していた場合の話だが。
　新調されたスロットルレバーの、親指位置に新たに設けられた押しボタンの感触を、カールはそっと指の腹で撫なでて確かめる。レバーを全開位置にまで倒し込んだ時にのみロックを解除されるそれは、アフターバーナーの点火スイッチだ。頼みの綱であるこの加速装置は、おいそれと使うわけにはいかない。従来の出力では突破できない造波抵抗ウェーブドラグの壁に阻まれた、その時にこそ行使すべき最終手段だ。
　何せ予想される燃料消費率が危険な程に高い。エンジン内部の燃焼室に注ぎ込む量とはまた別に、さらに機外へ垂れ流しも同然に放出するのだ。一歩間違えば帰投に必要な量すら易やす々やすと割り込んでしまうだろう。そうなれば一巻の終わりだ。航空機は自動車と違い、ガス欠になればその場に乗り捨ててヒッチハイクに望みを託す、というわけにはいかない。わけても脱出装置すら積んでいないブリッツフォーゲルにおいては、燃料切れはパイロットの死を意味する結末に外ほかならない。

『……そろそろ無線の有効距離を超える。カール、健闘を祈るぞ。……くれぐれも慎重にな』
「ああ、解わかってるって」
　光の点に過ぎなかった帝凰龍カイザードラッヘの姿は、既に形態の輪郭をおおよそ把握できるほどに近づいている。その体長を正しく計測したデータは未いまだ無い。が、とりあえず標準的な虹龍グレンツドラッヘの二倍——九〇フィート程度と仮定した上で目算するなら、距離はもう五マイル以内にまで迫っている。こうもあっさり接近を許すのは、おそらく覇者としての余裕の現れなのだろう。まだ本気の飛ひ翔しょうで速度差を思い知らせるには及ばない、ということか。舐なめられたものだが、こちらが虹龍グレンツドラッヘと同レベル、と見なされているならば妥当であろう。
　だがさらに距離を詰めても、いまひとつ実感が伴わない。パイロットとして視力を鍛え抜いてきたカールは、空間認識には鉄壁の自信がある。帝凰龍カイザードラッヘの姿はさらに拡大し、もう一マイル以内にまで迫っているはずなのに、そこまで近寄ったという感覚がまるでない。
　つまり——大きさの推測を誤ったのだ。虹龍グレンツドラッヘの二倍どころではない。三倍、いや間違いなくそれ以上はある。嵐龍シュトゥルムドラッヘの目撃報告でも一〇〇フィート級が最大とされているのに、一体どれだけ途方もない巨体を誇るのか。
　不意にその翼を彩る光躍が強さを増し、彗すい星せいのように長く眩まばゆく尾を靡なびかせる。次の瞬間、帝凰龍カイザードラッヘは一気にブリッツを引き離し、遙はるか前方へと遠ざかっていた。
〝始まった！〟
　カールは満を持して翼端増ぞう槽そうの切り離しレバーを引く。まだ僅わずかに内容を残しているが惜しんでいる場合ではない。
　速度四〇〇ノットあまりの対流気圧に抗あらがい続けてきた増槽タンクは、留め金から解放されるや否や落下する暇いとまずらなく、まるで真後ろ目掛けて射かけた矢のように一直線に飛び去って姿を消した。

これでブリッツフォーゲルの空力特性は本来の状態を取り戻す。ぐんと力強くなった加速の伸びが、カールの全身を操そう縦じゅう席に押し付け、圧迫する。

再び帝凰龍カイザードラッヘとの距離が縮まるが、それも長くは続かない。四五〇ノット辺りまでの加速にはブリッツに分があったものの、次第に密度を増していく空気抵抗は、重く粘ついて機体に絡みついてくる。一方で帝凰龍カイザードラッヘのスピードは一向に翳かげりを見せない。速度差は拮きっ抗こうし、やがてじわじわと、両者の間かん隙げきが拡ひろがっていく。

募つのる焦りを自制しながら、カールは速度計の針を凝視する。虹龍グレンツドラッヘ相手に勝ちを攫さらった五〇〇ノットまでは、このまま通常加速で粘るものと決めていた。造波抵抗ウェーブドラグが本格化するのはその先だ。燃料計はまだ充分な残量を示しているものの、これが果たしてアフターバーナーの使用に及んで本当に充分たり得るのかどうか、カール自身にもまだ確証はないのだ。

振り絞るかのようなジェットエンジンの雄お叫たけびとは裏腹に、速度計の針はもどかしいほど緩慢な動きしか見せない。四七〇ノット……四八〇ノット……ますます濃密になって絡みつく空気圧に、白銀の翼が軋きしみを立てる。そんなブリッツの苦く悶もんを嘲あざけるかのように、悠然と光の尾をゆらめかせながら、優雅なほどの余裕をもって先行する帝凰龍カイザードラッヘ。以前の虹龍グレンツドラッヘのように技巧で追跡者を翻ほん弄ろうすることさえしない。そんな小細工を弄ろうするまでもなく、天の覇王の翼は直線加速の力勝負だけでブリッツを圧倒して余りある。

〝舐なめやがって……〟

未いまだに帝凰龍カイザードラッヘはソニックウェーブを発生させていない。ブリッツフォーゲルの追跡を易やす々やすとあしらいつつも、超音速を発揮するには至っていないのだ。それが只ただの油断とは、カールには思えなかった。むしろこれは挑発ではないのか。まだこちらに奥の手があるのを見抜いた上で、それを晒さらして見せろと誘い

をかけているのではないか。
「上等だぜ……やってやろうじゃないか！」
　四九〇ノットを過ぎてなお、不屈の粘りで這はい上がっていた速度計の針が、ついに五〇〇ノットの表示に差し掛かる。待ちに待ったその瞬間、祈りにも似た想おもいを込めて、カールはアフターバーナーの点火スイッチを押す。恐れも不安もありはしない。ただ焦じれるばかりの勝利の渇望と、そして未知の領域へと踏み出す興奮だけが全てだった。
　タービンブレードが奏でる甲高い絶叫の上に、野太く猛たけ々だけしい爆音が覆い被かぶさる。——そう、まさにそれは爆発だった。ブリッツの排気ノズルから迸ほとばしった紅ぐ蓮れんの炎は、北極の零下の大気を轟ごう然ぜんと焼き焦がし、まるで帝凰龍カイザードラッヘが靡なびかせる光の尾を真ま似ねるかのように、一条の灼しゃく熱ねっとなって伸び上がる。
　新たな加速がもたらしたＧは予想を遙はるかに凌しのぐ強烈さでカールを打ちのめし、あわや意識を喪失させんばかりだった。危ういところで堪こらえながら、信じがたい思いで速度計の豹ひょう変へんを見つめる。五二〇ノット……五四〇ノット……伸びる。尚なおもまだ伸びる。
　気がつけばすぐ眼前にまで、帝凰龍カイザードラッヘの尾が迫っていた。まるで歯が立たなかった王者の加速に、届いている。追い上げている。見守るうちにも光の翼が肉薄してくる。
　いける……のか？
　我が事ながら実感を掴つかめず、カールは呆ぼう然ぜんと行く手を眺める。今や帝凰龍カイザードラッヘの巨大な偉容は視野一杯に迫り、その輝きはブリッツの風防キャノピーから射し込む程に近づいて、操そう縦じゅう席に真珠色の色彩を乱舞させている。
　その美しさに心奪われるあまり、カールは今自分が何ど処こにいて何をしているのか、それすらも見失ってしまいそうな心地になった。
——否いな、ただの錯覚ではない。明らかに眼めが異常をきたしてい

る。焦点がぼやけ、視点がゆらぎ、そこに有り得ないはずの幻影が二重写しのように視野を占領しはじめる。

「な……」

始めのうち、それはまったく脈絡のない錯乱したイメージの連なりとしか見えなかった。だがその裏に何か、一貫して通じる秘められたものを感じ取った瞬間、それは意味を成す映像として拡ひろがり、飽和し、カールの意識を占領した。

それは悠久の時間の物語だった。まだ人の容姿と生活が猿のそれに近かった頃ころ、拙つたない石器で殴なぐり合い、群れの長おさの座を争った男たち。やがて誰かが火を操る術を見つけ、石は砕かれ精錬されて鉄になり、そうして研ぎ上げられた剣がまた血に染まる。飽くなき探求と創意工夫をもって発明され洗練されていく、人が人を殺す手段。

連綿と連なるその光景は、すべて俯ふ瞰かんで映し出された。手も届かぬほどの距離を隔てた、遠眼鏡の中の景色のように。

自然の均衡を覆くつがえし、同族をあまねく大地に繁栄させた彼らの英知――同時にそれは、同族を殺し滅ぼすためにも活用される。いつの時代も、変わることなく繰り返して。

火薬が撃ち出す銃弾を、隊たい伍ごを組んで進む戦車を、常に誰だれかが遙はるかな高みから見下ろしていた。大地に栄える小さな命の、不可解なる性さがに首を捻ひねっていた。

何な故ぜ、栄えながらにして滅ぶのか？

病を癒いやし、糧かてを確保し、雨風を怖おじることなく住まう〝智ち〟を得ておきながら――

何故彼らは、その〝智〟をもって同胞を殺すのか？

「……」

幻影のイメージと、己おのれの意志とを区分できるようになって、ようやくカールは理解できた。――自分は今、誰かの思考の中を覗のぞき込んでいるのだ、と。

誰の思考かは考えるまでもない。この視点で、この時間を、すべて見届けてきた者に決まっている。遙か遠くの空からの俯ふ瞰かんで、永遠にも等しいこの歳月を、ただ黙々と観察してきた者の追憶がこれだ。

「……まさか、あんたは……」

視野が変わる。依然として望遠ではあるが、もう俯瞰ではない。眼まな差ざしは同じ空へと転じられ、蒼そう穹きゅうと白い雲の彩りの中にまで踏み込んできた、小さい生き物たちの〝智〟を追い続ける。

それはもはやカールにも馴な染じみの光景。馴染みの被写体だった。Ｈａ１１２、そしてＭｏ１０９――ヴァルハラ半島の空を血と硝しょう煙えんで染め上げた、鋼鉄の翼たち。

「あ……」

いたたまれない程の後ろめたさと恥の意識が、カールの胸を締め上げる。

見られていた。ずっと見守られていたのだ。この空で人間たちがしでかしたことは、全て。

ちっぽけな鉄の翼は、獣のように互いの尾を喰くらいあい、そうして足ぁ掻がき疲れた者から順番に次々と地に墜ぉちていく。その凄せい惨さんな地獄絵図の中を、ただひとつ、支配者の如ごとく我が物顔で縦横無尽に駆け抜けながら、死の銃弾を撒まき散らしている機影が見える。——Ｇｕ１９０、見間違えようもない。その尾翼に描かれた青い王冠と、隣に書き添えられた「６」の文字も、はっきりと読み取れる。

このイメージの主が、はたして何を語ろうとしているのか……その意味にカールはいよいよ察しがつきはじめた。

何故、と、その疑問の念だけが繰り返し伝わってくる。イメージの中にはついに、白銀に輝く新たな翼が現れる。地上の小さなモノたちの『智』が、初めて『彼ら』の領域にまで届けた成果。喜びを込めたその飛ひ翔しょう。だがその翼もまた同族を殺すための武器を積み、そして同族が放つ殺意の銃弾に身を晒さらす。

問われているのだ。その意図を。

『彼ら』からしてみれば凡ぉょそ理解も及ばない愚行の意味。何を求め、何を願って、『オマエ』はこの空にやってきたのか、と……

「……ッ!?」

唐突に、全まったく何の前触れもなく、カールは幻覚から醒さめてリアルな感覚の中に引き戻される。もはや動物的本能の領域にまで鍛え上げられたパイロットとしての直感が、思考の認識を跳び越えて危険を訴えかけている。

真っ先に見たのは燃料系だった。思わず眼めを疑うほどに減っている。帰投燃料のリザーブまであと一歩という危険域だ。

カールの意識は幻覚に囚とらわれていながらも、その眼だけは黙々と計器の表示を読み取ることに専念していたのだろう。思考することと把握することを別個に並行して処理できる、熟練のパイロットとしての習性が、危ういところでカールの命脈を繋つないだのだ。

あと一歩のところで……その悔しさに我われを忘れそうになる。いっそ後先も考えずにこのまま飛び続けたいとさえ思う。あと一〇秒、いや五秒、このまま加速を続けたい。帝凰龍カイザードラッヘの背中はもう、すぐ目の前にまで迫っているのだ。

ふと、脳裏をヘレンの泣き顔が過よぎった。殺すのか、と糾ただす声がした。己おのれの夢で、己の命を奪うのか、と。

何な故ぜなのか、何を求めてか――そう、たった今も問われたばかりの筈はず。

カールはスロットルレバーを一気に手前まで引き戻した。実際のところ、葛かっ藤とうはただの一瞬にも満たなかっただろう。

氷の空に轟とどろき渡っていたタービンブレードの絶叫と、そしてアフターバーナーの怒号が沈黙する。加速を止めたブリッツフォーゲルは、緩い放物線を描いて高度を落としながら、対決の空域から脱落していった。

「……」

彗すい星せいの如ごとく去っていく帝凰龍カイザードラッヘの、煌こう々こうたる輝きを見送りながら、カールは感慨の虜とりこになっていた。

あれは――はたして本当にただの幻だったのだろうか。極限の緊張がもたらした脳内物質の悪いた戯ずら、カール個人の想おもい描いた手前勝手な妄もう想そうに過ぎなかったのだろうか。

そうではないと、そう断言できるほどの確証はどこにもない。龍りゅうからテレパシーを受け取ったなどと信じる方が余程突飛で馬ば鹿かげている。

あの神の如き生物なら、そんな驚異も有り得るのではないかと、そう説いたところで納得する者は皆無だろう。カールが帝凰龍カイザードラッヘに対して懐いだく崇敬にも似た念は、傍はた目めにはカルトに傾倒しすぎた狂信者の戯ざれ言ごとも同然と見なされるに違いない。カール自身、冷静に内省すれば自らの正気を疑いたくもなる。

いくら考えたところで答えは出ない。否いな、そんな回答などどうでもいいのかもしれない。重大なのは問いを発した者の正体ではな

く、問いかけの内容そのものだ。
　何な故ぜ、飛ぶのか？
　何故、挑むのか？
　そこに明確な回答を見み出いだせないままでは、そもそも覇者と競い合う資格すら持ち得ない。機体の性能や燃料の限界を云うん々ぬんするより以前に、あの幻視を前にして動揺してしまった時点で、今日の敗北は必然だったのだ。
　氷原の空に取り残されたまま、カールは打ちのめされた想おもいで、帝凰龍カイザードラッヘの去った方角をいつまでも眺めていた。

　夕焼け空の訪れとともに、ブリッツフォーゲルはヴァイニンガー飛行場へと帰還した。
　帝凰龍カイザードラッヘとのレースの結果は、勝敗についてのみ無線で既すでに通達済みだ。飛行場ではブリッツの敗退を惜しむ声よりも、アフターバーナーが無事に稼働したことへの喜びの声の方が大きかった。まだ試行錯誤段階の装置であり、手を加える余地はいくらでも残されている。緒戦で結果を出せないのはむしろ当然であり、開発陣にとっては今後の改良こそがむしろ本番と言えるのだ。
　着陸した機体を整備班に委ゆだね、疲れた身体からだをロッカールームのベンチに投げ出したカールは、だがしかし、未いまだに空を駆ける浮遊感から解放されなかった。深い物思いに耽ふけりながら、胸のペンダントを手で弄もてあそぶ。地上に降りてなお、空にいたときの感慨をこれほど生々しく引きずったままというのは、初めての経験だったかもしれない。
　やや気後れした風なノックの後に、ヘレンが部屋に入ってきた。一昨日に泣かせてしまって以来、お互いにまだ口も利いていない。が、ともあれ無事にアフターバーナーが稼働してカールが生還した今ならば、もう和解の頃ころ合あいとしても良さそうだった。
「……ちゃんと動いたんだね。あのエンジン」
「ああ……まぁな」

　せっかく掴つかめた会話の手がかりが、そこでまた途切れ、沈黙が降りる。次はカールの方から水を向けるべきだと解わかってはいた。が、何を話せばいいのか思い至らない。仕方なく、彼は自分一人の胸に秘め置こうとしていた事柄を白状することにした。

「今日は、な。……俺おれ、龍りゅうに問い質ただされたんだ」

「……え？」

「どうして飛ぶのか、なぜ勝ちたがるのか、って——あいつ、お前と同じことを俺に訊きいてきた」

「……」

　ヘレンはやや途方に暮れた風に目を泳がせたものの、それでもカールを笑い飛ばすようなことはしなかった。思えばヘレンは昔からそうだった。カールがどんな突拍子もない妄もう言げんを口にしようと、否定も疑いもせず、ただそのままに受け止めて呆あきれたり感心したり、またどうにも理解が及ばないとなれば黙って聞き流すだけでいてくれた。そんな彼女を前にすると、カールは不思議と饒じょう舌ぜつになって胸の内を吐と露ろすることができる。思えばそうやって、以前から随分と救われてきたものだ。

「龍りゅうたちはな、もうずっと昔から人間のことを観察してた。俺おれたちが新しい知恵で新しい道具を作って、そのたびに殺し合ったり戦争したり、馬ば鹿かなことを繰り返してる様を、ずっと呆れながら見守ってたんだ」

「……それ、本当？」

「そんな人間たちが、また新しい道具で、今度はあいつらに挑戦してきたわけだ。だからあいつは……たぶん、問い質ただしてきたんだと思う。何のためにこんなことをしてるのかって」

　ヘレンはなぜか納得したかのように、ただ小さく頷うなずいた。

「それで、君は何て答えたの？」

「……答えられなかった。どう答えればいいのか、解わからなかった」

　そう——まるで解っていないのだ。自分には。

　自らそう口に出して告白することで、カールはようやく胸の痞つかえが下りた。
「今、俺たちがやっていることは……一〇年経たっても、二〇年経った後でも、胸を張っていられることなんだろうか」
「……」
　ヘレンもまた返事に窮きゅうした。おそらくその問いは、この飛行場に詰めている誰もが、頭の隅に留とどめている疑問だろう。
　超音速航空機――それは栄光の翼か、あるいは死を告げる黒い鳥なのか。
　ブリッツフォーゲルを始祖として、今これから始まることになる系譜。その未来は、まだ誰にも解らない。
　ただひとつ、これだけはカールにもはっきりと理解できる。
　次に帝凰龍カイザードラッヘと相あい見まみえるまでに、彼は彼なりの答えを用意しておかねばならないのだろう。
　カールが気を取り直し、ひとまずは話題を変えて二人のことを話そうとしたそのとき、慌てふためいた駆け足が騒々しく廊下に鳴り響き、そして顔面を蒼そう白はくにしたクルツがロッカールームに飛び込んできた。
「……始まっちまったぞ、おい」
　ただならぬクルツの剣幕に、カールもヘレンも、脳裏に閃ひらめいた最悪の予想を確信する。
「始まったって、まさか――」
「ああ。いま首相がラジオで演説してる。ヴィルドバッハが宣戦布告してきやがった！」

［第五章］

戦乱の翼

[第五章] 戦乱の翼

1

　ヴィルドバッハ公国の電撃侵攻作戦という劇的な形で開戦を迎えた前回の戦争と比べると、第二次ヴァルハラ戦役の開幕は、ある種の腰砕けとでも言うべき間ま の抜けた展開から始まった。

　今回、公国軍が攻撃の先せん鋒ぽう としたのは、新開発されたロケット滑空弾による遠距離砲撃だった。これは大型爆弾と多段式の液体燃料ロケットを組み合わせたもので、成層圏にまで打ち上げられた弾頭はグライダーに変形して滑空しながら目標に到達する。射程距離は五〇〇マイルを超え、国境線上から運用すればシルヴァーナ共和国の全域を攻撃範囲に収めうる。

　ところがこれが兵器としてはまったくの欠陥品だった。命中精度がおよそ攻撃の用を為な すには程遠く、半ば運任せも同然という代しろ物もの だったのだ。

　たしかに安価な構造のため大量の発射が可能であり、数撃てば当たる、という確率論でそれなりの戦果を期待されていたのかもしれないが、発射弾数に対する都市部への命中数が５％未満という統計が出た時点で、共和国軍はこの兵器を完全な虚こ 仮け 威おど しと判断した。

　そもそも弾頭の滑空スピードは自由落下による重力加速度任せ、という時点で、命中速度は三三〇ノットが関の山である。これが数時間に一度、散発的に降ってくるだけであれば、都市部上空に迎撃機を交代制で常駐させておくだけで充分な防備となる。

　もちろん、虚仮威しもそうと見破られるまでは有効な戦略である。実際、シルヴァーナ空軍はこのロケット滑空弾の脅威を正しく評価できるようになるまで、防空戦力を内地に振り向けざるを得ず、国境の防衛ラインは相当な混乱に見舞われた。後の諜ちょう 報ほう 活動によって明らかになったことだが、公国軍にはこの隙す き に付け込んで大攻勢を仕掛ける計画があったらしい。それが実現に至らなかったのは、

兵力の運用において致命的なトラブルが重なり、師団レベルでの足並みが乱れたという失笑ものの内幕があったからだという。
　ともあれ、宣戦布告が成されたにも拘かかわらず、ミルヒ河を挟んだ睨にらみ合いには依然として進展らしい進展はなく、戦況は開始早々に膠こう着ちゃく状態という異常な状態に陥っていた。
　ただし、ロケット滑空弾による攻撃を度外視できたのはあくまで戦略上の話であり、共和国の民間における心理効果、とりわけ農村部のそれには深刻なものがあった。戦果からどれだけ離れ、また軍事拠点ともまったく無縁な僻へき地ちであろうとも、等しく爆撃の脅威に曝さらされるというプレッシャーは、市民の日々の生活において大きな重圧となった。
　これに対する軍の対処はといえば、使い古しの対空銃座を各市町村に廻まわし、有志の自衛団による防衛活動を奨励するのみに留とどまった。むしろ鉄壁の防空態勢が整った大都市の方が安全性は遙はるかに高く、それなりの富裕層は農村から都市部へ移転するという、いわゆる『逆疎開』の現象が各地で起こった。

　ヴァイニンガー飛行場の居い候そうろうである幼生龍りゅう、ジークフリートの怪け我がは、もうほぼ完治に至っていた。翼の包帯はとうに取れ、疵きず痕あともよくよく観察しなければ解わからない程度に薄れている。
　そのため近ちか頃ごろのエリックは、永らく飛ぶことを忘れていた小さな友人のリハビリに明け暮れるばかりの毎日だった。
「そら、ジーク、もう一度だ！」
　エリックの両腕によって頭上に高々と掲げ上げられると、もう次に何が起こるか反復で学習させられているジークフリートは、抗議するかのようにギャアギャアと啼なきながら慌ただしく翼をばたつかせる。
　そのままエリックは滑走路を全力疾走し、勢いがついたところで玩おも具ちゃのグライダーでも扱うかのように思い切り幼生龍の身体からだ

を抛ほうり上げる。傍はた目めには荒っぽい仕儀に見えるが、こうでもしなければジークの本気は引き出せない。宙に投げ出された小さな龍は必死に羽ばたいて風を掴つかみ、何とか浮力を得て数ヤードをふらふらと滑空してから、まだ少々危なっかしさの残る姿勢で着地を決める。
「そうだ、いいぞ！　その調子！」
　再び龍を抱き上げて頬ほお摺ずりするエリックは、朝からもう何度同じことを繰り返しているのか知れないというのに、まるで疲労の気配を見せない。端はたで見守っているカールは、さすがにまだ少年の若さを羨うらやむほどの年としではないとはいえ、それでもこの飽くことない情熱には呆あきれ半分に感心するばかりである。
「ずいぶん良くなったな。ジークも」
「ああ、もう大丈夫だよ。餌えさも自分で取れるようになったんだ！」
　もうエリックも幼生龍とのスキンシップには手慣れたもので、どこをどう掻かけば喜ぶか知り尽くしている。翼の付け根の筋肉を揉もまれると、ジークは心地よさそうに喉のどを鳴らしながら少年の顔を舐なめ返す。
「……そこまで懐かれると、別れが辛つらくなったりしないか？」
「うん、まぁね……でも野生に返してやるってのは、最初から決めてたことだし」
　淡々とそう答えながら、それでもエリックが空を見上げる眼まな差ざしは、やや昏くらい。
「……せめて、もうちょっと安心して空に帰らせてやれる時期だったら、良かったのにね」
「……」
　開戦よりこのかた、見上げる蒼そう穹きゅうは誰だれにとっても恐怖の在処ありかでしかない。ヴィルドバッハが性しょう懲こりもなく打ち上げてくるロケット滑空弾の脅威は、すべてのシルヴァーナ国民に分け隔てなく及ぶ偶発的な死の使いだ。

誰だれもが危き惧ぐしていた戦争の再開は、だが案に反して、ヴァイニンガー飛行場の日常を激変させるものではなかった。目に見える大きな変化といえば、憲兵隊に続いて二輛りょうの車載式対空銃座が敷地内に常駐するようになったことぐらいである。名目上は民間の施設とはいえ、仮にも軍が資金提供するプロジェクトが遂行されている以上、それなりの防空対策が講じられるのは当たり前の成り行きだった。

おかげで対空砲の守りを当て込んだ近隣の牧童が、もとの住居を捨てて滑走路を囲むフェンスの外に天幕を張り、生活の拠点を移している。飛行場の開設より相応の時期が経たっているため、皆それなりに見知った顔触ればかりであり、ヴァイニンガー博士も彼らを快こころよく受け入れた。時々、牧童たちは夕食時になると乳製品を手土産に相しょう伴ばんに押しかけてくることもある。憲兵隊の隊長はさすがに渋じゅう面めんを繕つくろったが、既にもう杓しゃく子し定規な規律とは程遠い現場だと納得する程度には場の空気に慣れており、敢あえて咎とがめるようなこともしない。

また一方で密ひそかな変化といえば、ゲプハルト中佐の来訪が途絶えたことだろう。博士をはじめ誰もが警戒していたのは、開戦と同時にブリッツフォーゲルが強制的に軍部に接収される事態だったのだが、いざ始まってみると逆に開発プロジェクトはまるで忘れ去られたかのように放置され、何の要求も寄越されなくなった。そのくせ資材、燃料の請求や飛行プランの申請は、驚くほどあっさり書類が通る。むしろまともな審査すら通過していないのではないかと思うほどの安易さだ。

おそらく若き空軍中佐は何か別件で忙殺されているのだろうが、その結果ヴァイニンガー飛行場の監督業務は、ろくな引き継ぎも成されることなく宙に浮いているらしい、というのが現状だった。呆あきれた話ではあったが、現場の人間にとってはむしろ好都合なのも事実であった。

先の見えない不安と緊張感は、高原の長閑のどかな空気を少なからず

不穏なものにしていたが、それでもなおカールたちは、まだ以前とそう大差ない平穏な日常に甘んじていられた。

　ブリッツフォーゲルと共に飛びながら、それでもなお落胆の溜ため息いきを吐つくようになる日が来ようとは、以前のカールなら想像だにしなかっただろう。

　その日も、帝凰龍カイザードラッヘは姿を現さなかった。

　アフターバーナーの実装と北極圏での初対決から、既に四度目の飛行である。だがあれ以来、ブリッツフォーゲルの前に現れる龍りゅうはいない。帝凰龍カイザードラッヘが姿を見せないだけでなく、虹龍グレンツドラッヘのような亜音速飛行種から挑戦を受けることもなかった。見渡す限りの蒼そう穹きゅうの中、ブリッツフォーゲルは孤独だった。

　戦争の不穏な空気を察し、長距離飛行のできる大型龍はヴァルハラ半島の近辺から退散してしまったのではないか、というのが博士やオットーたちの見立てだったが、カール自身にはそれとはまた別に思い当たる節があった。

　依然、彼には〝挑戦権〟が認められていないのだ。——そう、前の対決で帝凰龍カイザードラッヘに質ただされた問いについて、カールは今なお満足行く回答を用意できていない。誰だれに対してそうごちたわけでもなく、それはカール一人の胸の内に秘め置かれた懊おう悩のうなのだが……それでも龍りゅうには『解わかってしまう』のかもしれない。

　もしそれが真相なら、こうして空を徘はい徊かいすること自体、何の意味もないことになる。無駄な捜索に時間を費やすぐらいなら、大人しく部屋に籠こもって思索でもしていたほうがまだ有意義なのだろうか。

　勿もち論ろん、龍たちに袖そでにされたからといって飛行テストの意義が失われるわけではない。とりわけアフターバーナーについては、実際の運用によって明らかになった問題点に随時改良が加えられ、初使用時よりも格段に性能が向上している。噴霧ノズルの効率化と設置

位置の調整により、最大出力こそ八割程度に抑制されたものの、有効稼働時間は三倍以上に延長され、いよいよ実用的な補助加速装置として機能するようになった。

おそらく飛行ルートの条件さえ都合良く設定すれば——たとえば離陸と着陸の地点を別々に用意し、その間の直線距離を、ありったけの燃料を使い切る計算で加速しながら飛ぶならば、ただの実績としての音速突破はもう可能なところまで来ているだろう。記録を残すことだけが目的ならばそれもいい。だがプロジェクト・ブリッツフォーゲルの真意は他ほかにある。あくまで龍の闘争のルールに沿った上で帝凰龍カイザードラッヘに打ち克かつのでなければ、彼らの目標は達成されない。

「……今日もまた、空振りか」

燃料計の表示を検あらため、既すでに残量が帰投ぶんしかないことを確認する。そろそろ潮時ということだ。今日もまた結局、使い終わった翼端増ぞう槽そうを捨てるには及ばなかった。空のタンクは死重量だが、既製品ではなくブリッツ専用に一から設計されたハンドメイドであり、無駄に投棄していいものでもない。レースを断念したときは、ひとまずヤーデ高原まで引き返して最寄りの湖に増槽を落とし、それから残りの燃料で出来る範囲でアフターバーナーの稼働データを計測した後、滑走路に着陸するのが習わしだった。湖に捨てた空タンクは、翌早朝にアルベルトとクルツが、趣味の鱒ます釣づりのついでに回収してくる。

カールは既に馴な染じみのものになりつつあった軽い失意を懐いだきつつも、機首を反転させてヴァイニンガー飛行場への進路を取った。

すると、まるで行く手に待ち構えていたかのように、二機の戦闘機がいるのに気がついた。シルヴァーナの領空、それもミルヒ河の最前線とはまるで方角が違うのだから、まさかヴィルドバッハの機体であろう筈はずもない。案の定、接近してきたそれは、昔馴な染じみのハフナー１１２型である。

ハフナーはブリッツに併走し、軍用回線で無線に応じるようシグナ

ルを送ってきた。何事かと訝いぶかりつつも、カールは通信機の周波数を調整する。
『――こちらはシルヴァーナ空軍第一八方面防空師団所属、ドノヴァン大尉だ。ブリッツフォーゲル、応答されたし』
「こちらブリッツフォーゲル。一体何事だ？」
『これより貴機をリヒャルト基地へ誘導する。ご同行願いたい』
「あん？」
　カールは不審も露あらわに眉まゆをひそめた。一体どんな権限があって、この大尉はそんな要求をしてくるのか。
「どういうことだ？　こちらのフライトプランは軍にも承認されてる筈はずだろ。今になって変更しろっていうのはどういう了見だ？」
『非常事態だ。現在、シュタルケ地区にロケット滑空弾による空襲警報が発令されている。既に迎撃部隊が展開中だ』
「……ああ、成る程ね」
　最近では、国境付近でヴィルドバッハ側がロケット滑空弾打ち上げの動きを見せるたび、即座に攻撃予定地域が特定され、警報が発令される仕組みが出来上がっていた。またブリッツフォーゲルはその特異な外見故ゆえに、ヴィルドバッハのグライダー弾頭と誤認されやすいらしく、現に以前にも空襲警報と飛行ルートが重なってしまった際、些いささか厄介な騒動をもたらしてしまった経緯がある。
『無用な混乱を避けるため、貴機には最寄りの空軍基地に着陸して待機してもらう。悪いが、これも命令なんでな』
「……」
　確かにロケット弾爆撃の危険区域は広範囲に及ぶし、今からシュタルケ地区を迂う回かいしてヤーデ高原まで戻るには明らかに燃料が足りない。当然、警報が解除されるまで手前の空域で旋回しているというわけにもいかない。
　かといって、ヴァイニンガー飛行場以外の施設にブリッツを着陸させるというのは、やにわに承諾できる話でもなかった。一度降りてしまえば離陸するには燃料の補給がいる。そうなれば見ず知らずの人間

に機体の整備を委ゆだねるしかない。とりわけ軍部の関係者となると、カールは今なお人間不信の感情を捨てきれずにいる。

しかし、既すでにドノヴァン中尉とその僚機は、力ずくでもブリッツフォーゲルを指定の基地に降ろす気でいるらしい。頭上と正面に密接せんばかりの距離で陣取って、もはや不審機を強制着陸させる際と同じ構えでいる。

カールとて以前は軍の釜かまで飯を食っていた身である。任務を帯びた士官に対して何をどう食い下がろうが、まったくの徒労にしかならないのは重々承知していた。彼らには任意の決定権などなく、命令を履り行こうできなければその責任を問われる立場なのである。

「……この機体の整備は専任のスタッフじゃなきゃ務まらない。誰にでも任せられるってもんじゃないんだがな」

『心配いらない。ヴァイニンガー飛行場には事情を伝えてある。既すでに開発責任者自らが陸路でリヒャルト基地に向かっているはずだ』

「ああ、そうかい」

そこまで手回しが出来ているなら、もう難なん癖くせのつけようもない。カールは観念して操そう縦じゅう桿かんを握り、先行するハフナーの尾翼を追って、再度進路を変更した。

リヒャルト基地などという名称は、従軍時代の記憶を探ってもカールには思い当たらない。おそらくは前回の戦争の後で新造された施設なのだろうと予測はしていた。

実際、上空まで来てみると、はたして最新の設計と一目で見て取れる大規模な基地だった。地勢的に軍が拠点を置く必要がある土地とも思えないが、それにしては敷地面積の広さと付随建造物の多さが気にかかる。

どこか釈然としないものがあるにはあったが、離着陸距離の長いブリッツにとって、充分な奥行きのある滑走路は有り難かった。慣れ親しんだヴァイニンガー飛行場よりもなお余裕をもって、カールは機体を着陸させることができた。

パイロットが自力では風防キャノピーの開閉さえできないというブリッツの仕様は、既に通達されているらしく、さっそく整備員が機首にタラップをかけて風防キャノピーの固定ボルトを緩めにかかる。機外に降りるよりも前から、カールは基地の全域から彼の愛機へと注がれる奇異の視線を意識した。目につく範囲にいる作業員の悉ことごとくが、手元の仕事を中断してブリッツフォーゲルを眺めている。

曰いわく言い難い居心地の悪さを感じつつ、カールは風防を外した整備員の手を借りて、狭い操縦席から身体からだを引きずり出した。ヘルメットを脱ぐと、高原の爽そう気きとは程遠い澱よどんだ空気が鼻をつく。

タラップの下には、既に中佐の襟章をつけた空軍将校が待ち構えていた。おそらくは事務官か何かだろう。戦闘機乗りであれば重い操縦桿の扱いに相応の剛腕が要求されるものだが、それにしては体格が細すぎる。

「ようこそカール・シュニッツ少佐。空軍技研のハインツ中佐だ。『王冠六号クローネゼクス』とお目通りが叶かなって光栄だよ」

「……」

慇いん懃ぎんに敬礼しながら名乗った中佐に対するカールの心象は、その一言目にして最底辺に堕した。

「民間人に敬礼はいらんぞ、中佐さん」

「惜しい話だな。君ほどの英雄を退役させてしまうとは」

不興も露あらわに呟つぶやくカールに対し、ハインツ中佐は冷ややかに冷笑する。お互い、睦むつまじい人間関係を築く意図は皆無と知れた。

それにしても、技研の人間が何な故ぜここに――そう疑念を懐いだいた途端、カールの脳裏に、リヒャルト基地を目にした時の違和感についてすべて納得いく推察が閃ひらめいた。

妙に多すぎると思った併設施設、あれはおそらく実験棟や工房の類たぐいだ。充実した設備規模は、現時点で想定外の航空機すらも将来的に運用していくための備えだろう。そして、決して攻撃や防衛の要と

はなり得ない立地条件……
　ハインツは基地にたまたま居合わせた技術将校などではない。彼はこの施設に常駐する人員だ。ここは技研のための研究施設に違いない。
　不吉な予感が、群むら雲くものようにカールの胸中に立ち込めていく。
　カールの表情の変化を目め敏ざとく見て取ったのか、ハインツ中佐は満足げに頷うなずいた。
「察しがついたようだね。こちらとしても説明の手間が省けるのは望ましい」
「無精するんじゃねぇよ。はっきりと言いやがれ」
「現時点をもってブリッツフォーゲルはすべてのテスト課程を完了し、空軍の管轄下に移る」
　怒りのあまり目の前が暗くなる。――が、そんなカールを牽けん制せいするかのように、いつの間まにか現れた憲兵が、その両りょう脇わきを固めている。
「……話が違うぞ。テスト飛行は最後まで俺おれたちが引き受ける約束だろうが」
「だから、テストは完了なのだよ」
　激げっ昂こうを必死に抑え込もうとするカールの様子が、ハインツ中佐にとってはとことん愉快な見せ物であったらしい。
「君たちはよくやった。すでに報告されている諸性能だけで、次世代戦闘機のモデルベースとしては充分な結果を残している。もうこれ以上は結構、ということだ」
「……ゲプハルト中佐と話をさせろ。今どこにいる？」
「彼はこのプロジェクトから解任された」
「なにぃ!?」
　今度こそカールは感情を抑えきれなくなり、ハインツ中佐に掴つかみかかろうとした。が、一歩踏み出す間もなく両脇の憲兵に肩を押さえ込まれる。

「汚きたねエぞ……それが貴様らのやり方か！」
「君と話していると、まるで小学生を相手にしているようだ。虫むし酸ずが走るね。幼稚な大人ってやつは」
　捕獲された猛獣のように暴れるカールに、ハインツ中佐は軽けい蔑べっしきった一いち瞥べつを送った後、何処いずこへともなく手で合図を送る。すると、まるで手品のように建物の裏から現れた白衣姿の技師の一団が、手に手に工具や計測器を携たずさえてブリッツフォーゲルに群がっていく。
　今度こそカールの脳裏を、白熱する憤ふん怒ぬが焼き焦がす。
「そいつに触るなッ！」
　声の限りに罵ば声せいを張り上げたその直後、憲兵が振り上げたライフルの銃床がカールの顎あごを直撃した。
　最後にハインツの薄笑いを目に焼きつけて、カールの意識は途絶した。

　カールの身元引受人として、ゲプハルト中佐が憲兵隊の拘置所に姿を現したのは、夜ももう大分更けた時分だった。
「あっさり出られて幸運だったな。知人に将校がいたことを感謝しろ」
「……」
　開戦以来、およそ半月ぶりに顔を合わせるゲプハルトが、開口一番そう皮肉たっぷりに毒づくのに対し、すぐさま気の利いた応答をすることが、しかしカールにはできなかった。ゲプハルトの服装に目を奪われていたせいだ。
　以前までのダークグレイの軍服ではない、青せい灰かい色しょくの特別仕立ての制服。そして青い王冠を刺し繍しゅうした腕章。それは前戦役の終結とともに解散されたはずの、特殊部隊の隊服だった。
「事務課あたりにでも飛ばされたと思ってたのか？」
　幽霊でも見るような目つきのカールに対し、ゲプハルトは苦笑混じりに肩をすくめる。

「近々、王冠中隊クローネンシュタッフェルが再編される。今度は俺おれが隊長だそうだ」

「そうか……」

　ハインツ中佐からゲプハルトの転属を報しらされたときは、それがブリッツフォーゲルの移管を巡る小こ狡ずるい細工だとばかり思っていた。が、真相はまるで違ったらしい。かの試作機を中心に世界が廻まわっているわけではない。そう感じていたのはカールだけで、実際にはより大きな流れの中で、世の中は動いているのだ。

「ヴァイニンガー博士も来ているよ。いま技研の連中がブリッツについてレクチャーを受けている」

「……博士は、大人しく従ったのか？」

「少なくとも、殴なぐり倒されるような真ま似ねはしていない」

　ゲプハルトに伴われて憲兵隊の詰め所を出たカールは、リヒャルト基地の長い滑走路を横断し、夜もなお煌こう々こうと明かりの灯ともされた格納庫の前まで案内された。

　入口からそっと中を覗のぞくと、一角に誘導されたブリッツフォーゲルを前にして、ヴァイニンガー博士がハインツをはじめとする技研メンバーに何やら延々と説明している。

「研究のために、試作機は明日にも解体される」

「……」

　ゲプハルトから淡々とそう告げられても、カールの思考は麻ま痺ひしたきり、何の感慨も思い浮かばなかった。

「もう一度、間近に見ておきたければ、今夜が見納めになるが……どうする？」

「……いい。また暴れだしちまうかもしれないからな」

「そうか」

　広大な格納庫の冷たい照明を浴びる白銀の機体は、何な故ぜか、高原の滑走路で眩まばゆい陽ひ射ざしに輝いていた愛機とは、もう別のものであるかのような余よ所そ余よ所そしい印象を受けた。

もうあの翼が共に空に挑むことはない。誰だれもいない氷原の彼方かなたで神と競い合うこともない。

まるで悪い夢を見ているかのようでもあり、また同時に、昨日までの日々がすべて夢だったかのような感覚もあった。

「……解体には、立ち会えるか？」

遠い眼まな差ざしでブリッツフォーゲルを眺めながら呟つぶやくカールに、ゲプハルトが頷うなずく。

「博士の同伴者として手配は済ませてある。今夜はこの基地に泊まっていけ」

「すまない」

踵きびすを返しその場を去ろうとしたところで、カールは、格納庫脇わきに駐とめられた給油車の傍かたわらにヘレンが立っているのに気がついた。目め敏ざとく見み咎とがめたゲプハルトが、気を利かせてか、さっさと先を行き姿を消す。二人きりになったところで、ヘレンはやや遠慮がちに微笑を見せた。

「君もいるって聞いたから……お爺じいちゃんに頼み込んで、連れてきてもらっちゃった」

「軍の基地に来たがるなんて、お前らしくもない」

「君のこと、今は……独りにしておけないかな、って」

苦笑して、カールは給油車のフェンダーに凭よりかかる。

「終わっちまったな。何もかも」

自みずからそう口に出して、ようやくカールは、いかに己の内側が空虚になっているのか自覚できた。空っぽすぎて悲しみも悔しさも湧わいてこない。まるで退役直後の、隠いん遁とん生活を送っていた頃ころの自分に戻ったかのようだ。

「……またいつか、飛べばいいよ。きっとまたチャンスがあるよ」

「だがもう、帝凰龍カイザードラッヘには届かない。祭りは終わりだ」

軍部がジェット戦闘機開発へと寄せる期待に巧みに便乗することで、プロジェクト・ブリッツフォーゲルは成り立ってきた。いかに技術的な蓄積が得られたとはいえ、再び同じ機体を組み立て、運用する

だけの資金はヴァイニンガー博士個人の資産だけでは賄まかなえないし、そんな計画に賛同するほど酔狂なスポンサーを他ほかで探そうというのも無理がある。戦乱の時代はまだまだ続くだろう。誰もが明日の命を危ぶむ毎日を送る中、益やく体たいもない夢や希望に投資を募つのるなど愚の骨頂だ。

　ヘレンは、なぜか返答に気兼ねしたかのように黙り込む。その喉のどに閊つかえていた言葉がようやく出たのは、ややあってからのことだった。

「あたしね……本当は、ほっとしてるんだ」

「……」

「これでもう、君が生きて帰ってくるかどうか、気を揉もんで待つような毎日はおしまいだって……そう思うと、少しだけ嬉うれしい」

　ヘレンは偽らざる胸の内を口にすることに、相応の怯おびえがあったのだろう。だがそれを聞いてもカールは、殊こと更さらに怒りや苛いら立だちを懐いだくこともなかった。

「あたしって……嫌な女、かな？」

　カールはかぶりを振って、逆に問いを返す。

「なんで俺おれみたいな、飛ぶしか他ほかに能のない男のことを、そこまで……」

「迷惑、かな？」

　勿もち論ろん、それはない。だがカールには、極ごく々ごく真っ当な男に比べてとことん不ふ甲が斐いない自分を弁わきまえている。引け目を感じるのは否いなめない。

「俺には……お前を幸せにできる自信なんてない。そんな当たり前のことさえ、どうすればいいのか……見当もつかない」

「それでいいんだよ。カールは」

　ヘレンは優しく微笑ほほえんで、カールに身を寄せ、肩に首を預けてきた。

「幸せにしてもらうんじゃない。幸せになるの。あたしは」

「……」

　ヘレンらしい答えだと思う。彼女なら率先してカールを導き、彼が想おもい描いたことさえない将来を与えてくれることだろう。ヘレンが他の誰だれでもなくカールを選んだ上でそう言うのなら、むしろそれは、他の誰でもないカール・シュニッツが側そばにいて初めて、彼女が掴つかみ取れるものなのかもしれない。
　ヘレンの細い肩を抱き寄せながら、カールは思う。――この自分の人生は、とんでもなく迂う遠えんな回り道を経た末に、ようやく開始点に辿たどり着いたのかもしれない。
　だが彼には、今この瞬間から始まるのであろう新しい人生の形が、まるで想像すら及ばなかった。

2

　戦火の響きとは遠く離れた波間の底に、男たちは息を潜めていた。
　最後に日の光を仰ぎ見てから既すでに半月以上が経たつ。暗く冷たい金属の筐はこに閉じ込められ、身を縮めて堪え忍びながら、ついに彼らは旅路を終えようとしていた。
　幾度となく繰り返した過酷な訓練、その本番を迎えるにあたって、てきぱきと作業の分担をこなしていく部下たちの横顔を、ホルガー艦長は頼もしく見守る。彼らはその全員が、危険な作戦に自ら志願し選抜された、ヴィルドバッハの誇る精鋭たちだ。
「総員、配置につきました。艦長、定刻です」
　歴年の部下であるベルトラム副長の報告に、ホルガーは満足げに頷うなずいた。
「宜よろしい。――総員に通達。これより我が艦隊はオペレーション・アングルボダの最終段階を遂行する。勝利を我らに！」
　伝令管から、無線から、艦隊長の号令を聞いた兵士たちが一斉に『ヴィルドバッハ万歳！』と喊かん声せいを上げる。
　その響きは、誰だれに聞き咎とがめられることもなく、暗い海の底へと吸い込まれていった。

しばしば海流の悪戯いたずらで、ヴァルハラ半島の東海岸にはかなりの低緯度にまで流氷が辿たどり着く。

西の公国との二度目の開戦により、漁の活気もめっきり失うせた漁港では、例年とはやや違う奇妙な流氷群の出現がささやかな噂うわさになっていたものの、話題性においてはロケット滑空弾の脅威のほうが遙はるかに由々しい事柄であり、沖合を通過する白い異物の様子などにまともな注意を払う者はいなかった。

まさかそれがヴィルドバッハの新兵器を直下に潜ませた偽装であろうとは、誰だれ一人、想像すら及ばなかったのだ。

潜水艦――第一次ヴァルハラ戦役において実戦投入された数々の新技術のうち、公国軍が密ひそかに最大の関心を寄せていた兵器である。

海岸線の長さが共和国のそれとは比較にならないほど短いヴィルドバッハ公国は、必然的に海軍力においてはシルヴァーナに圧倒的優位を譲ゆずるほかなく、戦略上の進行ルートはミルヒ河流域を主とする内陸ルートのみに限られていた。逆に言うなら、海洋における共和国の優位を完全に覆くつがえせるような新兵器が存在すれば、公国は念願の包囲攻撃をもってシルヴァーナ全土を席せっ巻けんできる。従来の海戦のセオリーを全まったく無視した戦術を可能とする潜水艦は、まさにこの〝仕切り直し〟を目もく論ろむ上でうってつけの存在だった。二年あまりの再軍備期間に、再戦時の鬼札となりうる特殊潜水艦の開発・建造にヴィルドバッハが心血を注いできたことは、当然の帰結ともいえたのだ。

その成果物たる一二隻せきの新造艦は、まさに設計と運用思想の奇抜さこそを最大の武器とする、ただ一度限りの奇襲作戦に向けて用意されたものだった。名付けて『アングルボダ作戦』――誰一人として予期し得ない、シルヴァーナ共和国首都攻撃を目もく論ろむ一大作戦である。

まず艦隊の中枢をなす特殊潜水艦、『フェンリル』『ヘル』『ヨル

ムンガンド』の三隻が海面へと浮上し、甲板上部構造の変形を開始する。分厚い樹脂製外皮を支える折り畳み式の竜骨を展開させて、容量三〇〇〇万ガロンにも及ぶ気き嚢のうが膨ぼう張ちょうしながら露あらわになる。浮揚ガスの供給源は、流氷に偽装した総計六〇個ものヘリウムタンクだ。流氷群を装っての航行はむしろ、潜行の妨げとなるタンクを海面に浮上させたまま、目的地まで到達するために必要とされたものだった。

　最終的にこの三隻は、海洋より離水し、七五ノットでの飛行を可能とする高速飛空艦となる。潜水航行で敵のレーダー監視網をかいくぐり、防空対策の手薄な海岸線へと飛空艦部隊を送り込む——これこそがアングルボダ作戦を前代未聞の奇襲攻撃たらしめる要点である。

　潜水飛空艦が着々と離水準備を整えている間に、残る九隻の随伴潜水艦もまた、浮上して各おの々おのの役目を果たす。こちらもまた従来の潜水艦の概念を逸脱した新造艦だ。艦内に五機のＭｏ１１９Ｅ型特殊戦闘機を収納し、平滑に設計された甲板上からカタパルト射出で離陸させることが可能な、言うなれば潜水空母とでも呼ぶべき艦艇である。総計四五機の戦闘機と、三隻の飛空艦からなる航空中隊が、まったく予期せぬ沿岸に忽こっ然ぜんと出現するとなれば、共和国軍の動転は必至であろう。

　潜水空母より離陸したＥ型メルダース編隊は、まず露つゆ払はらいとして進行ルートの途上にあるシュタイナー空軍基地を攻撃するため先行する。颯さっ爽そうと飛び去っていく友軍機の雄姿を双眼鏡で見送りながら、旗艦フェンリルに乗艦するホルガー艦長は、彼らの武運を祈らずにはいられなかった。

「まずは、最初の関門だ。敵基地の臨戦態勢が如い何かほどのものか……それ次第で、この作戦の成否も決まってくる」

「我々の出現が本当に奇襲として通じるか、ですね」

　ベルトラム副長の言葉に、ホルガーは険しい面おも持もちで頷うなずいた。

　アングルボダ作戦の秘ひ匿とく性せいを危うくする唯一の懸念——そ

れは、ただ一度だけ潜水飛空艦がシルヴァーナの航空機に姿を見られていることだ。あれは手痛い失敗だったが、不運というほかない。

　今回の奇襲作戦の革新的に過ぎる内容については、軍上層部においても数人の将軍が疑念を呈し、大規模な作戦について承認を得るためには、ある程度の危険を冒してでも潜水飛空艦の有効性を証明して見せる必要があった。そのため一番艦として完成したフェンリルは、敢ぁえてシルヴァーナ空軍のレーダー圏内まで潜入した上で離水行程を含む公試運転に挑むよう強要されたのである。一歩間違えば極秘開発の達成が水泡に帰する結果となりかねない愚挙だったが、複数の軍閥が主導権を巡って対立し牽けん制せいし合うのが恒常化している公国軍においては、しばしばこうした理不尽な要求が現場の将兵に課されることがある。

　結果、危き惧ぐされた事態は現実のものとなり、フェンリルは偶然飛来したシルヴァーナ機と遭遇。これを撃墜することにも失敗し取り逃がしてしまう。不幸中の幸いは、海中からの浮上と気き嚢のうの展開、そして離水に至るまでのプロセスを目撃されずに済んだ点だ。既すでに飛空艦形態となって浮遊していたフェンリルの外観から、潜水艦としての機能を推察するのは、よほど詳細な観察がなされない限りは不可能だろう。

　水中潜行能力さえ見抜かれていなければ、説明不可能な飛空艦の出現についてはレーダー監視員の職務怠たい慢まんという見解で処理されてしまう可能性は充分にある。さらに加えて、フェンリルを目撃した航空機が単座であってくれたなら、複数人の目撃証言が得られずに、報告そのものがただの誤認として看過されているかもしれない。

　それらの楽観に命運を託して、ホルガー艦長はシルヴァーナ機との接触の事実を握り潰つぶし、上層部には敵レーダー圏内における秘密裏の離着水テストに成功した旨むねだけを報告した。――重大な背任ではあるが、武ぶ辺へん一いっ徹てつの艦長としては、秘密兵器の露見がはっきりと確定しないうちに、その可能性だけを理由にしてアングルボダ作戦を中止に追い込まれることが断じて許せなかったのだ。この

大作戦に夢を託していたホルガーは、たとえ僅わずかなりとも成功の見込みが残されているならば、是非にも計画を断行したかった。もしシルヴァーナに手の内を見透かされ、沿岸で即座に迎撃を受ける羽目になったとしても、そのときは己おのれの武運に殉ずるまでのこと。そう覚悟を決めていた。

「……それにしても、あれは奇妙な飛行機だった」

　苦い記憶を思い起こして呟つぶやくホルガーに、副長が首しゅ肯こうを返す。

「噂うわさに聞くジェットエンジン搭載機、というやつだったのでしょう。確かにあのスピードは、軍用機として採用されれば相当な脅威となったでしょうが……聞けば技術屋の酔狂で発明された民生品だとか。まったく、シルヴァーナ人のやることはしばしば理解に苦しみますな」

　副長の揶や揄ゆに、ホルガーもまたほくそ笑む。奇くしくもあの邂かい逅こうは、両陣営の最新航空技術の初顔合わせとなったわけだが、秘密兵器開発という観点においての真剣さはヴィルドバッハに軍配が上がったわけだ。公国軍の叡えい智ちの結晶たる次世代潜水艦隊は、その存在を新聞に暴露するなどという失態を犯すこともなく、秘蔵の牙きばを今まさに共和国の喉のど元もとに突き立てんとしている。

「気嚢ヘリウム充じゅう填てん、完了。バラストブロー。フェンリル、離水します！」

　船員の報告を受けて、いよいよホルガー艦長は号令を下す。

「全速前進。進路を西南西へ。さぁ諸君。歴史を作りに行くぞ！」

　海岸から突如として出現した戦闘機編隊の来襲に、シュタイナー空軍基地は蜂はちの巣をつついたような騒ぎになった。

　まさしく幽霊と出くわしたも同然のレーダー室は、ただ罵ば声せいと泣き言が飛び交うばかりで完全に統制を失っていた。せめて何かの間違い、たとえば航路を誤った友軍機の編隊であって欲しいと、必死に所属不明機に無線で呼びかけているうちに、ついに編隊は視認できる

距離にまで到達した。その翼に堂々と描かれたヴィルドバッハ公国空軍のエンブレムは、もはや見誤りようもなかった。

　シュタイナー基地に配備されていた迎撃機のうち、およそ半数あまりが、まだエンジンに火を入れる間もなく地上掃そう射しゃによって破壊され、辛くも離陸を果たした他ほかの機体も、劣勢のままに次々と撃墜されていく。結局、共和国最東端の防衛基地は、襲撃者にただの一機も損耗を与えることなく、完全に制空権を奪われてしまった。

　生き残ったシルヴァーナ兵士たちは、さらに後詰めの飛空艦が三隻、東の空から悠然と飛来する様を見て、絶望のあまり言葉を失う。

　シュタイナー基地の惨状を双眼鏡で確認し、第一次攻撃の成果を良しとしたホルガー艦長は、勝利の確信を胸に秘めつつ通信員に向けて指示を飛ばす。

「さあ、仕上げだ。――砲兵隊に打電！　座標Ｂ79□４２３に向け誘導弾砲撃を要請！」

　ホルガー艦長の指示は通信員を介して、およそ五〇〇マイル離れたミルヒ河国境線にまで送られ、そして数秒の間をおいて返信が届けられる。

「――砲兵隊より通達！　着弾は一五〇秒後。『赤』『白』『黒』の三斉射を、以後一〇秒間隔で八回です！」

「よし、誘導班、受け取れ！　見逃すなよ……」

　ほぼ同刻――ミルヒ河を挟む国境線では、シルヴァーナの監視部隊がヴィルドバッハ側陣地でのロケット発射台の稼働を確認。発射角度の計測から、攻撃対象はヴァルハラ半島東海岸近辺と逆算され、いつも通りの手て筈はずで空襲警報の発令が勧告される。

　だが今回の発射パターンは、従来とは大きく異なっていた。発射台は数十発を同時発射するのではなく、三発ずつを一区切りとして間かん隙げきを開けつつ、わずか二四発の発射で沈黙する。

　実際、打ち上げられたロケットに搭載されていた弾頭は、いささか仕様が変更されていた。高度五万フィートに達してロケットモーターから切り離されたグライダー弾頭の翼には、遠隔操作式の方ほう向こう

舵だと、彩色された煙幕噴霧装置が追加されていたのだ。

シルヴァーナ領空を東西に横断して届けられた三発のグライダーは、五〇〇〇ポンドの炸さく薬やくを抱えたまま滑空し、それぞれ赤、白、黒の煙幕を長々と靡なびかせながら東海岸へと飛来する。煙幕により格段に視認性の増した弾頭は、迎撃機にしてみれば格好の標的となっただろう。——迎撃機がいれば、の話だが。

公国軍が潜水飛空艦に期した最大の戦略用途、それはロケット滑空誘導弾との併用による遠隔精密爆撃にあった。開戦時の陽動攻撃が無駄に終わった後も、ただ延々と弾頭を浪費して無駄な爆撃を繰り返したのは、公国側がロケット爆弾についてそれ以上有効な運用方法を持ち合わせていないものと、シルヴァーナに誤認させるためのブラフだったのだ。

発射台の側がわで精密な照準を可能とするだけの精度が得られなくても、着弾地点の直近に弾頭を誘導操縦できる観測手を送り込むことができれば話は違う。さらに加えて、発射に先んじて標的空域の制空権を確保し、弾頭を撃墜されるリスクを無にできるなら完かん璧ぺきだ。その条件を全て満たすのが、潜水飛空艦と潜水空母により編成された海中侵攻艦隊であった。

フェンリル、ヘル、ヨルムンガンドの三隻せきに搭乗した観測誘導員は、それぞれに一発ずつ割り当てられた各色の爆弾グライダーに向けて操縦信号を送り、寸分の狂いもない精密さでシュタイナー基地への直撃ルートに導いた。防空能力を根こそぎにされた基地は、頭上からゆっくりと飛来する三色の死神を、ただ為なす術すべもなく見守るしかなかった。

蹂じゅう躙りんは八度に渡り、呵か責しゃくなく完かん膚ぷなく、シュタイナー基地を破砕し焼き尽くした。都合二四発の五〇〇〇ポンド爆弾が炸さく裂れっした後には、勇壮を誇った基地の名残は土台すら残さず破壊され瓦が礫れきと化していた。

緒戦の大勝にまずは快かい哉さいを叫ぶクルーたちを乗せて、三隻の飛空艦は次なる獲物を求め、さらに西の空を目指す。アングルボダ作

戦はまだ始まったばかりだ。この先、三〇〇マイルに渡る遠路を侵攻し、立ち塞ふさがる要害を悉ことごとく破壊しながら、共和国首都ブリュンヒルデを目指す。この大胆不敵な計画は、潜水飛空艦の初陣であればこそ成功を望める企くわだてだった。海上からの潜入攻撃が既知のものとなり、シルヴァーナ側が相応の対抗手段を講じるようになってからでは遅い。秘密兵器による奇襲攻撃は、回を追うごとにその有効性を減じていく。なればこそ初回において最大の戦果を狙ねらうべきなのだ。

「勝てるぞ、この戦……」

　何の手て応ごたえもなく屈したシュタイナー基地の廃はい墟きょを後しり目めに、ホルガー艦長はほくそ笑む。やはり共和国軍は、潜水飛空艦の存在を予測できていなかった。公試運転におけるアクシデントは大たい勢せいに何の影響も及ぼさなかったのだ。

　それきり艦長は、ただの杞き憂ゆうにすぎなかった不吉な感慨を、白銀の高速機と遭遇した折の記憶もろとも、完全に意中から追い出した。

　――あの輝く翼を目まの当たりにしたとき、かつて彼は思ったのだ。『この敵機が、我々の運命を一変させるかもしれない』と。

３

　シュタイナー基地、陥落――誰だれ一人として想像しえなかったその報しらせに、共和国軍は大混乱に陥っていた。

　ゲプハルト・ミュラー中佐にとっては、まさにタイミングとして最悪の折に事が起きたと言うほかない。

　彼の転属に伴う諸もろ々もろの手続きがあと二日早く完了していれば、選抜を潜くぐり抜けた各方面のエースパイロットが招集され、彼は再編された王冠中隊クローネンシユタツフエルの隊長として状況に臨むことができただろう。

　だがよりにもよって、まったくの管轄外であるリヒャルト基地に私

用で出向いたその折に、事態は急展開を迎えていた。方針を仰ぐべき上官も、また指示を下せる部下も一人もいない。参画できる命令系統から完全に外れた場所で立ち往生する羽目になっていた彼は、ただ手をこまねいて状況を見守ることしかできなかった。

　正しく軍略的な戦術拠点ではなく、研究施設としての色が強いリヒャルト基地には、作戦司令室の備えはなく、管制塔が指揮系統の中枢を果たすことになる。ゲプハルトも基地司令官に願い出て同席の許可を取り付け、壁面に掲げられたヴァルハラ半島全域の地図に、刻一刻と寄せられるヴィルドバッハ奇襲艦隊の位置情報が書き込まれていく様子を見守っていた。

　現状の敵部隊の進行速度は平均しておおよそ七〇ノット。西に向けて一直線に首都ブリュンヒルデを目指している。奇襲艦隊の目的はもはや火を見るより明らかだ。

　たかだか一個中隊の航空戦力が、領土内を我が物顔で横断していくのを前にして、まったく打つ手なしという有様は不ふ甲が斐いないことこの上ないが、両軍が総力戦の構えでミルヒ河に戦力を集結させてしまっている現状、各地の基地には、散漫なロケット爆撃に備えた限定的な迎撃力が駐ちゅう屯とんしているばかりである。シュタイナー基地が陥落した時点で、東部方面の制空権はがら空きも同然だった。

　かといって、ミルヒ河の戦力を東に割いたのでは戦線が瓦が解かいする。かねてからヴィルドバッハの海軍力は考慮に値しないほどの脆ぜい弱じゃくさで知られていただけに、第二次ヴァルハラ戦役の焦点は前回に続き今回もまたミルヒ河流域を中心とする内陸部に限定されていた。海を隔てた周辺諸国とは外交努力による友好関係を結び、背面攻撃の危険性を徹底排除した上で公国の脅威に臨むのがシルヴァーナの基本方針だっただけに、このような形で虚を突かれたのでは対処のしようがない。

　敵艦隊がなぜレーダーに察知されることなく東部海岸に辿たどり着いたのかは依然として不明だが、ゲプハルトには心当たりがあった。ブリッツフォーゲルの機銃試射の初日、カールが攻撃を受けたという

謎なぞの飛空艦の件を、思い出さずにはいられなかった。やはり公国軍は、シルヴァーナのレーダー監視網を無効化して移動する何らかの方法を実現させていたのだ。

　海、という共通点に謎の鍵かぎが隠されているのではないかという直感はあるものの、その推察はひとまず後回しでいい。現状で急務とされるのは敵戦力と戦術の分析、そしてその対処法の検討だ。

　現時点での目撃報告を総合するに――敵部隊は飛空艦三隻せきと戦闘機四五機からなる中隊編成。加えて彼らは、遙はるか西部戦線からのロケット誘導弾による砲撃支援を受けている。

　ここにきて急に百発百中を誇るようになったロケット爆撃の命中精度については、おそらく飛空艦による観測誘導があるものと推察された。両者の連携が事実なら、これは飛空艦が自みずから爆撃を担うより輪をかけて厄介だ。爆撃艦の爆弾積載量にはおのずと限りがあるが、敵陣からの支援砲火は無尽蔵の火力を誇る。飛空艦が撃沈されない限り、その進路上にある都市は際限なく砲撃の危機に晒さらされることになるのだ。

　敵部隊の首都到達までの予測時間は既に三時間を切っている。いっそ敵の侵攻ルート上での阻止は断念し、動員可能な予備戦力をありったけ集めて首都防衛に当たらせた方がまだしも有効かもしれない。だが――

　ふと管制塔の外に目をやると、リヒャルト基地の防衛部隊として駐ちゅう屯とんしていたＨａ１１２が離陸していく様が見て取れた。

「彼らはどこへ？」

　ゲプハルトの問いに、基地司令官は答えるまでもなかろうと言いたげに眉まゆ根ねを寄せてから、応じる。

「今からでも首都に向かわせる。もし間に合えば守備隊と合流できるだろう」

　幸いにして、リヒャルト基地は敵艦隊の進路からは大きく離れており、攻撃を受ける可能性は極めて低い。この非常時に、飛べる戦闘機を飛ばさず遊ばせておくわけにはいかない、という判断の上での出動

だったのだろうが、ゲプハルトの見解では、その有効性は疑問であった。
　今から首都近辺に防衛戦を築こうにも、寄せ集めの兵力をまともに統括し、指揮できる態勢に編成し直すことが、ここまで全軍が翻ほん弄ろうされ恐慌に陥っている現状で果たして可能なのだろうか。焦りに駆られて各おの々おのの部隊が独断で散発的な攻撃を繰り返すような展開になれば最悪だ。それでは戦略上最大の禁則とされる戦力の逐次投入と変わらないことになる。
「ゲプハルト中佐、君も歯がゆかろうな。自分の部隊が編成される前に、こんな事態になろうとは」
「……いいえ」
　壁面の地図を凝視しながらも、ゲプハルトはいよいよ自らに決断を促した。
　策は、ある。実行に移すにはあまりにも躊ちゅう躇ちょさせられる手が、ひとつだけ。
「敵艦隊と、この基地との位置関係ならば……或あるいは、ここに居合わせたことが幸いだったかもしれません」
「何だと？」
「大至急、ハインツ中佐を呼び出していただきたい。彼の協力が必要です」

　カールとヘレンには、ヴァイニンガー博士の助手という名目でリヒャルト基地の逗とう留りゅうが許可され、そのためのゲストルームまで用意されていた。技研にとっては博士一人で客人一〇〇人分に相当する価値があったため、その連れについてはスパイ容疑でもない限りきわめて寛容な扱いを受けられる、ということらしい。
　無論、二人とも長居する気など毛頭無く、カールの希望に沿ってブリッツフォーゲルの解体を見届けた後は、共にヤーデ高原のヴァイニンガー飛行場に戻って、オットーたちの撤収作業を手伝うつもりでいた。

　ところが、時刻が午後に差しかかった辺りから、基地内は騒然とした空気に包まれ、予定されていた解体作業など誰も話題にすら上らせない。もちろん部外者の、あまつさえ民間人にすぎない二人に状況の説明などあるはずもなかったが、それでも国営ラジオの緊急放送で、首都に何らかの危機が迫っているらしいことだけは掴つかめた。
『現在、ブリュンヒルデ市内全域に避難勧告が発令されています。市民の皆さんは市警察および憲兵隊の指示に従って、焦らず、すみやかに移動してください。繰り返します。現在、首都全域に避難勧告が……』
「何が起こってるの？」
「さぁ……」
　原因は杳ょうとして知れぬまま、ただパニックのみが拡大していく様を伝えられる不気味さに言葉を失っている二人の部屋へ、やおらドアを開けて血相を変えたヴァイニンガー博士が駆け込んできた。
「えらいことじゃ、首都が爆撃を受けるらしい！」
「……また例の出で鱈たら目めなロケット爆弾ですか？」
「違う。飛空艦を連れた機動部隊が向かっとるらしいぞ。猶ゆう予よはあと三時間しかないって話じゃ。基地じゅうで噂うわさになっとる！」
「な……」
　ラジオでの避難勧告さえなければ、矢ゃ庭にわには信じられない話であった。
　シルヴァーナ、ヴィルドバッハ両国間の国境線は極めて限定されており、前線を迂う回かいした奇襲攻撃は地理的に不可能である。前回の戦役でも、戦果が及んだのは西部地域に限定され、首都近辺にまで攻撃が及んだことはない。
「なんでもヴィルドバッハの飛空艦は、東の海から背面攻撃を仕掛けてきたんだそうじゃ。なんでそんな真ま似ねができたのか、皆が首を捻ひねっとるが……」
「——ッ！」
　カールの脳裏には閃ひらめくものがあった。

以前、機銃試射のテストの折に、シルヴァーナ領海内に忽こつ然ぜんと姿を現した飛空艦。やはりあれはヴィルドバッハの秘密兵器だったのだ。あのときカールが懐いだいた危き惧ぐが、現実のものとなったのだ。

基地司令官の前でゲプハルトから計画を聞かされたハインツ中佐は、持ち前の冷ややかな微笑で応じた。

「たしかにブリッツフォーゲルの速度であれば、この基地から問題の飛空艦隊に襲撃をかけるのは可能だな」

ゲプハルトにとって、ハインツが既すでに彼の管轄下にある貴重な試験機を、むざむざ危険に晒さらすことに同意するかどうかは賭かけだった。が、野心と計算高さを併あわせ持つ技術主任は、これを即答で承諾した。今このタイミングで新鋭機が華々しい戦果を挙げることが、将来的にどれほど彼の経歴を益するか、即座に判断できたのだ。

「ジェットエンジン搭載機の将来性について、私は迎撃機としてこそ真価を発揮するものと考えている。それを証明するには絶好の機会だ。……だが、どう攻めるかね？　四〇機以上もの随伴機に守られた飛空艦を」

「一撃離脱戦法。それしかない」

エースパイロットとしての確信を込めて、ゲプハルトは答えた。

「ブリッツフォーゲルの速度とパワーがあれば、可能だ。数は問題じゃない。ジェット機のスピードについて把握していない相手なら、何機集まっていようと出し抜ける」

「問題は、武装だな。現状では機首にルドルファ砲が一門のみ。これでは話になるまい」

「ああ、空対空雷撃装備は必ひっ須すだ。最低でもシュパルゲル・ロケット弾を四発」

ゲプハルトの要求に、ハインツは厭いとわしげに額ひたいを押さえる。

「残念ながら、あの機体は戦闘機としての拡張性がまったくない。翼

下パイロンすら用意されていないんだ。ロケットランチャーの装備場所など――」

「両翼端の増ぞう槽そうのハードポイントは？」

「武装の代わりに増槽を外すと？　それでは交戦開始の段階まで充分な燃料を温存できんだろう」

　そう答えてから、はたと着想を得たハインツが手を打つ。

「――いや待て。増槽タンクとしての機能はそのまま、武装ポッドとして改装する手はあるな。上下面に一つずつランチャーを固定し、使用後は増槽ごと切り捨てれば離脱時のデッドウェイトにもならない。ふむ。――配電はどうする？」

「わざわざコックピットの操そう縦じゅう系統に組み込む必要はない。遠隔操作の点火装置をパイロットに持たせれば済む」

　ハインツは腕を組んで黙考し、ここまでの方針に穴がないか脳裏で反はん芻すうしてから、頷うなずく。

「突貫作業にはなるが、改装には一時間もあれば充分だ」

「一時間後の敵艦隊は……」

　それを聞いたゲプハルトが、地図上に書き込まれた敵艦隊の進路をさらに西へと延長し、ある一点に×印をつけた。

「……この位置だ」

　その地点、おそらくは少なからざる人々について運命が決することになる地図上の位置を眺めながら、ハインツ中佐は溜ため息いきをつく。

「さてゲプハルト中佐。この無謀きわまる作戦に参加するパイロットは、いったい誰なのかね？」

「……適任者がいなければ、私が」

　そう答えるゲプハルトの真意を見透かすように、ハインツは目を眇すがめる。

「誰にでも飛ばせる機体ではないぞ。あれは」

「ハインツ中佐、あなたは自分の務めを果たしてくれればそれでいい。一時間後にはパイロットの人選も済んでいるだろう」

　ハインツ中佐は鼻で笑ったが、それ以上ゲプハルトを挑発するような真ま似ねはしなかった。
「了解した。せいぜい急ぐとしよう」

　つい昨日までは基地にいる全ての人間から注目を浴びる花形であったブリッツフォーゲルも、昼過ぎに届けられたシュタイナー基地陥かん落らくの報しらせより後は、まるで忘れ去られたかのように格納庫の片隅に放置され、ひとときの静寂に浸ひたっている。
　空になった増ぞう槽そうタンクが取り外され、何処いずこかに運び去られていることを除けば、機体の状態は着陸したときと何ら変わりない。
　解体作業は見送り、というより予定の目め処どさえ立たなくなった。一つ間違えば首都が潰滅させられかねない局面とあっては、それも当然のことだろう。
　人ひと気けの無くなった格納庫、取り残された白銀の翼の傍かたわらに、カールはそっと寄り添うように佇たたずんで、静かに時を待っていた。ただの手持ち無ぶ沙さ汰たでないのは、その何らかの決意を秘めた眼まな差ざしから明らかである。彼は、彼を必要とする何事かが、程なくこの場所で起こることを予期しているかのようだった。
　そんなカールの隣に同伴するヘレンは、しかしカールの居住まいとは真逆に、今にも落ち着きを失いそうな自分を懸命に自制しているのが明々白々だった。何かが起こるという予感、そしてその内容についての予想を、どうにかして否定し消し去りたい。なのにこの場を去ることもできないというジレンマが、硬く強こわ張ばった表情からありありと覗うかがえた。
　彼女はカールの側そばにいたかった。だがカールが決してこの場を離れないであろうことも理解していた。きっと程なくこの場所で、何か良くないことが起きる。その現場にカールを立ち会わせたくない。だがそれを彼に言い聞かせることもできない。――すべては直感でしかなく、理路整然と説明できる事柄はなにひとつないからだ。

不吉な印象の元凶が、物言わぬ存在感で空間を占めるブリッツフォーゲルにあることも解わかっていた。この冷たい鉄の塊は、分かちがたくカールと結びついている。ただの機械の分際で、生者の運命を支配している。そんな風に疎うとましさを覚えるようになったのは、果たしていつの頃ころからだろうか。

やがて、二人が各おの々おのに懐いだいていた予感の正体は、一人の男の姿を借りて現れた。

「ここだったか……」

現れたゲプハルトはいつもと変わらず冷ややかに表情を押し殺していたが、カールはその顔を鋭い視線で一いち瞥べっしただけで、委い細さい承知だと言わんばかりに小さく頷うなずいた。

「考えることは同じようだな」

二人の男は、まるで申し合わせたかのように同じタイミングで、白銀に輝くブリッツフォーゲルの機首を見上げる。その同調ぶりが、ヘレンの不安をよりいっそう募らせる。

「――事務手続きはすべて終わった。ついさっき、実験機ブリッツフォーゲルは王冠中隊クローネンシユタツフエルの零番機として正式に配備された。あと四〇分後に、こいつはもう一度離陸する。ヴィルドバッハ強襲部隊の迎撃任務だ。機体を解体する前の、最後の飛行になるだろう」

「誰が乗るんだ？」

「俺おれだ、と言いたいところだが……乗りこなせるのは俺ではない」

ヘレンには、そこまでが我慢の限界だった。二人の間に割り込み、剥むき出しの敵意でゲプハルト中佐を見据える。

「彼はもう民間人です。余計なことに巻き込まないで」

「……」

答える代わりに、ゲプハルトは携たずさえ持っていた書類挟みをカールに差し出した。

受け取り、中身を検あらためるカールの横合いから、ヘレンもその書

面を覗のぞき込む。真っ先に目に飛び込んできたのは『復隊要請』の文字だった。
「何よ、これ……」
「その書類にサインした時点で、お前は王冠中隊クローネンシユタツフエルの少佐として再配属されることになる。俺の指揮下で、我が隊の機体に乗って飛んでもらう」
　愛する男が、まるで機材の移管でもするかのように事務的に運命を曲げられようとしているのを目の当たりにして、ヘレンは声も出ないほどの怒りに震える。
　だがカールの表情は動かない。怒りも、狼ろう狽ばいも見せず、ただ乾ききった眼まな差ざしで手元の書類を見下ろしている。
「また俺おれに、人を殺せと？」
「お前が殺すべきヴィルドバッハ人を一人殺し損なえば、そいつは二人以上のシルヴァーナ人を殺すだろう。奴やつらはそのためにやって来た」
　ゲプハルトの冷酷な理論を、カールは鼻で嗤わらい飛ばす。
「で、そうやって今日の日を生き延びたシルヴァーナ人は、この先何人のヴィルドバッハ人を殺すんだ？」
　ゲプハルトは、答える代わりに踵きびすを返す。
「お前が何を望むにしろ、悔いの残らないように決めろ。……あと四〇分だ」
　最後にもう一度だけ、背中越しにそう言い残して、彼は足早に管制塔の方へと引き返していった。
「……サインする気なの？　その書類に」
「……」
　カールは答えない。だがそれは判断の保留を意味しない。彼の内には葛かっ藤とうなどない。決まりきった結論について、答えるまでもないから黙っているにすぎない。
　ヘレンは、かつてカールがどれだけ戦争を憎んでいたか知っている。かつて軍人として飛んだ己おのれについて、抱えきれぬほどの慚ざ

ん愧きと後悔を抱えていたことを知っている。そんなヘレンの知るカールであれば、迷うことすらないはずだ。こんな書類は破り捨て、踏みにじり、唾っぱを吐きかけて当然なのだ。かつて街頭で見つけた自分のポスターに対してそうしたように。

　だがカールは、手にした書類の文面を黙々と目で追っている。拒こばむこともなく。怒りも嘆きもなく。

「……行く気なのね、君は」

「……」

「戦争なんだよ？　今度こそ君、また人を殺すために飛ぶんだよ？　それだけは絶対に嫌だった筈はずじゃ……なかったの？」

　ようやくカールは書類から目を上げ、ヘレンを見た。言葉の違う外国人を前にして、どういう説明をしたものか悩んでいるかのような、戸惑いと困こん窮きゅうの眼まな差ざしだった。

「ここでヴィルドバッハの奴らを止めなければ、もっと大勢の人が死ぬ。誰かがやらなきゃならないことだ」

「ならゲプハルトにやらせればいいじゃない！　彼だってエースパイロットでしょ！」

「俺のほうが……適任だ」

「嘘うそよ！」

　もはや激情に身を任せ、ヘレンは涙混じりにカールを糾ただした。

「君はね、ただこの馬ば鹿かげた飛行機にまた乗りたいってだけ！　取られた玩具おもちゃを恩着せがましく返してもらえるからって、それで有頂天になってるだけよ！」

「……そうかもしれない。お前の言う通りだ。ヘレン」

　カールは何ら言い逃れをせず、ただ悄しょう然ぜんと頷うなずいた。ヘレンにとって、それはどんな反はん駁ばくよりも頭に来る反応だった。

「おかしいよ、君、絶対におかしいよ！　それじゃ馬ば鹿かみたいだよ……心配してるあたしが……」

「すまない。……でも俺おれは、これまで自分がやってきたことに、なにひとつ決着をつけてない」

　涙に暮れるヘレンを前にしても、カールには気の利いた慰なぐさめも、勇壮な決意表明も出てこない。そんな自分の不器用さに心底呆あきれつつも、彼は思いつく限りの言葉で想おもいを語る。

「俺は――どこかを目指してたはずなんだ。人殺しになって、生き恥を晒さらして、それでもまだ諦あきらめきれずに、辿たどり着こうとした場所があった」

　そんな何処いずことも知れぬゴールに彼を運んでくれる筈はずだった白銀の機体に、カールは手を差しの延べ、触れる。ブリッツフォーゲル。夢の翼。今はもうその祈りさえ虚むなしい、ただ一度きりで使い捨てられると決まった王冠中隊クローネンシユタッフエルの零番機。

「一度は自分から逃げ出した。そして今度はチャンスを奪われた。ここで諦あきらめたらどうなるか、俺は知ってる。ただの抜け殻になるだけだ。……そんな有ありり様さまで、俺はお前との未来に向かいたくない」

「……」

　認めたくもない、だが否定もできないカールの言葉に、ヘレンは口を挟めない。

「もう一度、これが最後と覚悟を決めた上で、俺はブリッツを飛ばさなくちゃならない。そうしなければ、昨日までの俺に決着をつけられない。新しい俺に生まれ変われない。もう嫌なんだ。どこまでも過去を引きずりながら、それを見ないふりして生きるのは」

「……そんな理由で、命を賭かけなきゃならないの？」

「ああ、命懸けだ。そうでなければ清算できない人生を、これまでの俺は生きてきた。ずっと未払いのまま逃げてきた。この借りを返すには、命を担保にした博打ばくちが必要なんだ」

　涙を湛こらえたヘレンの眼まな差ざしを、カールは真正面から覗のぞき込み、その両肩に手を置いて言い聞かせる。

「もしもお前がいなければ、俺はまた山奥にでも逃げ出して、何も見ないふりをして、生きてる死人のような人生を選んでいただろう。生き存ながらえる意味も、価値も、まったく解わからないままに逃げ続け

ただろう。……でも今の俺は違う。お前が、道を示してくれた。それをお前と一緒に歩く。そう決めたから、俺は戦うんだ。死ぬためじゃない。命を拾うために、行かなきゃならないんだ」

「……帰ってきて……必ず……」

　約束はできない。それが戦場というものだ。意志の力だけではどうにもならない非情なる世界のことを、カールは重々に承知している。

　だから彼は誓いの言葉に代えて、ヘレンの細い肩を固く抱きしめた。

　その温ぬくもりを、嗚お咽えつの震えを、しっかりと胸に焼きつける。これより臨のぞむ試練の中で、己おのれが戻るべき場所を、決して見失うまいとして。

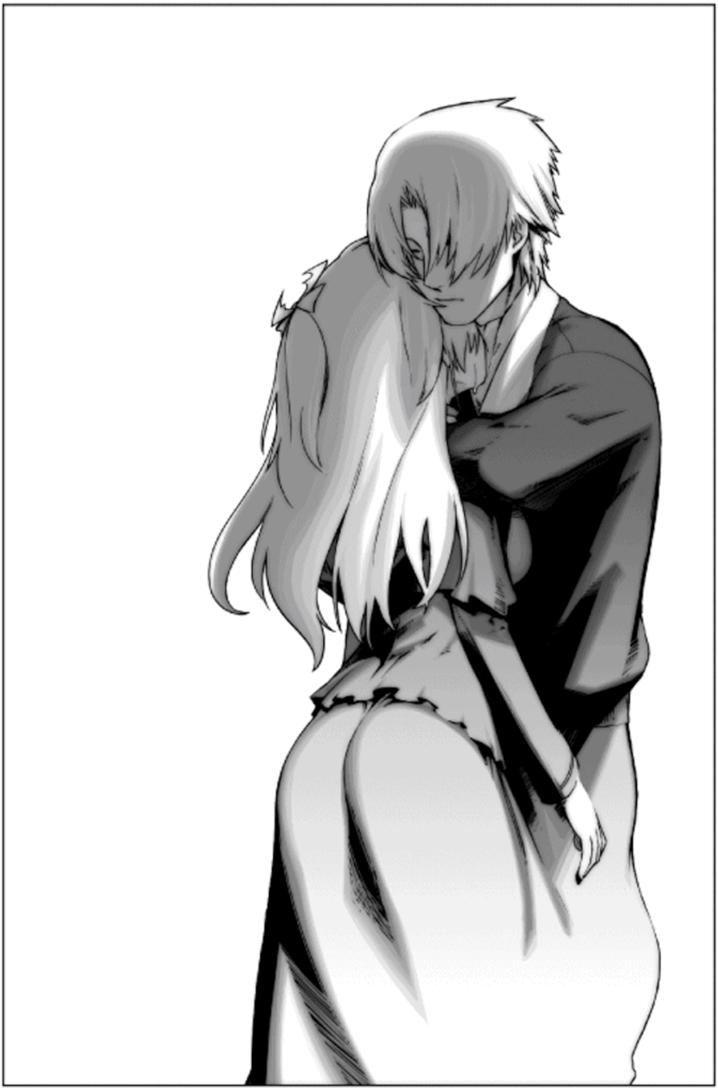
４

　管制塔に戻ったゲプハルトは、戦局を示す地図の表示に、新たな書き込みが加えられているのを目に留めた。

　先だって彼が書き込んだブリッツフォーゲルによる要撃予定地点よりやや東に、新たに防衛線を意味する表示がある。

「……これは？」

「統合本部から発せられた防衛作戦だ。各地から集結した予備役の機体をこの地点に投入し、侵攻部隊を阻止する」



さらりと応じた基地司令官の言葉に、ゲプハルトは耳を疑った。

「いったん首都に集結させて編成を整えるのではなかったのですか？」

「それだと交戦空域が首都の直近になってしまう。それだけは避けろという提督直じき々じきのお達しだ。今後の国民の士気にも拘かかわるからな」

「馬ば鹿かな……」

周囲に対する憚はばかりすら忘れて、ゲプハルトは愕がく然ぜんと呟つぶやく。そんな部隊としての体裁も整っていない俄にわか仕立ての編隊が、本当に防衛の役を成すのかと、彼は提督の襟えり首くびを掴つかんで問い糾ただしたい思いだった。

「案ずるな中佐。最終的には八〇機以上の迎撃機が集まるはずだ。戦力比はほぼ倍ではないか」

「数の問題ではないのです」

統合本部は、あの侵攻部隊の実力を過小評価している。シュタイナー基地が壊滅に追い込まれた際の見事なまでの手際を、誰だれも正しく評価していない。

「……まぁ何にせよ、そろそろ戦端が開く頃ころ合ぁいだ。まずは落ち着いて報告を待とうではないか。朗報があれば我々の貴重な試作機を危険に晒さらす必要もなくなる」

「……」

あくまで楽観的な司令官の態度を前にして、ゲプハルトはそれ以上、語る言葉を持たなかった。

防衛線に集結したシルヴァーナ機の指揮は、ヘンケル空軍基地より馳はせ参じたカスパル大佐に託された。基地総司令の身でありながら、共和国の火急の危機とあっては見過ごせず、五年ぶりに操そう縦じゅう桿かんを握って出陣に及んだ老兵である。

『諸君、ここに集つどった各方面部隊の面々は、互いに日ひ頃ごろの僚機ではないが、この危急存亡の秋ときに奮い立つシルヴァーナの軍人

魂はみな同じ。ともに十年来の戦友と思って互いを信じ、一丸となって戦おう！』

老大佐の呼びかけを受ける共和国パイロットの面々は、揃そろって意気盛んであった。散発的に飛来するロケット滑空弾の警戒という、重責はあっても華のない任務にばかり明け暮れてきた彼らにとっては、これが開戦以来初めてのヴィルドバッハ機との交戦だった。

卑ひ劣れつな騙だまし討ちで背中にナイフを突き立ててきたのみならず、そのまま堂々とシルヴァーナ領を踏み荒らして憚りもなく闊かっ歩ぽする敵部隊の傍ぼう若じゃく無ぶ人じんは、愛国の志士たちを激怒させて余りあるものだった。彼らの縄張りの通行料がどれだけ高くつくか、存分に思い知らせてやらねばならぬと誰もが奮起していた。

また冷静に戦況を分析した上でも、シルヴァーナ側の優勢には確証があった。侵攻部隊は数において圧倒的に劣るのみならず、シュタイナー基地攻略戦から補給を受ける暇ひまもなく連戦に臨のぞもうとしている。当然ながら弾薬も燃料も残り少ない状態のはずだ。

疲ひ弊へいした敵を叩たたく容易な作戦、という意識を誰もが共有していたため、不慣れな友軍との連携についても、不安を抱いている者は皆無だった。むしろキツネ狩りの競技よろしく、各部隊間で戦果を競って張り合おうとする向きさえあった。

やがて東の空に一群の機影が現れると、カスパル大佐が放った『全機突貫』の号令一下、シルヴァーナ機の編隊は先を争うようにしてヴィルドバッハ侵攻部隊へと殺到する。

まず始めに、ヴィルドバッハ編隊の前衛が蜘く蛛もの子を散らすように散開したことで、敵は臆おく病びょう風かぜに吹かれたものと誰もが失笑し勢いづいた。護衛機に守られて然しかるべき三隻せきの飛空艦の懐はがら空きになり、撃沈してくれとでも言わんばかりだ。

戦果を焦って我先にと突進したシルヴァーナ機は、そこでいきなり正面に出現した新たなヴィルドバッハ機に肝を潰つぶした。飛空艦の巨体を遮しゃ蔽へい物ぶつにして、その背後に一群の敵機が潜んでいるなどと――アクロバットのデモンストレーションならいざ知らず、ま

さか実戦の場でそんな詐さ術じゅつに欺あざむかれようなどとは誰も予想していなかった。

さらに散開して逃げたものとばかり思っていた最初の編隊が、すぐさま反転し、浮き足だったシルヴァーナ機を周囲から包囲しにかかる。鮮やかなまでの十字砲火に逃げ場を失い、立て続けに一〇機あまりのハフナーが致命弾を受けて散華する。

鼻白むシルヴァーナ編隊の眼前で、ヴィルドバッハ機は綾目を描いて軌道を交錯させ、一糸乱れぬフォーメーションで反撃に転じた。

敵味方入り乱れての乱戦は、カスパル大佐とて過去幾度となく経験したことがある。だがその日の戦局はまるで違った。混乱に陥り右往左往するのは友軍の機体ばかりで、対するヴィルドバッハ機の動きは機械さながらの効率と正確さで確実に獲物を仕留めていく。

それは明らかに、大佐が知るかつてのヴィルドバッハの敵手たち——猪いのしし武者の如ごとき獰どう猛もうさで空の騎士道を競い合った飛行機乗りたちの動きではなかった。より冷酷に、より正確に、ただ容赦なく獲物を食い散らす肉食昆虫の群れにも似ていた。

より冷静な戦略眼をもって戦況を俯ふ瞰かんできたなら、ヴィルドバッハ機の戦術に明確なパターンを見み出いだせたことだろう。常に三機が一組でチームを成し、敵を釣るための囮おとり役と、それに食いついた獲物を仕留める射手、さらにその両者を常に見守りつつ、援護に割り込もうとする他ほかの敵機を牽けん制せいする妨害役が、鮮やかな連携を保っている。

ただ翻ほん弄ろうされるがままのシルヴァーナ機は、知らず知らずのうちに一機ずつ孤立させられてから三機に包囲され、着実に数を減らしていく。わずか数分前には八〇機以上も集結していた友軍機が、気がつけばその半数以上が姿を消していた。右も左もヴィルドバッハの機影しか見当たらない。——否いな、明らかに敵機の数の方が多い。

そこでようやく、カスパル大佐は悪夢じみた事実を認識した。

四五機のヴィルドバッハ機は、ただの一機たりとも減っていない。

　リヒャルト基地では、阻止作戦の顚てん末まつを報告されたゲプハルトが沈ちん鬱うつに額ひたいを押さえていた。

　戦闘に参加したシルヴァーナ軍の迎撃機八三機のうち、無事に帰還したのは一一機。命からがら逃げ帰った彼らの証言を信じるならば、ヴィルドバッハ側の損そん耗もうは皆無。

「有り得るのかね、そんなことが……」

　茫ぼう然ぜん自失の体ていの基地司令官に、ゲプハルトは頷うなずいた。

「かつては我々が同じ成果を目指し、そしてある程度までは実現させていました。――業腹ながら、今となっては敵方に御お株かぶを奪われたようですが」

「……何だと？」

「『より弱い獲物を着実に狩る』――野生のオオカミと同じです。選び抜かれた精鋭兵で連携戦術による各個撃破を旨むねとすれば、空戦においてもこれが可能となる」

　まさにそれは、過日の王冠中隊クローネンシユタツフエルの理念であった。

　さらに突き詰めていけばこの戦術は、徹底して味方の損害を回避することにより完成を見る。だがかつてのゲプハルトたちは、支給された機体の脆ぜい弱じやく性ゆえに、その領域にまでは至らなかった。ヴィルドバッハ軍はその誤断を教訓として更に先へと進んだらしい。

　シュタイナー基地陥落に至るまでの、あまりにも短すぎる戦闘時間――その見事なまでの効率性を耳にした時点で、ゲプハルトには敵方もまた精鋭部隊を編成したのではないかと危き惧ぐしていた。はたしてそれは的を射たらしい。かつて王冠中隊クローネンシユタツフエルが敵方にもたらした脅威を、今度はシルヴァーナ軍が甘受する番が来たのだ。

「……しかし、敵方もこの戦闘で相応の弾薬と燃料を消費したはずだ。首都に辿たどり着く頃ころには、既すでに戦闘続行は不可能なのでは」

あくまで楽観を捨てようとしない司令官に、ゲプハルトはかぶりを振って否定を返す。

「もしそうなら、シュタイナー基地での戦闘を終えた時点で連中は力尽き、カスパル大佐に撃退されていたはずです。賭かけてもいい。連中は補給にまつわる問題を何らかの方法で解消している。今なお平然と首都目掛けて進軍を続けているのが、何よりの証拠です」

「だが、どうやって……」

「それは解わかりません。が、レーダー網にも引っかからずに上陸してきたような連中を、常識で推し量って判断するわけにはいきません」

あくまで口頭では悲観を並べながらも、だがゲプハルトの胸中は、未いまだ絶望に屈してはいなかった。

そう、常識を覆くつがえす秘策なら——シルヴァーナにもまた、ただ一枚だけ切り札がある。

リヒャルト基地には、ジェット燃料の備蓄だけでなく、コンプレッサー始動のための電源車などといったジェットエンジン航空機の離着陸拠点としての備品が、すべて遺い漏ろうなく取り揃そろえられていた。

実はハインツ中佐率いる技術研究部隊は、ヴァイニンガー博士から引き渡された報告書を元にして、既すでに空軍独自のジェット戦闘機の開発に着手していた。その成果は未いまだに芳かんばしくないものの、ヴァイニンガー博士の指示の下もとブリッツフォーゲルの発進準備に当たる技研スタッフの面々が、機体の構造や運用上の留意点について、ある程度まで基本的な知識があったのも、そういう内情があってのことだった。

再び飛行服に袖そでを通し、整備を終えたブリッツフォーゲルと再会したカールは、まず再装着された翼端増ぞう槽そうタンクの上下にへばりついている不格好な対艦ロケット発射筒に眉を顰ひそめ、さらに尾翼に描かき込まれた青い王冠マークと、ステンシル書体の『０』の

文字を見み咎とがめると、なお一層露骨に嫌そうな顔をした。
　王冠中隊クローネンシユタツフエル、零番機。——たしかに部隊が本格稼働する前に、一度限りの飛行のみを要求された機体のナンバリングとしては、妥当である。
「……もう色々と台無しですね」
「これからお前さんが飛んで行く場所に、武器もないまま送り出す訳にもいかんだろうさ」
　そう応じながら、機体の最終点検を進めるヴァイニンガー博士の雰囲気は、ゲストルームで顔を合わせた時よりも明らかに覇気がなかった。普段から漂わせている溌はっ剌らっとした活気は見る影もなく、年相応に老け込んだ老人の横顔である。どうやら事の成り行きについては、実際にブリッツを飛ばすカール自身よりもずっと消沈した風である。
　普段の博士からは想像もつかない沈ちん鬱うつな面おも持もちに、さしものカールも声をかけずにはいられなかった。
「……どうか、ゲプハルトの奴やっを恨まないでやってもらえませんか。あいつはあいつで、誰かがやらなきゃならない事を引き受けてるだけなんです」
　まさかカールの口から出るとは思わなかった言葉に、ヴァイニンガー博士も意外そうな苦笑を覗のぞかせる。
「その言葉、当人が聞いたらどれだけ喜ぶと思うかね？」
「奴の前では口が裂けても言いませんがね」
　博士は乾いた笑いを漏らしたあと、空虚な眼まな差ざしで歎たん息そくする。
「儂わしが恨むとしたら、そいつは儂自身じゃなぁ」
「博士……」
「元はと言えば、儂なんぞに唆そそのかされたばっかりに……カール、結局お前さんをこんな所まで引っ張り込んでしまって……どう詫わびたらいいのか、見当もつかんよ」
　この老いたる悪童には不似合いすぎる神妙な物言いに、今度はカー

ルが苦笑する番だった。
「あなたの誘いがなかったら、俺おれは自分で掘った墓穴の中で、生きたまま腐っていくだけでした。……感謝してますよ」
　まぎれもない本心だった。が、博士にはそれがただの虚勢と聞こえたのかもしれない。普段から冗談と減らず口ばかりを叩たたいてきたカールの口調では、それも致し方なかっただろう。
「……儂わしの息子むすこも、とびきりに優秀な飛行機乗りじゃった。『死神だって俺には追いつけない』っていうのが口癖でな。どんな危険なテストフライトにも、軽口を叩いて飛んで行ったもんじゃ」
「さすがはヘレンの親父おやじさんですね」
　だが――当時ハフナー社のテストパイロットとして腕を鳴らしていたレオンハルト・ヴァイニンガーの末路は、カールも知っている。かつては一度、それをあげつらって博士に辛しん辣らつな言葉をかけたこともある。
「ヘレンは、儂の飛行機に父親を奪われたんじゃ。あんなことは、もう二度と御免だ。……なぁカール。どうかお前さんだけは、生きて戻ってくれんか。こんな鉄の塊と心中しようなんて思わずに」
「……」
　今まで、ヴァイニンガー博士がそんな懇願を口にしたことはなかった。言えた義理ではない、という想おもいもあったのだろう。
　だがかつて、機銃の試射にさえ癇かん癪しゃくを起こしていたカールが、今になって再び戦場に戻ると聞かされたとき、博士は己おのれの作り出した物に対する恐怖を感じたのかもしれない。スピードの魅惑で乗り手を虜とりこにする、ブリッツフォーゲルの魔性を。
「そんなつもりは、ないんですよ。勿もち論ろん」
　でもね、と言葉を接ついでから、カールは後に続けるべき言葉を探す。
「……正直、解わからないんですよ。博士の息子さんといい、俺といい……何でこんな事やってるんですかね」
「カール……」

「いや、誰のためでもないんです。それが解ってるから不思議なんです。どう考えても自分のために、やりたくてやってる事なんです。でも理屈で考えると間違いなく損っていうか、愚の骨頂っていうか……絶対に間違ってますよねぇ」

　そう、思いつくがままに言葉を並べてから、ようやくカールは得心する。その答えが見つからず、探し処どころを考えあぐねた末に、彼は操そう縦じゅう桿かんを握っているのだろう、と。

「結局、飛び続けてればいつか解るかもって、そんな虫のいい期待をしてるだけなんでしょう。解らないままだと、居心地が悪いんですよ。いったい今日まで何をやってきたのか、ってね」

「……ブリッツが、答えを出すと思うのかね？」

「わかりません。もしそうだとしたら、これが最後のチャンスでしょう」

　そろそろ時間だ。カールは飛行帽を被かぶり、ゴーグルと酸素マスクの取り付け金具を確認する。

　初めて乗った時の予感――この翼が、何ど処こか行ったこともないような所まで彼を導いてくれるはずだという想おもいは、未いまだ遂げられてはいない。

　だが、諦あきらめるのはまだ早い。あと一度だけ、ブリッツフォーゲルは空に舞い上がる。ならば、未練を残してはならない。最後までこの翼の行方を見届けなくてはならない。それで何も得られないなら、今度こそ諦めもつく。『答えなどない』という答えを受け入れられる。

「では、行ってきます」

「ああ……」

　未だ苦悩の色を残す博士に対し、せめて慰めになればともう一度笑顔を向けると、カールはタラップを昇って操そう縦じゅう席に乗り込んだ。

　ヴィルドバッハ奇襲艦隊の主戦力となるＥ型特殊戦闘機は、従来のメルダース１１９を母体としてはいるものの、その機体構造はもはや別物と言っていいほど大幅に改造が施ほどこされている。
　まずひとつは、潜水空母での運用で必ひっ須すとされた折り畳み構造である。潜水艦内の限られた格納スペースに収まるよう主翼と尾翼を折り畳み、また発進直前にこれらを展開する行程も徹底的に効率化され、その所要時間はわずか二分に抑えられている。
　もうひとつは、機銃の配置を胴体下部に移すことで弾倉と燃料タンクを隣接させ、この両者をカセット式のユニットに同どう梱こんし、まとめて着脱できる構造になっている点だ。ここまで徹底して補給の効率性を追求しているのは、かねてから飛空艦運用において悲願とされてきた『空中補給』の実現を目もく論ろんでの仕様である。
　空中補給のプロセスは、まさに機械工学の粋とパイロットの超絶技巧とが織おりなす驚異である。
　まず潜水飛空艦は艦底から鉤かぎ爪づめ状をした捕確架キャッチャーアームを展開し、ここにＭｏ１１９Ｅは失速速度ぎりぎりの八五ノットで背後から突っ込むようにして機体を連結させる。このとき飛空艦の速度は七〇ノット強。落差となる一五ノットぶんの衝撃は、飛空艦のほぼ全長に渡って捕確架キャッチャーアーム基部を前後にスライドさせる気圧式衝撃緩和機構ショックアブソーバーによって吸収されることになる。Ｅ型メルダースの開発においては、捕確架キャッチャーアームとの連結時の衝撃に耐えうる機体強度を、前述した主翼の折り畳み機構と両立させるという困難な要求が課されたが、ヴィルドバッハが誇る技術者陣はこれを見事に達成してのけた。
　こうして艦底に固定された機体は、速すみやかに補給カセットを交換した後、捕確架キャッチャーアームより投下され、自由落下から姿勢制御を取り戻して再びもとの飛行状態に復帰する。
　また飛空艦内に回収された消耗カセットは、給油給弾セクションへと廻まわされて再び内容物を補充された後、再度交換用の予備カセッ

ト群へと加えられて、他ほかの機体に装そう填てんされる順番を待つことになる。

　一機辺りの平均補給時間はおよそ一〇〇秒。目まぐるしいほどに効率化された早はや業わざではあるのだが、それでも四五機の編隊すべての補給を賄まかなうには、飛空艦三隻せきがかりで二五分以上を要する。敵の攻撃の途絶えた僅わずかな隙すきを見計らって、絶えず連結と分離を繰り返していかなければ間に合わない。

　捕確架キャッチャーアームとのドッキングには僅か数インチの誤差すら許されない精密な操そう舵だが要求され、また再発進の行程にも失速回復のテクニックが必ひっ須すとされるため、アングルボダ作戦に参加するパイロットは厳選に厳選を重ねられた敏腕のみによって構成されることになった。奇くしくも前戦役において彼らの悪夢であったシルヴァーナの『王冠中隊クローネンシユタツフエル』を模す集団が、この一大作戦の立案を契機として誕生したのである。

　先刻も彼らは、圧倒的に数で勝るシルヴァーナ軍の迎撃機編隊を易やす々やすと撃破して、その優秀さに証あかしを立てた。彼らの手練を大いに誇りとする一方で、ホルガー艦長はその不屈の闘志に対しても畏い敬けいの念を禁じ得ない。

　機体に弾薬と燃料の供給が保証されているとはいえ、それを操そう縦じゅうしているパイロットたちはあくまで生身の人間だ。潜水艦内での、およそ半月に及ぶ不自由な生活を堪え忍んだ後、さらに狭い操縦席に身を押し込んで、繰り返し過酷な空中戦の負荷に肉体を苛さいなまれつつ、三時間以上に及ぶ作戦行動を完かん遂すいしようとしている男たち。まさしく彼らこそは精強なるヴィルドバッハ軍人の粋と呼ぶべき傑けっ物ぶったちだった。

　あの四五人の武ぶ辺へん者しゃに導かれて、必ずやアングルボダ作戦は成功を収めることだろう。今なお首都ブリュンヒルデを目指して驀まい進しんするホルガーたちを押し留とどめることなど、もはやシルヴァーナの腰抜け共には不可能だ。

　満悦の笑みとともに西の空を見据えるホルガーに、そのとき、対空

哨しょう戒かいレーダーの担当員から途惑い混じりの報告が届いた。
「二時半の方角より接近する飛行物体を確認」
「ふむ？　数は」
「それが……一機のみです」
　レーダー員が訝いぶかったのも無理はない。ホルガーとて眉まゆをひそめずにはいられなかった。
　わずか単機。絶望のあまり正気を失って特攻攻撃でも仕掛けようというのだろうか。どう考えても正気の沙さ汰たとは思えない。

　今日の空に歓喜はない。
　解放感もなければ昂こう揚ようもない。彼は命令に束縛され、ただ淡々と過あやまたずそれを遂行するためだけに飛んでいる。
　三年前と何も変わらなかった。唯一の違いは、その速度。決して戦場を馳はせるはずのなかった白銀の翼が、今、カールを死地へと運んでいく。
　それでも、彼は飛ぶことを選んだ。このブリッツフォーゲルの操そう縦じゅう席に固執した。
　人を殺したくはない。友愛だの倫理だのといった理屈ではない。この空がそういう場所であってほしくないという祈りがあったからだ。
　事実として、空は楽園だった。龍りゅうたちがそれを教えてくれた。そこは憎しみも痛みもない世界。すべての因果からの解放が、そこにあった。
　だが、少し考えれば解わかったはずだ。なぜ空がそんなにも祝福に満ち溢あふれていたのか、その理由を。
　つまりは、人の世界ではないからだ。
　因縁に縛られ、同族を憎悪し、血を流さずにはいられない生物。そいつらの背中に翼がなかったからこそ、空は楽園のままでいられたのだ。
　ヒトの分際で烏お滸こがましくも、その祝福を得ようとした行いは、なんと矛む盾じゅんに満ちたものだったろうか。

最後の空で、それを確かめ、自らに思い知らせよう。翼をもがれる愛機とともに、絶望を勝ち取ろう。
今日のこの空を最後に、ブリッツフォーゲルは消滅する。ならばこの機体と共にあったカール・シュニッツも終わらせる。有り得ない夢を追った日々に終止符を打つ。もう二度と、空に思いを託さぬように。
地上で待つヘレンには、五体満足の手足と、まだ鼓動を続ける心臓を届けよう。だがそれはカール・シュニッツという男ではない。もっと無む垢くで祝福された別人だ。彼はきっと幸ある人生を送ることだろう。過去に束縛され、そこから逃避するために躍起になって空を目指した男とは違って。
通信機に、管制塔からの指示が届く。
『リヒャルトベースより王冠零号クローネヌル、敵艦隊は前方約三〇マイル先を進行中。三分後には貴機と遭遇する。現在の進路を維持せよ』
懐かしいクルツの鼻声とは違う、凜りんとした軍人の口調。だがもうそこに違和感は感じなかった。無味乾燥なコールサイン共々、今の自分には相応ふさわしいとさえ思えた。
「クローネ０、了解」
ほどなく、指示された通りの進路上に、晴れ渡る空の陽ひ射ざしを浴びて光り輝く編隊の姿が視認できた。敵方の飛空艦もまた対空哨しょう戒かいレーダーでこちらの機影を捉とらえているはずだ。案の定、さっそく数機の機影が編隊を離れ、こちらに接近してくる。数は六機。わずか単機の迎撃には充分すぎる出迎えといえよう。
増ぞう槽そうタンクにより空力特性の悪化したブリッツフォーゲルの速度は、四〇〇ノット程度に抑えられている。レーダーの反応だけならば、やや足の速いレシプロ機とでも判断されていることだろう。
だが、ここで増槽の燃料をすべて使い切るつもりになれば——
「クローネ０、敵影確認。交戦開始！」
カールは無線に向けて吼ほえると同時に、スロットルを全開放。さ

らにアフターバーナーを点火して最大加速を発揮する。

目指す前方のシルヴァーナ機が、やおら尾部から炎を吹き上げたとき、迎撃に向かっていたメルダースのパイロットは、はじめ敵機が撃墜されるのを待たずエンジントラブルに陥おちいったのかと誤解した。
だがその機体は墜つい落らくするでなく、代わりに有り得ないほどの猛スピードで突進し肉薄してくる。ありふれたハフナー系とばかり思い込んでいたその機影が、まったく違う何かだと視認できたときには遅かった。
「あれは……？」
そんな思考の停滞が、すべてを手遅れにした。謎なぞの機体は六機のメルダースに何の対処も講じる暇いとまを与えず、轟ごう雷らいのような爆音とともにその横をすり抜け、奇襲部隊の本陣めがけて突貫していった。
『て、敵は戦闘機に非あらず！　あ、あれは弾道ロケット、いや違う——』
錯乱に陥った迎撃班からの通信を受け、ホルガー艦長は目を剥むいて右手舷げん窓そうの空を凝視する。もはや彼の乗る旗艦『フェンリル』からも、迫り来る単機の姿は見て取れた。その白銀の機影、常識では有り得ない飛ひ翔しょう速度は、彼にとって既知のものだった。
そして、その尾翼。ヴィルドバッハの兵士にとっては呪のろっても呪い足りぬ、忌まわしき青い王冠の紋章……
「——奴やつはッ⁉」
飛空艦の周囲を固める護衛機が、泡を食って迎撃に備える。が、とても間に合ったものではない。弾幕を張る暇すらなく、敵機は衝突せんばかりの勢いで二番艦『ヘル』に襲いかかる。

見るも露あらわな混乱に陥った敵機編隊の中を突っ切って、ブリッツフォーゲルはカールが獲物と見定めていた一隻せきの飛空艦に、その名の通り稲妻の如ごとき速度で突進する。

急きゅう拵ごしらえのロケットランチャーには照準器がない。とりあえずは前に飛ぶ、という保証しかない代しろ物ものだ。そんな運任せも同然なロケット弾の必中射程を、カールは五〇〇ヤードと見込んでいた。機銃の射程よりなお近い。が、飛空艦ほどの図体がある標的ならば、そこまで近づけば何を撃とうともまず当たる。あとは進路を逸そらして衝突を免まぬがれる余裕があるかどうか——そこはもう、自らの腕前を頼みとするしかない。

攻撃機の肉薄を許した時点で命運の尽きる飛空艦にとって、まさにブリッツフォーゲルは天敵であった。危機を悟った次の瞬間には、どんな防衛手段に訴える暇いとまもなく懐ふところに食い込まれ、撃沈を待つばかりとなる。

瞬またたく間に視界を覆おおい尽くすほど大きくなる飛空艦の船体を睨にらみつつ、カールは離陸前に手渡されたロケットランチャーの遠隔点火装置を握りしめ、作動させる。

わずか一時間足らずで用意された仮設武器とはいえ、ハインツ中佐の部下たちは充分な仕事をしてのけた。ブリッツの左右翼端に据えられた都合四発のシュパルゲル・ロケット弾は、コンマ一秒の遅滞すらなく点火信号に反応し、推進剤の燃焼炎で空を焦がしつつランチャーから迸ほとばしる。

同時にカールは渾こん身しんの力で操そう縦じゅう桿かんを引き、わずか数フィートの間かん隙げきを残して飛空艦の巨体からブリッツの進路を逸らす。

軍用飛空艦は耐弾性の配慮から、敢あえて浮遊ガスには比重に優れた水素ではなく、不燃性のヘリウムを使用し、また気き嚢のう内部も細かい隔壁で区分して、機銃弾程度の被害には充分に耐えうるよう設計されている。だが大量の炸さく薬やくを装そう填てんした対艦ロケット弾の直撃を凌しのぐことは適かなわない。カールが放った四発は、悉ことごとく標的の胴体中央を捉とらえて貫通し、中枢で爆裂。衝撃波と破片によって浮遊ガス小しょう嚢のうの八割以上を一度に切り裂き無効化する。

その巨体とは裏腹に、轟ごう沈ちんする飛空艦の最期は哀れを催もよおすほど呆あっ気けない。均整の取れた流線型の艦影は、瞬く間に歪ゆがみねじくれ、収縮しながら眼下の大地へと落下していく。

後に、ジェット迎撃戦闘機の量産に伴って、戦場から姿を消していく飛空艦の運命——そんな末路の先触れともなったのが、この潜水飛空艦『ヘル』だった。

最大加速を維持したまま一気に敵編隊の中から離脱したカールが、後方確認鏡で戦果の程を窺うかがったときにはもう、無惨に萎しおれた敵艦は風に流されながらも眼下へと消えていくところだった。

そのままの速度を維持して残存艦の対空砲火の射程より退避してから、カールは冷めた声でリヒャルト基地に報告を送る。

「敵飛空艦、一隻せき撃沈——」

『こちらのレーダーでも確認した。よくやった。ただちに帰投を』

「——いいや、まだだ」

カールは義理や建前でこんなことをしているわけではない。やるとなったら徹底的にやる。やり尽くす。

こちらの手の内を読まれる前——敵方がまだブリッツフォーゲルの性能に動転している今この隙すきこそが、最大戦果の打撃を与えうる最初で最後のチャンスだ。

残る武装は、テスト目的で機首に設置された20㎜機銃一門のみ。だがそんな貧弱な武装でも、カールには敵に打撃を与える目算があった。

ロケット攻撃の一刹せつ那な、敵艦隊の中央を駆け抜けたカールは、その常人離れした動体視力によって、すれ違いざまに他ほかの飛空艦の底部に奇怪な構造を見て取った。随伴機のうち一機を掴つかみ取って艦底に固定していた鉤かぎ爪づめのような装置……その意味するところに、記憶の中で閃ひらめくものがあったのだ。

以前ヴァイニンガー飛行場で、酒の場の与よ太た話ばなしとして、空を飛ぶ飛行船に飛行機で『しがみつく』ことが可能かという馬ば鹿かげた議論をしたことがある。カールは自信をもって可能だと主張し

た。もちろん奇術めいた曲芸飛行にはなるが、やってやれないことはない、と。するとヴァイニンガー博士は、もしカールの放言が事実なら、という前提で、飛行機の空中給油という突拍子もないアイディアを披ひ瀝れきしたのだ。従来の飛行機でも、あらかじめ進路上に飛行船を待機させて補給を受け続けることが可能なら、常識外れの長距離を無着陸で航行できるだろう、と。

　同じことは、長時間に渡る空戦の継続についても言える。ヴィルドバッハの奇襲部隊が、なぜ途中で何度も遭遇戦をこなしながら首都にまで攻め上るなどという無茶を目もく論ろんだのか……その秘策に、これで目星がついた。

　連中は飛空艦から補給を受けるテクニックを編み出したのだろう。つまり、あの編隊の戦闘継続能力は飛空艦に大きく依存している。残り二隻せきのうち、せめて一方だけでも無力化すれば、作戦の続行は困難になるはずだ。

　後方確認鏡で敵勢の様子を確認。メルダースの大群は、今度は総出でブリッツの追撃に押し寄せてくる。だが怒りに任せた報復を意図してのものではないとカールは即座に見抜いた。敵編隊は一定の密度を保ちつつも大きく散開し、〝壁〟を形成してこちらを追い上げてくる。ブリッツが反転して再度飛空艦に攻撃を仕掛けることを警戒しているのだ。確かにあの布陣なら、どんな角度で回頭しようとも護衛機と鉢合わせする羽目になる。

　一糸乱れぬ統率で〝群体〟としての優位を保つ敵部隊の精強さに、カールは内心で舌を巻いた。なるほど先行したシルヴァーナの防衛隊が壊滅させられたのも頷うなずける。

　だがいかに優れた戦略も、既存の手段、既存の敵手を想定して練られるものでしかない。常識を覆す未知なる敵を前にしたとき〝策〟が綻ほころぶのは必ひっ定じょうだ。そして敵は、未いまだブリッツフォーゲルの真価を知らない。

　カールは惜しげもなく高度を落としながら、ただ逃げの一手に徹した。空戦においては位置エネルギー——即すなわち高度が要の一つとな

る。もしここでカールが上昇していれば、追撃する編隊は再攻撃の意図を察してさらに警戒の度を強めただろう。だが逆に降下に転じたカールの弱腰は、追撃する側の強気を煽あおった。空飛ぶ壁となって敵機を牽けん制せいするのみだったメルダース編隊の一部が先行し、逃げるカールを積極的に仕留めにかかる。

　のらりくらりと機首を転じて敵の照準を避よけながら、なおもカールは降下した。翼端増ぞう槽そうタンクがもたらす空力特性により安定性の増した機体は、普段より小さな旋回半径で機敏な機動が可能になる。燃料も付加武装も使い尽くして用済みになったタンクを、敢あえて切り離さずにおいたのはそのためだ。逃げるだけならブリッツの本気を見せるには及ばない。

　高度一五〇〇フィートを切ってもなお降下。いや増す大地の威圧感が墜落の恐怖を煽る。執しつ拗ようにブリッツを追撃してくるメルダース編隊は、既すでに上空の飛空艦から相当に引き離されている。

　狙ねらい澄ました好機は、ここだ。

　一気に操そう縦じゅう桿かんを引き起こし、逃げ腰を装い続けた機首を大空目掛けて突き立てる。さらに反転と同時に増槽を投とう棄き。今度こそ用済みになった付加物のみを餞せん別べつとして大地に投げ渡し、代わりにカールとブリッツフォーゲルはスロットルの全開放とアフターバーナーの点火をもって万有引力に叛はん逆ぎゃくする。

　増槽の空気抵抗から解放された白銀の翼、その鋭さはまさしく鞘さやから抜き放たれた剣の如ごとくであった。まさか初撃で見せつけられた敵機の加速を、なお凌りょう駕がする驚きょう愕がくに直面する羽目になろうとは、追ってきたメルダース編隊の誰だれ一人として想像だにしなかったのだろう。しかも推力の格差が歴然となる垂直上昇において、ブリッツの最大加速にレシプロ機の追従が及ぶはずもない。まんまと低高度にまで誘導されたヴィルドバッハ機たちを後しり目めに、カールは遮さえぎる物とてない天上へと上り詰める。目指す飛空艦は丸裸だ。狙うは艦底――おそらくは空中補給の要かなめであろう、戦闘機の連結機構。カールが再攻撃に際して高度を稼ごうとしなかったの

は、大前提として敵艦を下方から射撃する必要があったからだ。
　所しょ詮せん戦闘機ではないブリッツの機銃は、わずか一門。しかも装弾数は六〇発限りと極端に少ない。もとより船体そのものにダメージを与えることは期待していない。ならば首都を目指すあの飛空艦の最終目的にとって、最大の意味と最弱の堅けん牢ろう性を兼ね備えた部位を狙い撃つ。それがカールの結論だった。
　照準器の中に艦影が迫る。だがまだ遠い。狙う細部が鮮明になるまで、もっと近く、もっと速く——駆り立てるカールの操縦に応こたえてブリッツフォーゲルは炎の排気で吼ほえ猛たけりながら前へ、前へと突進する。
　飛空艦の対空機銃が火を噴いた。だが狙いが甘い。ブリッツの背後には、追い縋すがろうとして足あ掻がくヴィルドバッハ機の群れがある。流れ弾を恐れるあまりに銃座手の指先が鈍っている。それすらもカールには予測の内だ。相手に決断の暇いとまなど与えない。恐れることなく一直線に、ただ速度のみを頼みに攻める。
　目に映る飛空艦のサイズが拳二つほどの大きさにまで拡大する。その艦底に突き出された鉤かぎ爪づめ状の構造。狙うその輪郭をはっきりと捉とらえた刹せつ那な、カールは機銃のトリガーを引き絞る。
　着弾の火花に彩られながら、瞬またたく間に眼前まで迫る飛空艦の巨体。照準を維持できたのは僅わずかに二秒あまり。またしても衝突ギリギリのところで軌道をずらし、カールは標的と垂直に近い角度で擦すれ違う。最後の瞬間、確かに小爆発に違いない炎が閃ひらめくのが見えた。狙ねらった部位を紛れもなく破壊してのけたことを、カールは手て応ごたえで確信する。
　これであの艦は、随伴機に補給を施ほどこすことができなくなったはずだ。あともう一隻せきに同じ損害を与えれば、この攻撃編隊は首都到達まで制空能力を維持しきれずに自滅する。カールは燃料計と機銃の残弾表示に目を走らせ……やれる、と確信した。機銃の連射は三秒ぶん。アフターバーナーもあと一度限りなら使用できる。
　あくまで速度を殺しきることなく宙返りで転進しながら、残るもう

一隻を見据える。今度は相手の下面に潜り込む余裕はない。一度出し抜いた護衛機編隊はもう直近の高度まで追い上げてきている。艦底の装置を攻撃するには、敵艦の真横まで降下してから水平に狙い撃つしかない。
既すでに敵編隊もカールの狙いに気付き、またブリッツの圧倒的速度を前にしては、尾部に追いついて狙い撃つなどまず不可能と悟ったのだろう。今度は相手の動きを予測して進路上に弾幕を張り妨害する戦術に切り替えた。猛然と撃ち放たれる土砂降りの銃弾の雨。錯さく綜そうする曳えい光こう弾だんの火線が壮大なレース編みのように空を彩り、包み込む。
カールは全開のスロットルに落下速度を上乗せし、右に左に機体を滑らせながら目標高度まで舞い降りる。こうなると射撃にも回避にも腕前など意味がない。空間中の弾丸密度と標的の移動速度、そして運気という変数が加わった摩ま訶か不思議な方程式が勝敗を占うことになる。つまりはただの度胸試しだ。そうと心得ていればこそ、カールは吹き荒れる弾丸の嵐あらしがもたらす恐怖を意識の外に閉め出して、ただ標的への到達ルートのみに集中する。
ついに飛空艦の横手まで来たところで、機首を水平に引き起こすと同時にアフターバーナーを点火。あとはただもう勝負あるのみ。接近から射撃までの無防備な直進をいかに瞬時に終わらせるかだけを考える。
角度と速度が万全ならば、トリガーを引くより先に経験則だけで〝仕留めた〟と確信できるときもある。今回がまさにそれだった。撃ち放った未来の弾丸が標的を吹き飛ばす予見を脳裏にまざまざと描きつつ、カールは機銃を発射する。
番狂わせは、横合いから飛び込んできた一機のメルダースだった。
二隻目が補給装置のみを破壊された時点で、三隻目を狙う際のカールの意図もまた明白であり、その射撃の弾道は充分に予測の範はん疇ちゅうにあったのだろう。だからといって、まさか身を挺ていしてまでそれを阻止するという処方はカールにとっても想像外だった。

　必中を期した己おのれの銃弾が、標的とは全まったく違う相手を打ち砕き、飛散させた結末に、カールは唖ぁ然ぜんとしつつも射撃位置を逸して通過する。そこに驚きはあれど、死も厭いとわぬ敵の闘志についてまで、恐きょう懼くや戦せん慄りつを懐いだくには至らない。それは戦いを終えて冷静な思考を取り戻したときにのみ許される贅ぜい沢たくだ。殺すか殺されるかの現場では、お互いがどんな無軌道をしでかそうとも、それはただの現象でしかない。

　三度目の攻撃は不首尾に終わったものの、それが最後というカールの見込みは後から翻ひるがえせるものでもなかった。弾丸も、燃料の残量も、再度の突撃を試みるには少なすぎる。

　ここが潮時――そう観念してカールは全速力のまま敵編隊に背を向けた。今度は詐さ術じゅつでも何でもなく、追走を許さない全力の逃げ足だ。

　気がつけばからからに干ひ涸からびていた喉のどを吐息で潤うるおして、リヒャルト基地との通信を開く。

「グレイル０、戦闘空域を離脱。戦果は先の一隻せきのほか、敵戦闘機一機、それと残る二隻のうち、片方の補給装置を破壊した」

『了解。……でかしたぞ。やはり敵の頼みの綱は空中補給だったか』

　無線に応じた声は、さっきまでの専任の通信員ではなく、ゲプハルト中佐のものだった。

『ともあれ、充分な戦果だ。あとは首都の防衛部隊に任せよう』

　ゲプハルトの言い種ぐさを聞いて、カールの胸に暗雲が兆きざす。

――それはつまり、まだブリュンヒルデの守備隊にも出番があるということか？

「……連中はまだ首都を目指してるんだな」

　侵攻部隊の空中補給がどのような手順を踏んだものなのかは定かでない。だが、わざわざ爆撃艦でもない飛空艦を三隻も連れているならば、それは三隻が必要とされていたからに相違ない。つまり単純計算でも、彼らの補給効率は三分の一にまで減退しているはずなのだ。指揮官の頭がまともなら、作戦を断念してもおかしくはない状況であろ

う。
『レーダーの反応は進路を変えていない。あと九〇分で到達する。……俺おれたちにできるのは、ここまでだ』
　ゲプハルトの声には諦てい観かんより誇らしい達成感の方が色濃かった。それはカールの健闘を讃たたえるために繕つくろったものだったのかもしれない。が、いずれにせよカールが至る結論は違うものだった。
「……いや、まだだ」
『カール？』
「奴やつらが作戦続行を諦あきらめるまで追いつめる。あと一太刀浴びせれば……」
『馬ば鹿かを言え。もう燃料も弾薬もないだろう』
「ここからならヴァイニンガー飛行場が近い。燃料もあるし、機銃の弾丸もテストで使ったやつが残ってる」
　カールが冗談でも虚勢でもなく、本気で言っているのだと理解して、ゲプハルトの口調は怒声へと一転した。
『あれは演習用の徹甲弾だろうが！　炸さく裂れつ弾だんでなければ20㎜機銃なんて豆鉄砲だ！』
「操そう舵だ装置にでも当てれば何とかなるさ。煉れん瓦がを投げるよりはいい」
『……カール、無茶はよせ。お前独りで出来ることにも限度がある』
　カールは思わず苦笑した。殺すべき一人を仕留め損なえば、守るべき二人が死に逝いくと、そう彼に説いたのはゲプハルト自身ではなかったか。
「首都上空で空中戦なんぞやったら、どれだけ被害が出るか知れたもんじゃない。諦あきらめるのは早い。奴やつらはここで阻止しなきゃならん。――そうだろう？」
『……』
「博士に伝えて、ヴァイニンガー飛行場に連絡を廻まわしてくれ。補給の準備をしておくように、と」

『……いいだろう』
　ゲプハルトの苦りきった返答を聞き届けて、カールは通信を終える。
　戦闘空域は既すでに遙はるか北西に遠ざかり、もはやヴィルドバッハ機の追撃もない。機首を緩やかに西へと傾け、ヤーデ高原への進路を取る。
　ひとまずの安全を確信したところで、カールは大きく息を吐き、血中のアドレナリンを鎮静化させる。
　ようやく人間らしい思考と感情を取り戻す余裕を得たところで——待ち構えていたと言わんばかりに、凍えるほどに冷たい死の恐怖の感触が、じわじわと背骨に這はい登ってきた。

6

　わずか一〇分前までは想像だにしなかったアングルボダ作戦の岐き路ろに立たされ、ホルガー艦長は葛かっ藤とうしていた。
　まさかの二番艦ヘル轟ごう沈ちん。そして彼の乗る旗艦フェンリルも捕確架キャッチャーアームが損壊。唯一無事に残った三番艦ヨルムンガンドだけが、随伴飛行編隊の補給行動を続行できる命綱である。それも身を挺ていして盾たてとなりヨルムンガンドの被弾を防いだゲイリー少尉の英雄的犠牲あってのものだ。
　残る四四機のメルダース全機に対し、ヨルムンガンドが単艦で補給カセットの交換作業に当たるとなると、一切の遅滞がなかったとしても所要時間は七五分……首都到達までのタイムスケジュールにぎりぎり収まる範はん疇ちゅう内だ。
　だがもし仮に、侵攻ルートの途上であと一度でもシルヴァーナ側の迎撃を受けたなら、この算段は瓦が解かいする。そして補給にあぶれた機体は、不十分な弾薬と燃料の不安を抱えたままで、首都攻略戦に身を投じる羽目になる。
　否いな、〝もし仮に〟というのは度どし難がたい楽観だ。再度の敵襲

は必至と見て然しかるべきだろう。シルヴァーナ側は確実に、Ｅ型メルダースと潜水飛空艦の運用上の要点を見抜いてきている。最初の迎撃機編隊こそ烏ぅ合ごぅの衆でしかなかったが、その後に単機で攻撃を仕掛けてきた王冠マークの戦闘機は、空恐ろしいほど的確にこちらの弱点を衝っいてきた。
　悪魔じみた銀色の機影――その我が物顔の飛ひ翔しょうを思い返すたび、ホルガーは腸はらわたが煮えくりかえる。
　やはり交試運行における邂かい逅こぅには運命的なものがあったのかもしれない。彼のフェンリルは、初めて敵の領土に踏み込んだその日から、既すでに不ふ倶ぐ戴たい天てんの宿敵とまみえていたのだ。
　護衛機編隊の奮闘むなしく、仇きゅう敵てきは南東方角の空へと消えた。もちろん侵攻部隊の阻止を諦あきらめたのではなく、単に積載燃料の都合だろう。もし直近に補給拠点があれば、再び舞い戻って今度こそヨルムンガンドの無力化を果たそうとするに違いない。否いな、あの機体速度をもってすれば〝直近〟で補給を受ける必要すらあるまい。たとえ拠点が地の果てであろうとも、あれだけ俊足ならば潜水飛空艦が首都近辺まで到達するより早く、余裕で回り込んでくることだろう。
　先に進むなら、あのシルヴァーナの秘密兵器を打破する算段が必ひっ須すとなる。だが、如ぃ何かにして？
「――艦長、航空隊長のゼーマン少佐より通信が」
　副長の呼びかけに、ホルガーは重い表情のまま頷うなずいた。
「よし、繋つなげ」
　ここまでＥ型メルダースの編隊を率いてきた剽ひょう悍かんなる空軍士官は、フェンリルの右手舷げん窓そうに機体を並べて風防キャノピー越しに敬礼を寄越しつつ、勇ましい語調で切り出した。
『艦隊長ホルガー准じゅん将しょうに上申仕つかまつります。我われら飛行部隊は総員揃そろい意気軒けん昂こう。諸もろ共ともに報ほう仇きゅうの決意に燃えシルヴァーナの奴やっ原ばらに断固鉄てっ槌ついを下す覚悟ゆえ、どうか、アングルボダ作戦の続行をご決断願いたい！』

「しかし……」
　それでは貴官らのうち何人が生きて祖国の土を踏めるのか。そう言いさしたところに、重ねてゼーマン少佐の威声が割り込む。
『ゲイリー少尉の死に花を、我ら一同、羨せん望ぼうして止やみませぬ。リフテンVII世閣下の御恩顧を賜たまわった身上なれば、敵地に屍しかばねを晒さらしてこそ誉ほまれとするのがヴィルドバッハ将兵の心意気と存じます。故ゆえにどうか、ご英断を！　勝利はもはや眼前であります！』
　若き少佐の、頑と揺るがぬ決意の程に、ホルガーは胸が熱くなる。
「……よくぞ言った。その覚悟こそ我らの鑑かがみ。公国軍の至宝である。貴官と轡くつわを並べたことを誇りに思うぞ」
　覚悟を固め、意気も新たにホルガー艦長は総員に指令を発する。
「引き続き、進路を維持し全速前進。アングルボダ作戦の最終段階に向け邁まい進しんする旨、大本営にも通達せよ。ヨルムンガンドは継続して補給活動を続行。諸君、今こそ意地を示すときだ。勝利を我らに！」
　もう幾度となく見慣れたはずの、高原から仰ぎ見る澄んだ青空の色。いつだって、手を伸ばせば掴つかみ取れそうなほど間近に感じたその青色が、なぜか今日のカールには、遠く隔へだたった彼方かなたに思える。
　オットーもアルベルトも、いつになく寡黙に機体の整備点検を急いでいる。まるでカールと言葉を交わすことを恐れているかのようだ。それでも、手間を惜しまずわざわざ風防キャノピーを取り外し、新鮮な外気とボトル入りの水を手渡してくれた心遣いは、いつもと変わらぬ友情の表われであろうか。
　彼らは責めない。たった今、カールが演じてきた殺さつ戮りくも。その手段として、彼らの夢の結晶たるブリッツフォーゲルが駆使されたことも。
　ただそれだけでも今のカールには充分だった。或あるいはそれとも手遅れだったのか。今誰かに話しかけられても、まともな受け答えが

できるかどうか、カールには自信がなかった。
　手袋を嵌はめた両手は、操そう縦じゅう桿かんから離した途端に無様なほどに震えだす。指の感触を取り戻すには、再び操縦桿を握るしかない。すると両手の痙けい攣れんはぴたりと治まり、ふたたび装置を操る装置として十全の機能を取り戻す。
　壊れている。我が事ながらしみじみと、そう思う。
　なぜまた戦えるなどと思ったのか、かつて己おのれを蝕むしばみ尽くした毒を、再び呷あおって無事に済むと思ったか。
　目を閉じれば瞼まぶたの裏に、ブリッツの銃弾で砕け散るメルダースの残像が焼き付いて離れない。何の躊躇ためらいもなく火線に身を晒さらして死んだ名も知らぬパイロット。そしてその末路に懐いだくべき畏い怖ふすら麻ま痺ひしていた自分。
　トリガーに乗せた人差し指ひとつが弾はじく、あまりにも安易な死。他愛たわいもなく、呆あっ気けなく、塵じん芥かいのように散っていく命の軽さ。それを直視し実感することが、いかに人間の魂を破壊していくか、カールは身に染みて弁わきまえていたはずなのに。
　そう——ヒトの命は、その尊さとは裏腹に、あまりにも軽く儚はかないのだ。
　誰もが命を慈いつくしみ、生きる喜びを賛美する。その尊さに見合う砂金を求めれば膨ぼう大だいな量となり、その量を秤はかりに乗せただけの重さが命にあると思いたがる。
　だが違う。殺人者はその手で命を弄もてあそぶが故ゆえに、その実際の質量を知っている。知ってしまう。人間が生涯を費やし、全身全霊を賭かけて育はぐくむ想おもいを、どれほど薄っぺらく脆ぜい弱じゃくな基礎の上に乗せ、支えさせているのか理解してしまう。
　その恐怖に抗あらがうために、たとえば快楽殺人鬼ならば——命を愛する滑こっ稽けいさを嗤わらうのだろう。命の上に積載されたモノもまた軽薄で無価値だと見なすなら、天秤は綺き麗れいに均きん衡こうを保つ。
　そしてもっと凡庸な、どこにでもいる兵士なら——命の重さに等級

をつける。敵と味方。彼と我。より貴い命を救うために、やや価値で劣る命を潰つぶす。ただの主観でしかないその基準を、信念という補強材で徹底的に囲い込めば、その理念は彼を救うだろう。あるいは祝福さえするだろう。敵の屍しかばねの上に記念碑を建て、それを偉業と讃たたえられるようにさえなるのだろう。

だがカールには、どうしても、命の途絶の安易さが耐えられない。それは罪の意識などという高尚なものではなく、ただの恐怖だ。絶え間なく終わりない絶望と生涯を共に過ごすことへの怯おびえだ。

死は限りなく安易であるが故ゆえに、明日には自分に及ぶかもしれない。のみならず自分の妻や、子や、家族同然に愛した人々を、いつ塵じん芥かいのように吹き飛ばすか知れない。だがそうと承知した上でなお、築き上げた絆きずなを愛し、慈いつくしまずにはいられない。だから人々は恐怖と折り合いをつけるために、様々な思弁を駆使する。死は神の御み業わざであると説いてみたり、死後の世界を想定したりする。死が無意味ではないと確信せずして、どうして意味のある生を送れようか。

人生の尊さと、命の軽さ。その矛む盾じゅんの差し引きがゼロになるよう帳尻を合わせるための算術というものがある。殺し殺されることの大義を信じ、贖しょく罪ざいの祈りを神に委ゆだねる……それは人が幸を掴つかむ上で必須となる心得なのだ。それを持ち合わせぬ者は、ただ壊れていくしかない。この自分のように。

もはや操そう縦じゅう桿かんを握る以外の用を成そうとしない己おのれの腕。こんな風に壊れてしまうのは、そもそも自明であっただろうに。どれほど自分という人間が脆ぜい弱じゃくか、カールには自覚があったはずなのに。

命の感触、その潰ついえる手て応ごたえが手に染みつくまで慣れてしまったとき、かつてカールは生きる喜びを拒絶しようとした。だがそれは果たされなかった。そして再び人生に歓喜を得てしまった後は、徹底して殺人を否定しようとした。なのに彼はまたぞろ銃を取り、かつてと全まったく同様に死を振りまいている。

生き存ながらえたいと願ったならば、命の軽さなど忘却の底に沈めておくべきだった。再び確かめに戻るなど正気の沙さ汰たではなかった。

ただ、飛ぶために——大空の夢に未練を残したばかりに、彼は自らを詭き弁べんで欺あざむいたのだ。この行いに意味があると、必ひっ須す

のことだと信じようとした。愚かしいにも程がある。
「……ああ、馬ば鹿かなんだな」
　遠い青空を眺めつつ、誰だれにともなく、そう呟つぶやいた。
　それは理由ではなくても原因ではあるだろう。なぜ飛ぶのか。なぜ滅びに向かうのか。つまるところは愚かしさ故ゆえだ。その愚行で失うことになる諸もろ々もろの価値や意味が、実は己を世界に繋つなぎ止めるための大切な縁よすがであることを、きちんと呑のみ込めていないのだ。
　ふと、操縦席の脇わきに掛けられたタラップから、大人よりも軽い体重の振動が伝わってきた。ぼんやりと目を向けると、神妙な面おも持もちで機内を覗のぞき込んでくるエリックと視線が合う。
「なぁ、カール……」
「ん？」
「こんなこと……やりたくないんだろ？　本当は」
　答えようとして——カールは口を噤つぐみ、かぶりを振った。
「エリック、そいつはな、戦場ではいちばん考えちゃいけないことだ」
「……」
　カールの返事の何がどう少年の心を傷つけたのか、エリックの見開いた瞳ひとみから涙が溢あふれ出る。
「誰かが勝手にカールを英雄にしたせいで、今、カールはこんな目に遭ってるの？」
「それは違うな。少なくとも今は……俺おれは、俺の意志で飛んでる」
　果たしてそれが慰なぐさめになるのかどうか、確証すらないままに、カールは微笑ほほえみを浮かべて見せる。
「誰を恨む気もないし、後悔もない。気にしなくていいんだ」
　エリックは機内に手を差し伸べ、カールの飛行服の肩を掴つかんだ。まだ細い指で、力強く、直ひた向むきに。
「こんなところで、死んじゃ駄目だ」

「……」

「カールは帝凰龍カイザードラッヘに勝つんだろ？　空であいつを追い抜くんだろ？　それまでは……死んじゃ駄目だ」

「ああ、そうだったな」

　閉じた瞼まぶたの裏に、かつて遠い日に見み惚とれた輝きを思い起こす。ついに手の届かなかった、見果てぬ挑戦の夢。

　そのとき、ふと、心の片隅に引っかかっていた何か曰いわく言い難い蟠わだかまりが、すとんと腑ふに落ちた。

　遅きに失したとはいえ——せめてあと数日、気付くのが早かったなら、彼はもう一度、大空であの龍りゅうと相あい見まみえることが叶かなったかもしれない。

「なぁ、エリック——」

　カールは狭い操そう縦じゅう席の中で難儀しながらも飛行服の胸元をはだけると、首に掛けていたペンダントを外し、エリックへと差し出した。化石化した龍の牙きば。これまで空を想おもって悩むときには、いつも彼を導いてきた品だ。

「こいつを、預かっておいてくれないか？」

「カール……」

　唐突な贈答の真意を、エリックが問い質ただそうとしたとき、タラップの下に立ったアルベルトが硬い声で呼びかけてきた。

「カール、補給は完了だ。いつでもいいぞ」

「ああ、解わかった」

　風防キャノピーを封鎖する作業のために、タラップの上のエリックはアルベルトに場所を譲らなければならない。渡されたペンダントを握りしめたまま、なおも物問いたげに躊ちゅう躇ちょするエリックに、カールは柔らかく言い聞かせる。

「そいつはな、空の欠片かけらだ。迷ったときに握りしめれば、いつだって道を教えてくれる」

「……」

「俺おれはもう、迷わないだろう。だからそいつは、お前のものだ」

　エリックの後からタラップを上ってきたアルベルトが、少年の肩に手を置き、別れを促うながす。カールには成さねばならぬ務めがあるのを、誰もが知っていた。それはエリックもまた弁わきまえねばならないことだった。それが大人になるということだ。
「……戻ってくるよな？　必ず」
「まぁ、頑張ってみるさ」
　爽さわやかに、だがどこか寂しげに笑うカールの顔を目に焼きつけて、エリックはタラップから降りる。
　電源車が唸うなりを上げ、しばしの休息にまどろんでいたジェットエンジンに喝かつを入れて覚かく醒せいさせる。轟ごう然ぜんと廻まわりはじめたタービンブレードの唸りが、燃焼開始を境に金切り声へと音域を上げていく。人類史上初のターボファン・エンジン。だが次に停止した後にはもう、永久の沈黙が約束されている。
　安全圏へと退避しながら、アルベルトが、オットーが、エリックが、その誇らしげなまでの後ろ姿を心に刻む。
　最後の離陸に先駆ける最後の疾走。銀の翼が揚力を掴つかみ、この機体のためだけに誂あつらえられた滑走路を力強く蹴けって決別する。
　飛行場の上を旋回し、軽いバンクで翼を振って地上の仲間たちに別れを告げると、ブリッツフォーゲルは一路、北へと進路を取った。
　最後の空。そこは死神に魅入られた戦場の彼方かなた。
　だがもう、カールは迷わない。飛ぶのだと、そう決めたのだから。

7

　わずか単独の敵機を前に、その圧倒的性能差で翻ほん弄ろうされつくしたヴィルドバッハ侵攻部隊。白銀の最新鋭機の再来は、ほぼ確実なものと予期されていたが、再戦に臨むメルダースのパイロットたちが恐きょう懼くに震えていたかといえば、むしろ逆だ。彼らは手痛い第一ラウンドを教訓として噛かみ締め、そこから汲くみ取れる分析を元に、今度こそ有効となるであろう戦術を検討していた。

第一に、敵は徹底して接近戦に固執した。ロケット弾の発射に際してさえ、まるで外すのを恐れるかのように極端な至近距離まで詰め寄ってきた。これがパイロットの資質によるものか、それとも機体の特性なのかは定かでないが、いずれにせよあのジェット機は中距離以上で有効となる火力を持ち合わせていないものと推測できる。

第二に、敵はあくまで補給能力を残す飛空艦、すなわち三番艦ヨルムンガンドのみに標的を絞ってくるだろう。ジェット戦闘機は速度こそ驚異的だったが、減速や旋回といった挙動の機敏さには欠けていた。つまり格闘能力は極めて低い。最後まで護衛機に立ち向かう構えを見せなかったのは、こちらが速度差のせいで相手の背後を押さえられなかったのと同様、相手もまた運動性の欠如からこちらの背後に回り込む機動を取り得なかったためだろう。ならば互いの背後を狙ねらう格闘戦ドッグファイトは、この際、念頭に置かないでいい。

第三に、戦闘継続時間。ヴィルドバッハ側が劣勢だったにも拘かかわらず、敵機はわずか三回の突貫を試みただけで戦闘を離脱した。これはジェット機の戦闘継続時間が極めて短いことを示唆している。

結論として、こちらからは積極的に撃墜を狙ねらわず、ただひたすらヨルムンガンドの防衛に徹して時を稼ぐのが最善の戦略、ということになる。

南の空より急接近する高速の機影をフェンリルのレーダーが捕ほ捉そくしたときも、ゼーマン少佐率いるメルダース部隊は慌てず騒がず、事前に申し合わせた通りのフォーメーションに編隊を組み直し、盤ばん石じゃくの構えで出迎えた。

ゲプハルトの反対を押し切る形で、強引に再度の出撃に及んだカールだったが、実のところ敵侵攻部隊との再戦において、勝算と言えるほどの方針は何一つ持ち合わせていなかった。

前回の攻撃が上首尾に終わったのは、それがあらゆる意味で敵の意表を衝ついた不意打ちであったからだ。ブリッツフォーゲルの機体性能とそれを駆使した戦術が悉ことごとく敵の予想を凌しのいでいたから

こそ成り立った、駆け引きの勝利だ。言うなれば伏せたカードを何枚も用意していたからこそ、圧倒的に数で勝る敵を翻ほん弄ろうすることができたのだ。

　だが先の戦闘で手札をすべて晒さらしてしまったカールとブリッツフォーゲルには、もう敵を出し抜ける材料が何一つ残っていない。それどころか今度は対艦雷撃装備もなく、機銃に装そう填てんされているのは炸さく裂れつ弾だんより著いちじるしく効果の劣る、ごく普通の徹甲弾である。対するヴィルドバッハ部隊は、補給の要かなめである飛空艦を二隻まで無力化されているとはいえ、直接戦力である戦闘機編隊はまだ一機を喪失しただけだ。

　戦力比——四四対一。もはや笑い話にすらならない。カールにとって再戦は自殺行為も同然である。そこまで理解していながらも、カールは再び戻ってきた。

　何な故ぜならば、そこが唯一、カールとブリッツフォーゲルに残された空だったからだ。

　敵編隊までの視認距離に到達。今度は早々に増ぞう槽そうを切り捨てて、最初から最大加速の勝負をかける。唯一確実なアドバンテージは、ブリッツの加速力だ。もし敵方がまだ対処法を見み出いだしていなければ、或あるいは付け入る隙すきがあるかもしれない。

　交戦距離内にまで接近しても、飛空艦の周囲の護衛機はそれに応じた挙動を見せない。まるで展覧飛行のように悠々と飛空艦の周囲を旋回している。一体どういう心算なのか訝いぶかるカールだが、ただ迷っていたところで始まらない。

　狙う標的は一隻せきのみ。補給のための連結装置か、あるいは操そう舵だ装置に狙いを絞る。スロットル全開。アフターバーナー点火。全身を叩たたきのめす加速度Ｇと共に、まるで視界が望遠されたかのように敵艦影が肉薄する。

　だがそれは、旋回を繰り返していたメルダースが待ち構えていた瞬間でもあった。

　カールが突貫の素振りを見せたそのとき、飛空艦を挟んでちょうど

反対側にいたメルダースが、一気に加速して船体を回り込み、ブリッツの真正面に躍り出る。完全に正対する形で敵機の姿を見定めた刹せつ那な、カールはその意図を悟り、咄とっ嗟さに機首を翻ひるがえした。
——間一髪、メルダースの放った銃撃が機体の脇わきを掠かすめ飛ぶ。

　前後真逆に擦れ違い、飛空艦の艦影を背後に置き去りにしてしまってから、カールは敵方の覿てき面めんな処方に舌を巻いた。

　正対攻撃ヘッドオン・アタック……こればかりは互いの速度差がどうあろうと攻撃の成功率は変わらない。狙ねらい撃ちというよりも、撒まき散らした弾幕の中に敵を突っ込ませるという〝罠わな〟の技法だが、双方のベクトルが前後を真逆にしてほぼ完全に重なるならば、その命中率は充分に戦術として通用するものになる。レシプロ機にとってはブリッツフォーゲルに対して五分の勝負を挑める絶好のチャンスとなろう。当然、相打ちの危険性を孕はらむ戦術ではあるが、もとより飛空艦を被弾から守るために自ら盾たてになる程の連中である。差し違えるならむしろ本望とさえ覚悟していることだろう。

　飛空艦を中心に間隔を空けて輪を描く敵編隊の異様な挙動も、これで真意が判明した。カールが無傷の飛空艦のみに狙いを絞って攻めてくるのは、敵方にとっても歴然なのだ。そして銃撃に及ぶその直前、ブリッツの機動は直進のみに限定される。こちらの突入角度さえ見定めれば、あとは縦横無尽に飛空艦の直近を周回している護衛機の、ちょうど船体を挟んだ反対側にいる機体が即応し反撃に出ればいい。カールは敵艦に攻めかかる度に、確実に護衛機によって正面正対ヘッドオンの態勢に持ち込まれることになる。

「く……」

　歯は噛がみして、カールは反転し再度攻撃を試みる。だがまたしても円環機動をするメルダースの一機が抜かりなくブリッツの正面を阻み、銃撃を浴びせてくる。命中弾を浴びるまいと軌道を変えれば、その時点で敵艦を狙うチャンスも御破算だ。

　まさに手詰まりだった。護衛機編隊の戦略は守りに徹した消極的なものだが、それもまたブリッツの燃料が長く保もたないことを見越し

た上での策だろう。

〝やってくれる……〟

それでもカールは諦あきらめず、敵が操そう縦じゅうミスを犯す可能性を一いち縷るの望みとして、繰り返し突撃を試みた。が、何度やっても敵機は確実にブリッツの進路を阻害する。

一度だけ、敵の発砲に先んじてこちらも射程ぎりぎりの一連射を放ってはみたものの、破壊力に欠ける徹甲弾は、標的を捉とらえても虚むなしく跳弾の火花を散らしただけだった。

ふと燃料計に目を走らせたカールは、その減少ぶりに愕がく然ぜんとなった。既すでに残量は半分を切っている。それは同時にブリッツに残された時間でもあった。

残り少ない愛機の寿命、その千金にも値する時間を、何と無意味に費やしたことか……やるせない怒りが、カールを理屈抜きの衝動へと駆り立てる。

こんな空に来たかった訳ではない。ただ憎しみと殺意を交差させるだけの空ではなく、彼とブリッツは、もっと遠くにまで辿たどり着ける筈はずだった。誰も至ったことのない、彼方かなたに。この翼でしか届かない場所に。

気がつけば、涙が止まらなかった。無念でならない。空を飛べば血を流さずにはいられない自分。その罪を贖あがなうことさえできない自分が悔しくて厭いとわしかった。

そんなにも戦争が大事なら、いっそこのまま機体を敵艦にぶち当ててやろうか。このまま地上に戻るより、それは余程マシな末路ではないのか。

考えれば考える程に、それは妥当な結論に思えてきた。少なくとも殺人機械としての終着には上等だ。これで自らの命の〝目方〟も自明となろう。死神が決めた落札価格。それに同意して頷うなずくだけでいい。

これが最後、そう思い定めて、カールはブリッツフォーゲルの機首を敵艦のど真ん中に据える。もう次は撃たれても避よけるまい。当た

ろうが知ったことではない。たとえそれで火ひ達磨だるまになろうとも、次の瞬間には亜音速で激突する七トンの鉄塊が、あの飛空艦を確実に地獄に落とす。

〝……ああ、やってやろうじゃないか……〟

口元を凶笑に引き攣っらせ、そう嘯うそぶいたカールの脳裏に――そのとき、猛烈な〝否定〟のイメージが閃ひらめいた。思わず操そう縦じゅう桿かんを引き、スロットルから離した左手で額ひたいを押さえる。

「な……ッ!?」

愚か者――そう嘲ののしり叱しっ責せきする声ならざる声。意識に割り込む異なる思考。

なぜ空に在って嘆くのか。駆けながらにして恥じるのか。

翼は誇りを謳うたうもの。無限の自由に欣きん喜きし躍るもの。

鋼鉄の翼よ、そは既に一度、証あかしを立てたではないか――

「……あ……」

眩まばゆい光が風防キャノピーのすぐ脇わきを掠かすめて追い抜いていく。燦さん然ぜんと撒まき散らされる光の礫つぶて。かつて雷雲の中で覇を競った虹龍グレンツドラッヘの雄姿がそこにあった。

何な故ぜ、そう声に出しかけたカールは、周囲の空を見渡してなお愕がく然ぜんとなる。

北から、南から、続々と飛来する龍りゅうの群れ。

霞龍ネーベルドラッヘがいる。嵐龍シュトゥルムドラッヘがいる。開戦以来その姿を消していた大空の住人たちが、いま一斉に集結していた。

悠々たるその飛ひ翔しょうには、危機感などまるでなく、ブリッツフォーゲルが演じる死闘の現場を、まるで目新しい遊ゆう戯ぎか何かと勘違いしているかのようだった。現に数頭の若い霞龍ネーベルドラッヘは、飛空艦の周囲を旋回するヴィルドバッハ機の輪に加わり、恐れ気もなく嘶いななきながらメルダースの尻しりを追いかけている。通常知られている龍の習性からすれば、まったく理解できない行動だった。再び龍たちと巡り合った喜びよりも、この状況に対する危き惧ぐの方が、カールの心胆を寒からしめる。

　侵攻部隊の旗艦フェンリルの艦橋では、いち早く対空哨しょう戒かいレーダーの反応で龍りゅうの群れの出現を察知してはいたものの、警戒心の強さで知られる野生動物が、まさか空中戦の真っ只ただ中なかにまで乱入してくるとは誰も思ってもみなかった。

　総数で一〇〇頭を超える大小様々の龍たちに包囲され、危険なほどの至近距離から吼ほえ猛たける声を聞かされるに及び、勇猛果敢なヴィルドバッハ兵たちも、恐怖のあまりパニックに陥おちいるしかない。

「このままでは護衛機が編隊を維持できません！　危険です！」

「この、下等動物めが……」

　予想だにしなかった妨害の出現に、ホルガー艦長は歯は噛がみする。まさかシルヴァーナは龍を飼い慣らして使役する技法でも見み出いだしたのかと、有り得ない妄想さえ懐いだかせる状況だった。

「対空銃座、龍どもを撃って追い払え！　護衛機の進路を確保しろ！」

「りょ、了解……」

　飛空艦の側面に設けられた銃座が、猛然と火を噴いて周囲の龍たちに弾幕を浴びせる。ただ遊び戯れていた龍たちは、それだけの理由で攻撃を受けるとは慮外だったのか、あっさりと弾丸を浴びて悲鳴を上げながら落下していく。続いて周囲のメルダース隊も龍たちの駆除に加わった。先刻まで人同士が争うばかりの戦場だった空域が、瞬またたく間に龍の絶叫と血ち飛沫しぶきで彩られていく。

「やめろぉぉッ!!」

　カールにとっては、とても正視に耐えられる光景ではなかった。もはや立場も目的も失念し、龍を撃つメルダースに向けて突進しながら、なけなしの機銃弾を発砲する。

　弾は過あやまたず直撃したものの、徹甲弾はただ貫通して抜けるだけで被弾部の機構を破壊するには及ばず、撃たれたメルダースはぐらりと姿勢を崩したものの墜つい落らくには至らない。

　むしろ、それまで頑かたくなに格闘戦ドッグファイトを避けてきたブリッツフォーゲルが自ら土俵に上がってきたことで、周囲のメルダースが

これ幸いと乱戦に加わってきた。瞬またたく間に包囲され、四方から銃弾の雨が降り注ぐ。カールは咄とっ嗟さの急加速で躱かわそうとしたものの、さすがにその全弾を避けきるのは不可能で、着弾の衝撃が振動となって操そう縦じゅう席を震わせる。

背筋を冷やすカールだが、幸い、機体が即座にそれと解わかるほどの異状に見舞われることはなかった。当たるには当たったが致命打ではない。むしろ問題は、今の衝動的な発砲で機銃の残弾をすべて使い切ってしまったことだった。今度こそブリッツフォーゲルは攻撃手段を失い、それこそ体当たりにでも訴えない限り、侵攻部隊を阻止することは叶わなくなってしまった。

銃弾の脅威を理解した龍たちは一斉に飛空艦から離れ、距離を取っている。いよいよ龍の乱入に煩わされなくなったメルダースの編隊は、満を持してブリッツを排除すべく向かって来た。もはや敗北を受け入れて逃げるしかない窮きゅう地ち。だがそれでも、カールは機首を転じようとしなかった。ここを離れるわけにはいかないと、そう理性を超えた直感の声が言っていた。

おそらく、その輝きを目にするより先に、彼は待ち侘わびた存在の到来を察知していたのだろう。

心でなく機械の目でそれを捉とらえたフェンリルのレーダー員は、恐きょう懼くに声を震わせながら叫ぶ。

「七時方向に巨大な飛行物体！　高速で接近……は、速すぎます！」

「何ィッ!?」

斜め後方の舷げん窓そうを振り向いたホルガー艦長が見たのは、ただ目も眩くらむばかりの閃せん光こうのみだった。

わずか一瞬前には彼方かなたの光点に過ぎなかった巨影が、まるで刹せつ那なの幻の如ごとく視界を過よぎり、飛び去る。フェンリルの乗員の誰だれ一人として、何かと擦すれ違ったのだという認識に実感を持てなかったのは、その去来が一切の音を伴わなかったからだ。

否いな——それは無音などではなく、ただ音が響くより速すぎただけのことだった。

蜃しん気き楼ろうの如ごとき大気の歪ゆがみを目に留めたときは遅かった。超常の速度に引き裂かれた大気の悲鳴と身震いが、居合わせる飛行物体のすべてに叩たたきつけられる。

ソニックブーム——それは天空の覇は者しゃの後こう塵じんを拝した者だけが知る驚異。ホルガー艦長を始めとするヴィルドバッハの百戦錬磨の飛空士たちも、誰一人としてその発生を予期し得ず、故ゆえに〝空の津波〟たる衝撃波の猛威を、完全な不意打ちとして浴びるしかなかった。

とりわけ巨体に釣り合わない質量のせいで突風の影響を受けやすい飛空艦にとって、これは致命的だった。船体側面をもろに叩たたきのめされたフェンリルは完全に操そう舵だを失い、独こ楽まのように旋転しながら真横に流される。

艦橋では誰もが悲鳴を上げながら手近な物にしがみつき、それが間に合わなかった者はしたたかに壁や床や天井に叩きつけられて骨折の痛みに悶もん絶ぜつした。阿あ鼻び叫きょう喚かんの坩る堝つぼとなった艦内で、なお最悪の事態にいち早く気付いたのは副長のベルトラムだった。

「か——艦長ッ！　ヨルムンガンドが！」

はたと舷げん窓そうの外を見み遣やったホルガーは、すぐ眼前にまで迫った三番艦の巨体の影に、絶望の呻うめきを上げる。

「退避……退避しろォッ!!」

叫んだところでもう間に合わないのは誰の目にも明らかだった。もし仮にフェンリルが完全に操舵を取り戻していたとしても、ここまで接近した飛空艦同士に、接触を免まぬがれるほどの機敏さを要求するのは不可能だったろう。

二隻せきは為なす術すべもないままに衝突し、より一層の衝撃で乗組員たちを翻ほん弄ろうした。

光の尾を延々と引いて旋回する帝凰龍カイザードラッヘの姿に、カールはただ陶然と見入るしかなかった。

二度と再び会うこともないと諦あきらめていた、その輝く偉容。喜びに浸ひたされた心からは、一切の迷いと葛かつ藤とうが消え失せていた。
この空に至ったことの意味も、由ゆ縁えんも、すべてを自明としてしまう導きの光。すべてはこの瞬間のためだったと、今ならばきっぱり断言できる。
その飛ひ翔しょうをもってヴィルドバッハ部隊に打ちょう擲ちゃくを与えた後、帝凰龍カイザードラッヘは再び速度を落とし、緩やかに進路を曲げながらカールの前を横切っていく。
誘われているのだと、即座に理解できた。
万感の想おもいに胸が詰まる。かの大空の覇王は、ただの偶然で現れたわけではない。今日を限りにブリッツが二度と離陸することがないのも、その翼に課されたしがらみと責務も、すべて全能のうちに承知なのだ。そして今、役目を終えた白銀の翼を、最後の空へと誘いざなおうとしている。
拒めるはずもない。カールは残り少ない燃料を惜しみなくエンジンへと流し込み、光る翼の後に従った。——一路、北の果てに向かって。

8

フェンリル、ヨルムンガンド双方の被害状況について詳細な報告を待つまでもなく、アングルボダ作戦の頓とん挫ざは明白だった。衝突の折、ヨルムンガンドの艦底にしたたかに叩たたきつけられたフェンリルの艦首によって、空中補給の要かなめである三番艦の捕確架キャッチャーアームは、無惨にひしゃげ潰つぶれて使用不能になっていた。
「……終わったな」

「……はい」
　沈ちん鬱うつに呟つぶやくホルガー艦長に、ベルトラム副長もまた言葉数少なく首しゅ肯こうを返す。だが二人の嗄かれきった声は、無念に切歯扼やく腕わんするのとは程遠く、成すべきを全て成した上で万策尽きたのだという静かな諦てい観かんばかりがあった。
「なぁ副長、我々は……いったい何に負けたのだろうか」
　問われたベルトラムは、しばし黙考した後、戦略家ではなく思想家のように淡々と答える。
「新たなる兵器と、新たなる戦術で、我々は新たなる形の勝利を掴つかもうとして……そして果たせませんでした」
「つまりは、歴史に負けたということか」
　さもありなん、と納得した風にホルガーは頷うなずく。
「歴史……ですか」
「ああ。新たなる伝説を作ろうとして、古き伝説に挫くじかれたのだ」
　白銀の敵手が飛び去った北の果ての空を遠望しつつ、ホルガーは続ける。
「そうだろう？　たった単機で多勢を相手に孤軍奮闘した英雄と、そして天あま翔かける龍りゅう……奴やつらが御お伽とぎ噺ばなしでなくて何だというのだ？」
「……」
「古き良き英雄譚たんだ。その歴史に、我々は負けたのさ」
　侵攻部隊の命運を決した龍たちの襲来は、もはや理屈で割り切れるものではない。何か不可解な天命が働いたものとしか考えられなかった。
　だとすれば――成る程、伝承の浪ろ漫まんに好まれそうなのは、あの颯さっ爽そうたる白銀の孤影であろう。龍たちが孤立無援のシルヴァーナ機に加勢したのは、あれが彼らの属する領域により近い存在だったからかもしれない。
　そういえば、南から飛来したはずのあの機体は、最後にまったく別

の方角へと飛び去っていった。輝く龍に導かれて、戻るべき場所に背を向けて。
「……奴は、何ど処こに行ったのでしょうか？　あの龍に連れられて」
「きっと一緒に、御伽噺の中にでも帰ったのだろう。――そして、我々は現実に立ち戻らねばならん」
　もはや補給の道を断たれたメルダース編隊では、首都攻略戦に臨のぞんでも勝算を持ち得ない。飛空艦によるグライダー弾頭の誘導も、制空権の確保なくしては成功など覚おぼ束つかない。負けると決まった戦いに突き進むことを勇猛果敢の証あかしとするような歪ゆがんだナルシシズムは、いかにホルガーとて持ち合わせていなかった。勝利の栄冠を手放した以上、次は再起へと繋つなぐ生存を賭かけた戦いに挑むしかない。それが、彼らの現実だ。
　Ｅ型メルダースを発艦させた潜水空母艦隊は、その後は半島の南側に回り込み、侵攻部隊と併走する形で航路を西に取っているはずだ。よってホルガーたちは南へと転進し、海を目指すことで退路を見み出いだすことになる。傷ついたフェンリルとヨルムンガンドは言うまでもなく、果たして何機のメルダースが海岸に辿たどり着けるかは、運を天に委ゆだねるほかない。まして共和国の沿岸戦力から逃れつつ潜水艦隊と合流するのは、それこそ至難の業わざとなるだろう。
　こうして、剽ひょう悍かんなるヴィルドバッハ飛空士たちの、長く熾し烈れつな戦いが始まった。

　リヒャルト基地の管制塔では、レーダースクリーンの中央から猛烈な勢いで北へと遠ざかっていく一機と一頭の反応に、ゲプハルト中佐が血相を変えていた。
「何をしている⁉　カール、戻ってこい！　こいつは軍法会議ものだぞ！」
　カールがこのままの進路を維持すれば、もはや推定される航続距離で着陸可能な滑走路はひとつもなくなる。完全な自殺行為と言うほか

ない。が、ブリッツフォーゲルは何の迷いもなく帝凰龍カイザードラッヘの後を追っていく。
『すまない。だが……もう、勘弁してくれないか？』
　通信圏内ぎりぎりから届く雑音混じりのカールの声は、言い訳がましく窮きゅうするでもなく、冗談めかした不敵さもなく、ただ夢見心地のような安あん堵どに満ちていた。
『俺おれも、ブリッツも、最後の務めを果たしたはずだ。……もう、充分だと思ってくれないか』
　充分だ。充分に過ぎる。わずか単機で敵部隊を敗走させ、首都陥落の危機を防いだのだ。どんな勲章でさえも見合わない。英雄として再起したカール・シュニッツは、今度こそ本当にシルヴァーナの未来を勝ち取ったのだ。
　かくなる上はブリッツフォーゲルも解体などさせない。この栄光を語り継ぐためにも博物館に保管しよう。ただの展示品に成り下がるのが屈辱だと言うのなら、記念日の度たびに展覧飛行でも催せばいい。その翼は不朽でなければならない。断じて、ただの戯ざれ事ごとで失われていいものではない。
「馬ば鹿かはよせ！　こんな事をして一体何になる!?　たかが龍りゅうごときが何だっていうんだ!?」
　管制室にはヴァイニンガー博士の強引なねじ込みで、ヘレンもまた同席していた。ゲプハルトの説得では埒らちがあかないと見て取った彼女は、横から強引にマイクを奪い取り、空の彼方かなたの恋人に声を嗄からして呼びかけた。
「カール！　どうして!?　君は生きるために戦う筈はずだったんでしょ!?　もう終わったんでしょ!?　お願い、戻って！　ねぇ、お願いだから……ッ!!」
『ヘレン……』
　通信の声が、悲しみに沈む。だがレーダー上の飛行進路は、依然ゆらぎもしない。
『お前には、いくら謝っても足りない。でもな……俺はもう、そっち

の世界と折り合いがつけられない。……卑ひ怯きょうだって、解わかってる。でも許してほしい。お前と出会うよりずっと前から、俺は道を間違えてたんだ……』
「カール……ひどいよ……こんなの、おかしいよ……」
　泣き崩れる孫娘を、ヴァイニンガー博士は言葉もなく抱きしめる。老いた工学者の胸には、既すでにこうなる予感があった。カールが飛び立つより以前から、もう二度と彼が戻らないのではないかと。
『やっと解った。やっと思い出したんだ』
　詫わびるように、慰なぐさめるように、カールは静かに語り続ける。
『俺は罪を重ねてきた。でも、空を飛ぶことが罪だったわけじゃない。それとこれとは、別だって……今ようやく解ったんだ……』
「いい加減にしろカール！」
　もはや立場や肩書きを抜きにした怒りに駆られ、ゲプハルトがマイクに吼ほえる。
「お前に罪なんぞあるものか！　ただ成すべきを成しただけだろうが！　なぜ認めない!?　お前は——」
『——嘘うそなんかじゃ、なかったんだよ。ゲプハルト』
　一瞬、相手が何を言っているのか途方に暮れて、ゲプハルトは言葉に詰まった。だがそのカールの声こわ音ねが、なぜか若々しい、子供じみたほどに無む垢くなものに聞こえて、はたと記憶に閃ひらめくものがあった。
『俺おれは救世主でも死神でもない。そんな肩書きを背負わずに飛べる空があったんだ。そいつは嘘でも、幻でもなかった。……なぁ、そうだよな？　中尉』
「——ッ」
　忘れうる筈はずもない、罪過の記憶。かつて一人の男の人生を完全に歪ゆがみ狂わせた言葉を、思い出す。
　あの日を境に、彼は円環した迂う路ろへと迷い込んでしまったのだ。そして殺して救い、救うために殺し、その矛む盾じゅんに葛かっ藤とうしながらも、終わらぬ連鎖を巡り続けた。

だが今ようやく、彼は出口を——救済の在処ありかを見み出いだした。迷路の始点であった場所にまで立ち戻れたのだろう。

カールの中で、ゲプハルトの中で、過去と現在が繋つながった。あの日と同じく、カールが言葉を必要としていることを、ゲプハルトはまざまざと理解した。

「——ああ、その通りだ」

涙を流せたならどれだけ救いか。だが、そんな甘えがこの自分に許される筈もない。

だからゲプハルトは冷然と、友に救済の言こと祝ほぎを手た向むけた。

「何ど処こへなりとも行くがいい。カール、そいつはお前の翼だ」

ヘレンが泣き叫びながらゲプハルトに殴なぐりかかってきた。その華きゃ奢しゃで弱々しい拳こぶしを防ぐことなく浴びながら、彼は己おのれの舌を憎悪した。かつて友を壊して生かし、そして今度は救って殺した忌いまわしい言葉の遣い手を。

通信が途絶した。リヒャルト基地のレーダーも、既すでに機体の反応を捜索範囲内から見失っていた。

極北の空を飾るオーロラに照らされて、ブリッツフォーゲルは飛ひ翔しょうする。最強の龍りゅうの翼を追って、どこまでも加速していく。

既に燃料計は意味を失っていた。とうに帰投燃料の最低値を割り込んでしまった今、その針が示す現実に解釈の余地はない。

運命は決定された。ブリッツフォーゲルはもうどこの滑走路にも戻れない。タンクの内容物が燃え尽きた後、鋼はがねの翼はただ自由落下に身を委ゆだね、カールは脱出装置もない封印された操そう縦じゅう席の中に閉じ込められたまま死を迎える。

だが——今この瞬間、一人と一機は限りなく自由だった。

秒読みで迫る破滅など、彼らの意中にはなかった。未来という軛くびきから解放された、その陶酔感だけが胸を満たす全てだった。

速度は五〇〇ノットを突破。躊躇ためらいなくアフターバーナーの点火ボタンを押す。残り時間と同義になった残存燃料が排気ノズルの中で紅ぐ蓮れんに燃える。文字通り命の花だった。カールが生涯を閉じるその瞬間まで、ずっと咲き誇る大輪の花だ。

帝凰龍カイザードラッヘの輝く姿は、もう手を伸ばせば触れられそうなほどに間近だった。カールは崇敬の念に打たれながら、その翼を、堂々たる鬣たてがみを、そして深い叡えい智ちを覗うかがわせる横顔を眺める。その深く澄んだ瞳ひとみに、彼の愛機が映り込んでいるのを見み出いだす。

造波抵抗ウェーブドラグの重圧に機体が軋きしむ。ヴィルドバッハ機との交戦で刻み込まれた二発の弾だん痕こんが、その圧力に負けてじわじわと壊裂を拡ひろげていく様など、むろん操縦席のカールは知りようもない。彼はただ陶然と、龍りゅうの瞳に心奪われて、やるせないほどの共感に胸を締めつけられていた。

今日まであんたは、何者に対しても、前に立つことはおろか横に並ぶことさえ許さなかった。だから今まで誰だれ一人として、あんたの目を覗のぞき込んだ奴やつはいなかった。

速すぎたあんたは、あまりにも孤高に過ぎた。それが、悲しくて、寂しい。

そう、誰も知らなかったのが、惜しくてならない。——あんたは、こんなにも綺き麗れいな、優しい目をしてたっていうのに。

何な故ぜ、飛ぶのか？

何故、挑むのか？

いま再び問いかける眼まな差ざしに、カールは笑顔で肩を竦すくめる。そんな答えが欲しいのか？　と。

そこに、空があったから。——ただ、それだけのことなのだ。

意味などない。もし魚に生まれたなら陸を目指しただろう。もし渓流に生まれたならば大海原を目指しただろう。

未知の暗くら闇やみを前にすれば、そこに踏み出さずにはいられない。愚かでも、無価値でも、それが巡り巡ってどのような意味を持つ

ことになろうとも——

　そうやって、猿でなく、野人でなく、ヒトはいまヒトとして此こ処こに在る。

　ただ意味や価値のみで生きられたなら、誰もがもっと慎つつましく矛む盾じゅんなく、野に咲く花のように在れたのだろう。だが生あい憎にくとヒトは違った。カール・シュニッツは違った。ただ、それだけのことなのだ。

　至らぬものに手を伸ばす。その祈りが、その悲願が、彼を此処まで連れてきた。そして彼より後の誰かを、もっと遠くまで連れて行く。

　いつか、問われた。ヒトは何な故ぜ飛ぶのかと。

　ならば改めて、答えよう。——見上げたそこが、見果てぬほどに遠かったからだ、と。

「……なぁ、ここまで付き合ってくれたんだ。あんたなら……見届けてくれるよな？」

　いつまでも、どこまでも。

　その果てに挑む者が辿たどり着く先を——

　零下の空に、轟ごう雷らいの音が鳴り響く。

　ついに直進に屈して割れ裂ける大気。天空に刻まれる二輪の波紋。

　そして、もはや裂傷にまで拡ひろがっていた弾だん痕こんは、白銀の翼を付け根からもぎ取り、津波の如ごとき空圧の中で一瞬のうちに鋼鉄の機体を粉砕する。

　後に、シルヴァーナの隣国が擁ようする最北端のレーダー基地が、このときの観測記録を公表している。

　高度三万六〇〇〇フィートを北極圏めがけて飛ひ翔しょうした二つの飛行物体について、最終的に計測された速度は五八四ノット。うち、ごく僅わずかに先行していた片方の反応は途中で消失し、残るもうひとつは索敵圏外にまで飛び去ったという。

9

　暮れなずむ夕ゆう陽ひの中、もう誰だれもいない滑走路で、少年は渾こん身しんの力で幼い龍りゅうの身体からだを宙へと投げ上げる。
　はばたく翼は充分に逞たくましく、もう簡単に大気を掴つかめる。だがそれでも、幼生龍はすぐに翼を休め、滑空してエリックの側そばに戻ってくる。
「……駄目だよ。ジーク、お前はもう行かないと」
　いつものように駆け寄って抱き上げるのではなく、少年は後あと退ずさって小さな龍から距離を取る。その意図が掴めずに、ジークフリートは小首を傾かしげ、後うしろ肢あしで不器用に跳ねながら後を追ってくる。
「駄目なんだよ！　行けよっ！　行けったらっ！」
　エリックは涙声で怒鳴りながら、足元に転がっていた小石を拾い、投げつけた。
　龍りゅうは慌てたようにふわりと飛び立ち、危なげなく礫つぶてを躱かわすと、そのまま二度、三度と羽ばたいて天高く昇り、しばらく鳶とんびのように旋回しながら眼下の少年の様子を窺うかがっていたが、やがて、弱々しく一声啼ないた後、赤く染まる落日の彼方かなたへと飛び去っていった。
　今度こそ本当に、もう誰も戻ることのなくなった滑走路で、独り取り残された少年は、いつまでも静かに泣き続けた。

［エピローグ］悠久の翼

[エピローグ] 悠久の翼

険しい斜面を九つ十づ九ら折りに這はい登る道を、駿しゅん馬めのように颯さっ爽そうと駆ける単車が一台。乗り手は革のジャケット越しにも鍛きたえ抜かれた体たい躯くが見て取れる、屈強な青年だ。

途中、青年は羊の番をしている牧童を見つけると、いったん単車を停とめて、この道の先について問う。ツーリングに訪れる者などまずいない辺へん鄙ぴな山道だけに、牧童は不思議な来訪者の意図を訝いぶかりつつも、とりあえずは知っている範囲のことを教えてやる。

——飛行場？　んん、ああ、あるよ。いや飛行機なんていやしねぇんだから、ただの更地だけどね、ありゃ。むかし軍隊だかイカレた科学者さんだかが建てなすったって噂うわさだが、俺おれがここ来る前の話だからねぇ。まぁこんな所に飛行機が来たって何の足しにもならねぇし、第一、あそこは危ねぇから誰も近寄らんのさ。おっそろしく気性の荒い龍りゅうが一匹、縄張りにしていやがるんでなぁ——

青年は牧童に礼を言い、再び単車で山やま間あい深くへと上っていく。

ほどなく単車は、生い茂る雑草の中、細長く帯状に切り取られた不毛の空き地に辿たどり着く。

風化したコンクリートの舗ほ装そうは、植物の浸食に懸命に抗あらがっているものの、そこかしこの罅ひび割われから芽吹いた草は隆々と背を伸ばし、大地の支配権を主張している。

そこはかとなく鼻に薫かおるジェット燃料の匂においは、干ひ涸からびた滑走路に今なお染みついている残ざん滓しか、それとも追憶がもたらす錯覚だろうか。

不意に、高らかな獣の吠え声が、青年の鼓こ膜まくをどやしつける。

振り仰いだ空には、驚くほどの低空を居丈高に旋回する霞龍ネーベルドラッヘの姿があった。近年、龍は人目に触れるのを厭いとうかのように、ますます奥地へと生息圏を縮めているだけに、こんな場所に居着

いている個体は珍しい。
　青年は眩まばゆい陽ひ射ざしに目を眇すがめながら、頭上の龍の細部を見て取ろうと躍起になり、思わず声を上げて問いかける。
「ジーク！　おぉい、ジークなのか!?」
　霞龍ネーベルドラッヘは、眼下のちっぽけな侵入者についてどういう判断を下したのか、牧童の恐ろしげな忠告とは裏腹に、もう一声嘶いななくと、そのまま何処いずこへともなく飛び去ってしまった。
　はたして龍は、青年の精せい悍かんな風ふう貌ぼうに幼き日のエリック・ヴァイニンガーの面影を見て取ったのだろうか。そればかりは確かめようがない。

　遠乗りの帰り道、エリックはふと寄り道を思い立ち、単車のハンドルを余よ所そへと向けた。
　辛気臭い雰囲気は苦手なので、普段はあまり墓地には立ち寄らない。だが今日ぐらいは験げん担かつぎとして、報告ぐらいはしておくべきだろうと思い立ったのだ。
　最寄りの花屋で献花を買い、御み影かげ石いしの墓標の列から、目指すひとつを探し求める。故人の波は瀾らん万丈な生涯とは裏腹に、その何の変哲もない墓は、素知らぬ顔で周囲の墓標に紛れ込んでいた。見た目でそれと判別はつかないが、この墓には他と一線を画す点がひとつある。——中の棺が空なのだ。
「……よぉ、カール。久しぶり」
　エリックがあまりこの墓地を訪れることがなかったのは、中身のない墓を詣もうでる虚むなしさもさることながら、墓碑銘に刻まれた名前の男を死者として実感することが、未いまだにしっくり来ないというのがある。
　一五年前、北極圏で消息を絶った人類初のジェット航空機は、その残骸はおろか搭乗員の遺体さえ回収されることはなかった。
　何処いずこへともなく飛び去って行った彼は、まあ、もう人の世にいないことは間違いなく、ならば体裁として墓石の一つも必要になるの

は理解できるのだが。
　墓石に刻まれた碑文は、ごく簡潔だ。
『カール・シュニッツ　享年二四　彼は音よりも速く駆け抜けた』
　骸むくろがなくとも霊魂の眠り場だというのは牧師の言い分で、エリックからしてみると、あの男の魂がこんな狭苦しい墓穴の中で大人しくしているとも考えがたい。きっと今もなお、何ど処こか遠い空の果てを飛び続けているのではないだろうか。――あの、白銀に輝く翼と共に。
　とはいえ、空っぽの墓に向けて語りかけるのが虚しいばかりかといえば、そうでもない。
　この墓標は、カール・シュニッツという男が生きた証あかしを形に留とどめて残す唯一のものだ。未いまだ地上に残っている彼の居場所は、もうここしかない。彼岸と此し岸がんの唯一の接点なのだから、たぶん伝言板程度の役には立つと思いたい。
「そっちじゃ、爺じいさんとは上う手まくやってるかい？　俺おれたちは、まぁともかく元気でやってるよ。姉さんは小言ばっかりだし、長官とはしょっちゅう喧けん嘩かになるし……みんな、相変わらずだよな」
　一五年の歳月は、人を、世界を、大きく変えたようにも思える。だがカールを前にして語ろうと思うと、結局のところ、何も変わっていないような気がしてくるから不思議だ。皆、彼と共に生きた頃ころと同じように笑ったり、同じように泣いたりして、生きている。相変わらずだと、きっとカールなら呆あきれた風にそう苦笑して言うことだろう。
「今朝、あの飛行場に行ってきた。昔のまんまだったよ。ジークとも会った。あいつが今でも留守番をしてくれてるらしい」
　変わり果てたヴァイニンガー飛行場の有あり様さまを目にすれば、物寂しい気分になるかとも思ったのに、意外とそんなこともなかった。かつてあの場所で過ごした栄光の日々は、たしかに彼方かなたのものにはなってしまったが、それは過ぎ去ったというより、どこか遠く離れ

た場所で今なお続いているような気がしてしまう。
　一五年……もうそんなにも経たつのだ。まるで昨日のことのようだというのに。
「あんたは……誰がなんと言おうと、正真正銘の英雄だった。あんた自身は望まなかったかもしれないが」
　追憶に想おもいを馳はせ、エリックは憧しょう憬けいとともに見上げた面影を思い出す。その子供じみた言葉と木ぼく訥とつな声を。いつも彼方かなたにあった眼まな差ざしを。
「俺おれは……どうなのかな？　こんな風に俺のこと、いつか誰かが思い出してくれるかな？」
　まだ墓穴に入るつもりはない。だがそれはエリックだけの思おも惑わくであって、運命がどちらにどう転ぶかは結局のところ知りようもない。とりわけ彼は、これより一世一代の大一番に挑もうとする身の上である。
「いよいよ、明日だ。カール、見守っててくれるか？」
　墓標は沈黙のまま返答を寄越さない。が、訊きくまでもなかった問いだとも思う。たとえエリックの仕業でなかったとしても、空で起こる出来事を、あのカールが見過ごすはずがない。きっと物見高くはしゃぎながら眺めていることだろう。

　翌早朝、まだ東の空が白みはじめるよりも先に、ヴァイニンガー家のアパートは窓に光を点ともした。
　祖父の遺のこした資産や特許収入によって、経済的には何の不自由もないエリックとヘレンだったが、姉弟が共に今なお郊外の質素なアパート住まいに甘んじているのは、二人が住居より仕事場に比重の傾いた人生を邁まい進しんしているからである。
　エリックは姿見の前に立ち、礼装の空軍制服にまったくの落ち度がないことを繰り返し確認した。おそらくこの格好でありとあらゆる新聞の一面を飾る羽目になるのだろうから、油断も隙すきもあったものではない。たしか記憶の中の祖父はこういうところに全まったく無む頓

とん着ちゃくだった気がするが、エリックの立場だとそうもいかない。宮仕えの辛つらさというやつだ。

　服装の確認に加えて、『自信満面の微笑ほほえみ』の予行演習を二、三度繰り返した後、ようやく自分に合格点を出したエリックは、既すでに朝あさ餉げの支度の音が始まっているダイニングキッチンに向かう。

　食卓には、ナイトガウンの上からエプロンを着たヘレンが、いつもより格段に豪勢なメニューを並べていた。

「おはよう、姉さん」

「おはよう」

　相変わらず、贔屓ひいき目めを抜きにしても美人なんだがなぁ、とエリックはしみじみ思う。学究一筋に身を捧げるうちに、いつしか通り一遍に語られるところの婚期を逃して久しいヘレンではあるが、それでもその凜りんとした挙きょ措そに今なお美しさがあるのは、充実した人生に対する誇り故ゆえだろうか。

　ヴァイニンガー飛行場が閉鎖された後、大学に戻った彼女は専攻を変えて研究に打ち込み、今では龍りゅう研究の第一人者として斯し界かいにその名を響かせる女傑である。

　とはいえ、浮いた話が皆無かといえばそうでもなく、現に長期戦の構えで根気よく求婚を続けている男が一人いるのをエリックは知っている。弟から見てもまんざら悪くない組み合わせではないかと思うのだが、ヘレンは未いまだに断固拒否の姿勢を崩さない。

「あんたの好物ぜんぶ作ったら、こんな量になっちゃった」

　窓の外がまだ暗いせいもあり、テーブルの上の様相は一見すると錚そう々そうたる晩ばん餐さんのそれだ。

「大げさなんだよ、姉さんは。これ朝飯って量じゃないぞ？」

　そうは言っても、事実として料理はことごとくエリックの好物だったせいもあり、食事は大いに捗はかどった。

「まぁ、この鰯いわしサラダが食えただけでも、俺おれは充分に満足なんだけど」

「カールもそれ、大好きでね。あの頃ころは毎日のように作ってたもんよ」
「……そうだったね」
　ヘレンの方から彼の話題を口にするというのは珍しかった。あるいは今日という日が特別だったせいかもしれない。
「きのう、カールに会ってきたよ。……見守っていてくれって頼んできた」
「あの人に、そんな度量があるのかしら？」
　まるで古女房のように遠慮なく、ヘレンは小こ馬ば鹿かにしたように鼻を鳴らす。
「いつだって自分の飛行機のことばっかり。他人のことを気にかけるなんて、一度もなかった人なのよ？」
　この言われようには、エリックとしても少々憮ぶ然ぜんとならざるを得なかった。
「どこの国のパイロットでも、カール・シュニッツは憧あこがれなんだ。俺たちの守り神みたいなもんさ」
「神様になんかならないで、生きて還かえってほしかったわ。私は」
「……」
　厳おごそかな声でそう返されると、エリックとしても返す言葉がない。
　大方の料理を平らげたところで弟の胃袋が降参すると、ヘレンは食器を片付けてコーヒーの用意を始める。
「……姉さんは、まだ許せないのかい？　カールのこと」
「私もこう見えて、情が深い女だからねぇ」
　弟のカップにコーヒーを注ぐと、ヘレンは手にしたサーバーをテーブルに置き、空あいた両手で背中からエリックの肩を抱きしめた。
「こんな風にして男を見送るのは、これで二度目」
「……」
　長い歳月のうちに、ヘレンの胸の傷は癒いえたのかもしれないが、その疵きず痕あとまでも消し去るつもりはないのだろう。今も疼うずく

のであろうその痛みを思って、エリックは返す言葉もなく沈黙する。
「無事に帰ってらっしゃい。もう姉さんを泣かせちゃ駄目。さもないと、今度こそ許さないわ」
「わかってる」
　エリックはきっぱりと頷うなずいた。流石さすがにこういった甲か斐い性しょうについては、カールよりもましな男になろうと常つね日ひ頃ごろから心がけている彼だった。
　やがて玄関の外に、静かながらも威圧的なエンジン音が響くのをエリックは聞き咎とがめた。基地からの迎えの車だ。窓の外を検あらためて、それが普段の武骨な四駆車でなく、来らい賓ひん送迎用の黒く艶つゃやかなセダンだと知り、エリックは少なからず仰天した。今日の彼の身柄については、提督の次ぐらいに重要人物なのだと言い含められていたが、どうやら冗談事ではなかったらしい。
「お迎えだ。行かないと」
「そう」
　エリックはきっちりと制帽を被かぶり、凛りん然ぜんたる空軍将校としての出で立ちに総仕上げをする。
「見えるのは、何時ごろだっけ？」
「ここからなら、たぶん最初は夕方の五時から六時の間。あとは九〇分おきに」
「わかった」
　玄関に立つ弟に、ヘレンは普段と変わらぬ軽い抱ほう擁ようで別れを告げる。
「じゃあ、行ってくる」
「気をつけて。姉さん、見てるからね」
　そうして表に出たエリックは、思いのほか冷え込む朝の爽そう気きに身震いした。
　彼の人生において、おそらく一番長い一日の始まりだった。

　第二次ヴァルハラ戦役の勃ぼっ発ぱつにやや先さき駈がけて開設された

リヒャルト空軍基地は、英雄カール・シュニッツと愛機ブリッツフォーゲルが最後に離陸した場所として――公式記録では、そういうことになっている――歴史に名を刻む施設である。

　基地はその後、様々な遍へん歴れきを経て、その名称もろとも設備内容も一新されて現在に至る。近頃は『ＳＦＶＬＲ』という略称が広く一般に定着してしまったせいで、その正式名称で呼ばれる機会はあまりない。が、門前に据すえられた大理石のプレートには、長々と『シルヴァーナ航空宇宙研究所』の表記を掲げている。

　ＳＦＶＬＲのレセプションルームで記者会見に臨むゲプハルト空軍少将は、毎度ながらのカメラ映えで取材陣を魅了していた。

　二度に渡る戦争で残した数々の功績と名声に加え、持ち前の端正な風ふう貌ぼうは、不惑を過ぎて尚なおのこと威厳を増した恰かっ幅ぷくも相まって、空軍のいわゆる『顔役』を務めるにあたって充分な資質であった。

　そしてシルヴァーナの威信を賭かけた今回の有人ロケット打ち上げ計画を指揮することにより、彼の経歴にはまた一つ輝かしい栄誉が加わることになる。いずれは政界に乗り出すのではないかという噂うわささえ真まことしやかに囁ささやかれているのも、無理からぬ所だと言えよう。

「――これより人類の歴史が、どれだけの長きに渡り栄華の記録を書き連ねていくにしろ、今日という日の意味合いが色いろ褪あせることは決してありません。今日、我らが同胞の一人はついに母なる星のかいなを離れ、夜空を巡る星たちの世界へと足跡を記すのです」

　朗々とマイクに向けて謳うたう口こう舌ぜつは、もはや一軍人のものというより、一流の扇動家じみた闊かっ達たつささえ備えている。

「初の有人宇宙飛行士となるエリック・ヴァイニンガー大佐は、皆さんご存じの通り、わがシルヴァーナが誇るジェット機の父、グスタフ・ヴァイニンガー博士を祖父に持つ生え抜きのパイロットであり、航空技術史に新たな頁ページを加えるべくして運命づけられた血筋の直

系です」
　演台の背後に据えられた大型の受像器には、着々と打ち上げ準備の進められる多段式ロケット発射台の様子と、整備櫓やぐらのエレベーターに乗り込むエリック大佐の映像が映し出されている。不格好な宇宙服に着き膨ぶくれした大佐の格好はやや滑こっ稽けいにさえ映りがちだが、そこから窺うかがい知れる真空宇宙の過酷な環境を思えば、笑いが生じるはずもない。
「人一人を大気の外へと送り出す、そのためだけに投じられた巨額の費用について眉まゆを顰ひそめる向きもあります。たしかにこのメテオール計画がもたらす成果は、石油資源でも外貨でもなく、ささやかな満足でしかない。だがそれは同時に、無限の未来へと続く最初の第一歩でもあるのです。シルヴァーナ共和国にて今日の日を迎えた全国民の皆さんは、歴史の証人となることの栄誉を、どうか胸に抱いだいていただきたい」
　鮮やかに演説に結びをつけたゲプハルト少将に、一人の記者が挙手して質問をぶつける。
「周辺諸国は、我が国の宇宙開発が戦略面に転用されることを深く憂慮していますが、それについて閣下のコメントは？」
　大方の関心が集まるに違いない、慎重な回答を要する質問だったが、応じるゲプハルトは動揺の気配など微み塵じんも見せない。
「多くの尊い犠牲と引き換えに我々が手にした平和は何物にも代え難く、この至宝を維持することこそ、我々シルヴァーナ空軍の存在意義でもあります。これら平和維持のための諸判断を戦略などという言葉に置き換えるのは、悪意ある誤用であり、全まったく根拠のない誤解と言うしかありません」
　続く数々の質疑応答に、余裕の構えで対応してくゲプハルトの弁舌は、放送を通じて、ロケットの操そう縦じゅう席で最終点検に勤いそしむエリックと、それを手伝う整備員の耳にも届いていた。
「うちの長官、胡う散さん臭い演説だけは本当に上う手まいよな」
「ああ、まったくだ」

あれだけ口の達者な男が、いざヘレンに求婚するとなると『カールのことで責任を取りたい』などと信じがたいほどの失言をしでかすのだから、つくづく人間というものは解わからないとエリックは痛感する。まぁ、そういう意外な所での不器用さが彼の上官の持ち味でもあるのだが。

やがて記者たちの質問が一段落した後で、ゲプハルトは咳せき払いひとつで区切りをつけてから、レジュメには目を落とさずに即興の一言を付け足した。

「……ただ、これだけは申し上げておきたい。今夜、エリック大佐は衛星軌道から地球を見下ろしながら、地図に描かいてあるような国境線を見つけるでしょうか？　否いな、です。彼が目にすることになるのは、大海原の拡ひろがりと大地の連なり、それだけです。数多あまたの国々の、それぞれに違う人々の営みも、遙はるかな高みから見下ろせば同じ灯火の輝きに過ぎません。これを契機に我々人類は、同じ空のもと、同じ星の大地を共に分かち合って暮らす意味を、改めて考えるべきでしょう」

記者たちの間に湧わき起こる拍手をスピーカー越しに聞いて、エリックの同僚が鼻を鳴らす。

「ふぅん、きれいにまとめたね。あれが本音であってほしいんだが」

「軍人だからって、戦争が好きとは限らんさ」

それなりにゲプハルトとは腐れ縁のエリックは、こういうときには彼の擁よう護ごに廻まわらざるを得ない。

「でもあの人、前の戦争でも結構な数の味方を死なせたんだろ？」

異例の速さで実用化に漕ぎ着け、第二次ヴァルハラ戦役の趨すう勢せいを決定づけたとされるジェット戦闘機『トロンベフォーゲル』……だがその戦果とは裏腹に異常なほど高かった損そん耗もう率は、殆ほとんどが敵機との交戦ではなく、着陸時の事故によるものだった。ジェットエンジンの優越性に注目するあまり、それを操縦するパイロットの練度について充分な見積もりがなされなかったことが原因だったとされている。

「……だからなおのこと、だよ」
　初期のジェット戦闘機開発が、結果として理想の達成に程遠かったことは、今となってはもう歴史的な事実だ。その背景にあった人々の想おもいについては、必ずしも正しく後世に語り継がれるものではない。そう思いながらエリックは、常つね日ひ頃ごろから身につけている御守りを手の中で握りしめる。鎖を通してペンダントにした龍りゅうの牙きば。かつて大空に挑んだ男の様々な想いを受け止めてきた、物言わぬちっぽけな証人は、ただ固く鋭利な感触を掌てのひらに返すだけだった。

　全ての地上作業員が発射台から退避したことを確認した時点で、カウントダウンは残り五四〇秒で一時中断され、管制室で打ち上げの最終決定が問われる。
　ゲプハルトは宇宙船操そう縦じゅう士官、航法誘導士官、運用管制士官のそれぞれに是非を問い、その全員の許きょ諾だくを確認してから、朗々と宣言した。
「ターミナル・カウントダウン開始！」
　残り九分。息を吐つく暇いとまもない緊張の中で、オペレーターたちの正念場が訪れる。
「アクセスアーム格納――完了！」
「ミッションレコーダー作動確認」
「打ち上げ五分前……補助動力ユニット作動」
「液体酸素充じゅう填てん率１００％。余剰量の排出確認」
「メインエンジン、ジンバル・プロファイル・テスト開始――」
　着々と進められていく最終行程の報告を聞きながら、宇宙船の操縦席に背中を固定されたエリックは、制御板の脇わきに吊つるしてある龍りゅうの牙きばを眺めて心を静める。
「打ち上げ一分前……排出バルブ閉鎖。液体酸素タンク加圧開始」
「着氷防止ヒーター停止」
「五〇秒前……船内装置を内部電源に切り替えます」

「三〇秒前……カウントダウンを船内に引き継ぎます」
「了解……ブースター・ジンバル・プロファイル。二一秒前……」
　メインエンジン直下に火花が散り、ノズル周辺に溜たまっていた余剰の気化燃料を焼き払って、爆発の危険を避ける。
　いよいよだ——運命の刻ときに備えて、エリックは下腹に力を込める。
「六秒前——エンジン点火！」
　轟ごう、と大気を震わせて、ケロシンと液体酸素の化学反応が紅ぐ蓮れんの炎を噴き上げる。濛もう々もうと立ち上がる噴煙。テレビ中継で見守る全世界が息を呑のむ。
「四、三、二、一——」
　続く秒読みの間にエンジンは順調に出力を上げ、そして全開に達すると同時にロケットと発射台を固定していた爆発ボルトが起爆。メテオール一号は総質量二八〇トンの巨体をゆっくりと地球の重力から引き剥はがし、眩まばゆい炎を散らしながら天高く舞い上がっていく。
「メテオール一号、リフト・オフ！」
　まずは第一関門突破である。だがなおもロケットの挙動を見守り、管制室の面々はそれぞれに固かた唾ずを呑のむ。
　ロケットはさながら昇日の録画をコマ落としで見るかの如ごとく、噴射炎で煌こう々こうと雲を照らし出しながら高く高く舞い上がっていく。
「高度一七万フィートに到達……第一段エンジン、燃焼完了。パージ！」
　役目を終えた一段目のエンジンが切り離され、遙はるか眼下の海へと落下していく。即座に第二弾エンジンが点火。船内のエリックは、歯を食いしばって激しいＧと振動を堪え忍びつつ、制御板の計器でエンジンの推力をぬかりなく監視し——そしてその芳かんばしくない表示に眉まゆをひそめる。
　地上の管制室もまた、その異常を即座に把握した。
「第二段エンジン出力低下……燃焼停止！」

「まずい、予定より一〇〇秒も早いぞ！」

　即座に遠隔操作による再点火が試みられる。が、沈黙した第二段エンジンは、地上からの信号にも全まったく応じない。

「再点火……反応なし」

『慌あわてるな。手動で再点火する』

　オペレーターたちの間に緊張が走る一方で、船内のエリックは慌てず騒がず、幾度となく積み重ねてきた訓練の手順通りに、緊急事態への対処を講じる。

「再点火、成功！」

　再び火を点ともす第二弾エンジン。皆が安あん堵どに胸をなで下ろそうとしたそのとき、再始動したエンジンノズルが、突如として爆発を起こす。

『うわぁッ！』

　激しい衝撃に晒さらされたエリック大佐の短い悲鳴とともに、通信は途絶する。

「第二段エンジンに異常事態発生！」

「緊急パージ！　急げ！」

　ゲプハルトの叱しっ咤たに応じて、即座にオペレーターが予定外の切り離し操作を敢行。だがほぼ同時に鮮烈な光が雲の上で閃ひらめき、轟ごう音おんを轟とどろかす。

　まさか——と誰だれもが蒼そう白はくになるものの、メテオール一号からの信号は依然健在。異常に陥った第二弾エンジンが二次爆発を起こすより先に、間一髪のところで切り離しが間に合ったらしい。

「船内気圧、急速に低下！　搭乗員応答なし！」

「生命反応は⁉」

「健在です。しかし無線に応答がありません」

　ともかく最悪の事態は免まぬがれたと知って、ゲプハルトはつとめて平静に指示を続ける。

「よし、気絶しているだけだ。引き続き呼びかけろ。機体の状況は⁉」

「現在は慣性飛行中。確認できる損害は軽微です」
「……よし。第三段エンジンに点火。軌道投入シーケンスの再計算を急げ」
　しかし、冷や汗を拭ぬぐう暇すらなく、またもオペレーターが切迫した叫びを上げる。
「第三段エンジン点火……反応なし！　コントロール不能！」
「何だとッ!?」
　ゲプハルトの叫びの後、まるで不吉な天使が通り過ぎたかのように、一瞬の沈黙が管制室のざわめきを阻む。
「……このままでは機体は失速して墜つい落らくします」
「くッ……」
　誰だれもが歯は噛がみして祈りの言葉を探す。が、既に高度三〇万フィートの彼方かなたに取り残されたエリック大佐を救う手立てが皆無なのは、その場にいる全員が承知していた。ただ一人、航法誘導士官だけが諦あきらめることなく執しっ拗ようと無線で船内への呼びかけを続ける。
　だがそのとき、今度こそ誰もが耳を疑う報告が、レーダー監視員からもたらされた。
「メ、メテオールに接近する飛行物体を確認！」
「な、馬ば鹿かな……船外監視カメラの映像は!?」
「六番モニタです！　拡大します！」
　粒子の粗い画像の中、ノイズの合間に映し出される高々度の光景に、オペレータたちは言葉を失う。
　壮麗に輝く光の翼——まぎれもなくそれは、久しく目撃報告の途絶えていた大型龍りゅう、それも『帝凰龍カイザードラッヘ』の通称で知られる超希少種のものに違いなかった。
「なんて奴やっだ……成層圏だぞ!?」
「一体どうやって飛行を……」
　眼前の驚異に皆がどよめく中、ゲプハルトだけは黙したまま、熱を込めた眼まな差ざしで画像に見入る。

彼だけが悟っていた。この絶望的状況の中で、ようやく祈るに値する相手を見みい出いだしたのだと。

頬ほお面づらに、有り得ないはずの爽そう風ふうを感じて、やや戸惑いながらエリックは目を開けた。

そこは不思議な空間だった。青い空と白い雲は眼下にあり、見上げる頭上は夜の色をしている。成層圏だと、すぐ理解できた。

そういえば、そうだった。彼は史上初の宇宙飛行士としてロケットで打ち上げられたのだ。第一段エンジンを切り離したのだから、確かに、そろそろ成層圏を飛んでいる頃ころ合あいである。諸もろ々もろの違和感については都合良く忘れて、エリックはその景観を充分に堪たん能のうした。

ふと、共に傍かたわらを飛んでいる光の翼に気がついた。鋭利に研ぎ上げられた流線型。陽ひ射ざしに白銀の照り返しを輝かせるボディ。見違えるはずもないほどくっきりと目に焼き付いた、その姿——ブリッツフォーゲル。

「カール……あんたなのか？」

そのように見えるなら、その認識で問題ない。と、誰だれかが頭の中で嘯うそぶいた。

どういう意味かと訝いぶかしむより先に、また目の前の景色が変わる。

懐かしいレシプロエンジンの振動が、背中に心地よい。

父や、祖父の操そう縦じゅうで何度も後席に乗せてもらったことがある。だがわけても最高なのはカールだった。荒々しく吹かすようでいて、決してエンジンに無理をさせない。いつも最高最適の駆動にぎりぎりぴったりの回転数を探り当てていく。まるでエンジンと会話しているかのように。

だからこれはカールの操縦だと、すぐに解わかった。いつだったか、虹龍グレンツドラッヘのレースを一緒に眺めた——そう、あのとき

の、エトピリカの後席だ。
「もしかして、迷ってるのか？」
　前席で操そう縦じゅう桿かんを握る、広い背中が訊きいてくる。
「……うん、そうかもしれない。考えないようにしてたけど……でもやっぱり、心のどこかでは疑ってるのかも」
　返答する自分の声の甲高さにも驚きはなかった。カールの夢を見るときは、いつだってエリックは一〇歳の子供だ。
「こんなことをして、何になるのか……無駄なことかもしれないし、誰かに利用されてるだけかもしれない。わざわざ姉さんを心配させて、それだけの意味があることなのか」
「意味、かぁ」
　エリックの言い種ぐさが可お笑かしかったのか、朗ほがらかに笑うカール。
「意味なんてものを探しはじめたら、そいつはまず間違いなく見つからないな」
「……そうなのかい？」
「意味はな、まだ、ないんだ。これから誰かが付け足すことなのさ」
　謎なぞかけのような言い種に、思わずエリックは憮ぶ然ぜんとなる。
「何だよそれ？　どういう意味さ？」
「うん……例えばな。むかし住み処かにしてた洞どう窟くつの岩壁に、つい赤土やら炭やら擦こすり付けてみたりして、そのうちに食いたいと思ってた牛の絵を描かいちまった男がいたんだが。もちろんそいつはそれで腹が膨ふくれたわけでもないし、一万年だかそこいら後になって、その絵を見つけた奴やつが大騒ぎをしても、描いた当人にはその意味なんて伝わりゃしない」
「……そりゃ、そうだね」
「あとはな……ただ喚わめき散らすより、旋せん律りつとか抑揚とかを工夫してみるともっと面白くて興奮すると思いついた奴もいた。そいつだって、別にコンサートホールで拍手喝かっ采さいを浴びたかったわけじゃない。ただの出来心で、〝歌ってみたい〟と思ったから歌った

だけさ。歌うことに意味やら価値やら云うん々ぬん言いだしたのは、それを聴いてた別の連中なんだ」

　まるでその目で見てきたかのような言い種が滑こっ稽けいではあったが、それでもカールの言わんとしていることは伝わった。

「……じゃあ結局、後々誰かにとって価値を持つことになるんだとしても、やっぱり僕個人にとっては意味も価値もないってことだよね？」

「ああ。でもだからって、どうだっていうんだ？」

　エリックの懐かい疑ぎを、あっけらかんとカールは混ぜ返す。

「だってお前、行きたいんだろ？　そう思ったからここにいるんだろ？」

「……」

「その気持ちが既すでに、答えなんだよ。それ以上突き詰めて考える必要なんてない。行ってみたいと思うなら、行けばいい。どんなに遠くて暗い場所だったとしても、な」

　そうは言われても、なお不安だ。

　己おのれの所行の意味を、測ることなくただ成してしまうのは、ひどく無責任なのではないか。それは未来の禍わざわいになるかもしれないというのに。

「……それって、正しいことなんだろうか」

「そいつはお前たちの本性が正しいかどうかによるな」

　カールは、あっさりと突き放すように答えた。

「まぁ確かに、お前たちは碌ろくでもないことをやらかしてばかりだが。でも時々、俺おれたちでさえ驚くようなことをしてのける。今日だってそうさ。まさか空の外側にまで出て行こうとするとはな……正直、呆あきれてものが言えんよ」
　そう意地悪く苦笑しながらも、カールは言い足す。
「でも、お前たちのそういうところは、嫌いじゃない。ついつい眺めていたくなる」
「……」
　語らううちに、いつしかエトピリカは高く高く上り詰め、風防キャノピーの外の空は暗く深く、青空は遠く眼下に離れて、エリックは再び成層圏の虚こ空くうに連れ戻されている。
「で、どうする？　まだ続けようって気はあるのか？」
　カールに返事を促うながされたエリックは、少し考え込んでから、頷うなずいた。
「やってみるよ。折角やりかけたことだしね」

　――目が覚めたそこは、喧けん噪そうの坩る堝つぼだった。
　気圧が低下しているらしく、照明は非常灯に切り替わっている。あっちこっちでランプが瞬またたき警報ブザーが鳴り響き、おまけに通信機では管制室からの割れた音声ががなり立てている。
『コントロールよりメテオール一号、応答しろ！　エリック大佐！　答えてくれ！』
　奇妙な夢の余よ韻いんに呆ほうけながら、ふと右手に目を遣やると、いつの間にか龍りゅうの牙きばのペンダントを固く握りしめていた。これのせいで、あんな不思議な夢を見たんだろうか。
　ともかく気圧調整バルブを掴つかみ、捻ひねる。
　艦内気圧が正常値に戻ったのを、管制室の計器も読み取ったのだろう。無線機の向こうの喧噪がどっと歓声に沸わき返る。
「メテオール一号より管制室……これより、第三段エンジンの手動点火を……試みる」

　まだ気圧低下の影響で心こころ許もとない頭を何度か振って明めい晰せきにしつつ、通信機に向けて宣言するエリック。

『大佐、失速まで時間がない。慎重にいけ』

　応答してきたのは、あくまで楽観を慎む厳格な声。ゲプハルト少将その人だった。

「……了解」

　慌あわてるな。慎重に——自みずからにそう言い聞かせながら、エリックは緊急時訓練の通りにイグニッションシーケンスを遂行。

『メテオール一号、推力回復！』

　管制室からの力強い声に励まされながら、エリックはスロットルレバーを掴つかみ、祈りを込めて押し込む。

　どうか、彼方かなたへ——

　未いまだ善も悪も定かでない、ヒトの業の外側へ——

　第三段エンジンの出力を全開にして飛び去っていくロケットを、天の主たる龍の王は、悠久の眼まな差ざしで見送った。

　そして事は成り、盟約は果たされる。

　飽くなき挑戦者の背中に、天を揺るがす鯨げい波はの絶唱を手た向むけると、帝凰龍カイザードラッヘはその翼を翻ひるがえした。

　管制室では、すべてを見届けたオペレーターが、万感の想おもいで報告を宣じた。

「メテオール一号、第一宇宙速度に到達……ミッション成功です！」

　感極まった喝かっ采さいと拍手に、誰だれもが椅い子すを立ち、小躍りし、互いに背中を叩たたき合う。

　そんな歓喜の渦に、だが独りゲプハルトだけは身を委ゆだねきれず、笑顔の内にどこか虚うつろなものを挿さし挟まずにはいられない。

　その生涯を幾度となく極上の名誉で彩っておきながら、その度たびに彼は、喜びとは裏腹に弔ちょう悼とうの念に囚とらわれるのが常だった。

せめてこの栄光を、あの男と分かち合えていたならば……と。

黄たそ昏がれを過ぎた宵よいの口、誰もいない墓地に独り佇たたずみ、ヘレンは空を見上げていた。

ほどなく日が暮れた後は、吹きさらしの夜風がさぞや染みることだろうが、魔法瓶びんのコーヒーと毛布を持参し、既すでに覚悟は決めている。何よりも今夜の夜空は、カールと一緒に眺めようと決めていた。

やがて——宵の明星よりなお明るく、暮れなずむ空を渡っていく一粒の光輝を見み咎とがめる。

「ほら……あれだよ。きっと」

今こ宵よい、地上より幾多の眼まな差ざしがあの光を見上げ、胸高鳴らせ、人類の未来に想いを馳はせていることか。

誇らしさのあまり胸が痺しびれ、思わず溢あふれそうになる涙を、慌あわてて拭ぬぐう。——もうカールには嫌になるほど泣くところを見られてしまっている。これ以上、彼の前で涙を見せるのは業腹というものだ。

「今、エリックは音速の二五倍で飛んでるんだって。……君、ずいぶん引き離されちゃったね」

冷やかすように語りかけながら、ヘレンは物言わぬ墓石の隣に腰を下ろし、その冷たい表面に、そっと肩を寄せて凭もたれかかる。

「あと、もう二周してくるはずだから。今夜はエリックのこと、ずっと見てようね」

淡い黄昏の残照はやがて消え、ひとつ、またひとつと光を点ともしていく星明かり。

九〇分後——次にエリックが巡り来るのは、きっと満天の星空の直ただ中なかだろう。

高度六〇万フィート、地球周回軌道。

壮麗なる青い惑星の景観に目を奪われるうちに時は過ぎ、エリック

を運ぶ船体は太陽の反対側へと回り込む。
　夜側の眺めはただ暗いだけで、さほどの感慨もなかろうと思っていたが、闇やみに沈む地表のそこかしこに、人の営みを示す灯火が瞬またたくのを見て取ると、エリックは昼側の眺めよりなお深い感激に心を震わせた。
　どんなに夜の闇が深く濃くても、人はそこに光を灯ともす。
　そう、灯さずにはいられない。新たなる光の種を蒔まくために、まだ見ぬ闇の中へと踏み出さずにはいられない。
「……何ど処こまで行くんだろうな、俺おれたちは……」
　エリックは船体の反対側の窓へと視線を転じ、その果てに拡ひろがる無限の深しん淵えんに目を凝らす。
　深い、あまりにも深すぎる極大の闇。だがそこにもいつの日か、誰かがちっぽけな灯ひを点ともそうとするのだろう。彼らは、そうせずにはいられないのだから。
　ああ、そうだ――
　きっと何処までも、果てしなく征ゆくのだろう。

Das Ende

The End

虚淵玄
Gen Urobuchi

ゲームメーカー「ニトロプラス」所属の脚本家。２０００年『ファントム-ＰＨＡＮＴＯＭ ＯＦ ＩＮＦＥＲＮＯ-』にてデビュー。流行を追わない独自のスタイルが作品を発表するたびに話題を呼ぶ。近年はビジュアルノベル『ＦＡＴＥ/stay night』の外伝小説『Ｆａｔｅ/Zero』、サンデーＧＸ連載マンガ『ブラック・ラグーン』の外伝小説（小社刊）など、小説家としても活躍中。２００９年４月、脚本家デビュー作が『ファントム～Requiem for the Phantom～』のタイトルでＴＶアニメ化。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

アイゼンフリューゲル２

２０１３年２月22日　電子書籍版発行

者　虚淵玄（ニトロプラス）

行人　佐上靖之

集人　野村敦司

集　望月　充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００９年12月23日　初版第１刷発行

©Nitroplus 2013　ISBN978-4-09-451180-2

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。